

に光榮と尊貴とを冠せたり」或譯者は「光榮と位とを之に冠らす」となす。之は歴史的にも偶意的の意味にも理解することを得。預言者は創造の時人に與へられたる人の權能に就きても云ひ、ハリストスの降生によりて人が受けし所の最後の幸福に就きても云へるなり。始め神は人に「地の諸々の獸畜爾等を畏れ、爾等に懾かん」(創世記)と云ひ、又「海の魚を治めしめん」(全上二)といひ、然る後「蛇及び蜘蛛を踐ましむ」(ルカ福音)と云へり。然れども彼は高尚なることを措きて卑近なることを説話し、前者に就きては之を最も明かに見得る者の判断に委す。而して人が大なる光榮と尊貴とを受くるは、人がハリストスを己の首として有する時、ハリストスの體となる時、彼の兄弟となり、彼と偕に相續者となり、彼の體の像となる時、「モイセイが帕を蒙りしが如きにあらず、我等皆露れたる面を以て、主の光榮を觀る」(コリント後書三)とパウルの云ひし如く、人がモイセイよりも大なる光榮を受くる所の新約の中にある時なり、故にパウルは又認めて「其分に於て已に光榮ありと爲さず、後の光榮の更に愈れるに縁りてなり」(コリント後書三)といへり。預言者の此光榮に就きて言ふ所は偶意的の意味なり。實に吾人が天使と偕に歌隊を成すの時、神の子とせらるゝの時、神が吾人の爲に獨生子を惜まざるの時、は何ものか斯る光

榮と比較し得べき。前に吾人は尊貴なく、光榮なく、而も輕蔑されたる者なりしも、吾人が死を嘲笑するの時、無身なる軍の如き無慾に達するの時、如何なる紫の衰衣如何なる王冠も之より輝かざるべし。アダムは些の惡しきこともなさじ、些の善きことも爲さず、蓋は彼存在せざりしを以て如何なる事をもなし得ざりしに由るして創造の後直に尊貴を受けたりしも、吾人は數限なき多くの罪を行ひて尙大なる尊貴を受けたり。主曰へり「我既に爾等を僕と曰はず、爾等は即我が友たり」(イオアン福音十五)と。天使等は既に吾人を耻ぢずして、剩へ吾人の救贖に勤む。天使がブリッブ及び他の多くの人々に來りしが如き是なり。且つ彼等は人々に福音せり。今や吾人は地上の幸福ならざる幸福の相續者となり、天の幸福と交通し、ハリストスに關與する者となり「獨生子の共與に召されたり」(コリント前)。預言者は「光榮」と「尊貴」とを以て此等のことを表せり。故に他の譯者は將來のことを預告しつゝ、「彼に光榮と尊貴とを冠らせ」と云ふ。「彼を爾が手の造りし者の上に立て」(七)。他の譯者は「彼を爾の手にて造りし者に對して有權者となせり」(テオド)となす。「萬物を其足下に服せしめたり、即悉くの羊、牛、文野の獸」(八)「天の鳥、海の魚、一切海に遊ぶ者なり。主

我が神よ、爾の名は何ぞ全地に大なる(九節)。彼は創造のことを説きしつゝ、天軍のことを述ぶるのみならず、説話を感覺的物にも下すが如く、人々に賜はられたる尊貴のことを云ふに當りても、前に示し、隠密にして無形なる福を述べて、今や彼は特に最も愚昧なる人々の爲に明瞭なる感覺的物に注意せり。何事に止りしか。人に興へられたる地上の權利に對してなり。神は犯罪前に尊貴を受けしめたる人に、犯罪後にも此尊貴を奪はざりしは奇異なることなり。故に預言者は特に注意せられたり。曰く「彼を天使等より少しく遜らしめたり」即ち神よ、爾は罪を犯し、者を死に審定したるも、死に審定したる後も此賜を人より奪はざりしとなり。視よ、彼は前者のことを云ひて、然る後已に後者のことを云ふは、神の云ふべからざる仁愛を顯さん爲にして、神は此仁愛によりて、犯罪の爲に貶されたる人にも尙光榮の尊貴を冠らしめて、其權利を奪はざりき。而して若し幾何か奪ひたりとするも、是れ尙神の配慮の作爲たりしなり。人の未だ罪を犯さざるや、野獸の上にも權威を有ちしかども、此の權威は犯罪後幾何か滅じたり、人は今も或巧なる方法を以て彼等の上に權威を取るも、恐懼服従を以てす。神は人の凡ての權威を奪はず、又凡ての權威を人に遺さざりしも、

人の食用と勞働とに必要なる動物を其權内に遺したり、然れども多くの野獸は尙其權内にあらず、是れ人が彼等と戦ひて元祖アダムの舊き罪を記憶せん爲なり。斯くの如く動物の充分に吾人に従はざる其事よりも亦大なる利益は生じたり。そも獅子を馴らし之を従はしむるは吾人に何の益あるか。白豹を己の權内に有するは何の益あるか。亦何等の益あらずして唯驕傲自慢に導くのみ。是故に神は野獸を吾人の權外に遺したり、然れど有益なる動物、例へば地を耕す所の牛、衣服を供給する所の羊、貨物を運搬するに荷物を負ふ所の家畜、吾人の食膳を最も裕ならしむるに適當なる魚鳥の如きは之を吾人の權内に委ねたり。

八。人が往々其子を悔悟せしむるが爲に其相續權を剝奪し、又其財産の幾部を剝奪するが如く、神も亦斯く行ひたり、或は之を能く云へば、人は斯くの如くには行はざるなり。人が其子の相續權を剝奪するや、其權利の大部分を奪ひて小部分を之に遺すも、神は大部分を遺して小部分を奪へり、而も人の利益の爲即ち人が他の凡てのものを容易に受けざらん爲なり。然も是れ神の配慮の行爲なり。人の智慧を鋭敏にし、高慢を馴け、怠惰を預防するが爲に、人は容易に凡てのものを受けて輕卒に渡さるゝが故なり。神は生活の要求を満足することの中に或困難を置き

て、人をして或は困難せずして凡てのものを得る様にし、或は困難せずしては得ざる様にせり。神は人に必要なるものなれば特別に勞せずして之を得ることを許せるも、快樂に關するものは力めて勞力を費して之を得しむる様にせり。而して人若し野獸何の益あるかと問はば、吾人は云はん、第一に、彼等は人の靈を謙遜ならしめ、人を勤勉ならしめ、又人の傲慢自負するに際して、無言の動物の畏るべきを見て、其天性の弱きことを記憶せしむ。加之疾病に苦む者は野獸より多くの薬を受く。何の爲に野獸の存在するかを問ふ者は、又何の爲に吾人に粘液及び膽汁あるかを問ふべし。爾等の知れるが如く、此等の粘液及び膽汁の過量に増殖する時は野獸よりも悪しく作動して全體に害を蒙らしむ。又吾人には野獸よりも猛烈なる怒と情慾とありて、之を抑へず之を制せざる人々を搔裂くなり。吾人の目すら野獸よりも悪くして憐なる色慾にて吾人を害しつゝ、吾人を苦ましむるに際して、怒と憤との害あることに就きては云ふ迄もなきことなり。是故に吾人は何の爲に此等のものゝ存するやを問はざらん、乃ち吾人は凡ての爲に主宰に感謝せん。鞭は小兒の爲にありとすれば、猛獸は大人の爲に存す。若し多くの者は斯る危険に際しても斯る傲慢に至る時は、此鞭を取去らば如何なる點に迄惡

の憂慮したらんを想像すべし。視よ、何によりて吾人の身體は斯く疾病あるもの、苦痛あるもの、種々の艱難に服すべきものとして造られ、又地は吾人の勞働によりて地に屬するものを吾人に與へ、吾人の一生涯は骨折と結合せられたるかを、現生は教場なり、而して安逸と怠惰とは多くの人々を亡ぼすが故に、神は勞働及び骨折を以て、此生活と離るべからざるものとなせり、是れ恰も櫓の如きものにして、之を以て靈の傲慢を抑へん爲なり。然れど視よ、主宰は如何に造物、即ち水の深所に泳ぐ所のもの、高く空中を飛翔ける所のものをも巧みに爾に従はしむるを。然れども預言者は何によりて見ゆる凡ての物、草木及び種子を數へざりしか。彼は部分に於て全體を顧して、之を數ふことをば、智識を得んと欲する者に任せたり。次に彼は「主我等の神よ」てふ言をもて、此章を始め、此章の終にも「主我等の神よ」てふ同様なる言を用ふ、吾人も亦神が睿智仁愛にして吾人の爲に慮り、吾人を照管することを驚歎しつゝ、常に此等の言を復唱せん。我が之を言ひしは、聖詠を解明さん爲なり。爾等もし欲せば、吾人は議論を續けて、イウデヤ人に問はん。嬰兒等は何處に聲を發ちしか。此聲は何處に敵を衝き落せしか。神の名は何時大なるものたりしか。彼等は太陽よりも光明にして、真理の力を顯すの外他の時

を示すを得ず。故に預言者は「我爾が指の作爲なる諸天を觀る」と云ひ、  
 モイセイは「元始に神天地を創造り給へり」(創世記)と云へり。  
 然れどイウデヤ人に對しては、以上に述べたることにて足れり。然れども割禮者  
 に屬せざる或人々、即ちサモサトのバウルの從者等はイウデヤ人に則りかつ競ひ  
 つゝ、ハリストスはマリヤより生れたる其時より存在すと云ふが故に、吾等は彼等  
 にも問はん、ハリストスもし其時より存在すとせば、彼は如何にして諸天を造りし  
 か。預言者は爰に同じく「嬰兒と哺乳者との口より讚美を備へたり」  
 とも「諸天」を造りたりとも云ふ。神若し此世界の造者ならば、彼は諸天より前に  
 在り、又マリヤより始を受けず、否マリヤよりも前にありしなり。然れば預言者の  
 睿智を見よ。彼は神を造者として顯すのみならず、至と容易にして萬物を造りし  
 者と顯せり、其言に曰く「我爾が指の作爲なる諸天を觀る」と、是れ神に指  
 あるによりて、斯く云ふにはあらず、見ゆる萬物を造るの容易なるを顯し、及び吾人  
 の知り易き名稱を以て、吾人より上にある所の事を吾人に教へん爲なり。之と同  
 じく預言者が「誰か指をのばして天をはかり、又地の塵を量器もてはかりしや」(イサ  
 書四十二)と云ふ時は、量器又は指を指せるにあらず、之を以て、神の能力の限なきことを

顯さんと欲するなり。或人々は如何にして子(神)は役者神造物主のなりと敢て  
 言ふや。彼は諸天を造るに己が凡ての能力を用ひざりし者なり——其全力に就き  
 ては我何をか云んや——能力の一小部分にはあらず、最小部分をすら用ひざりし者  
 を如何で役者なりと云ふを得んや。若し「父の行ふ所は子も亦同じく之を行はば」  
 (イオアン福音五の十九)子は如何で役者たるを得んや。若し「一は役者たり、而して他は造物主た  
 らば、如何で同じく」と云ふを得んや。又預言者は如何にして或個所に於ては「主よ  
 爾初に地を基けたり、天も爾が手の造工なり」(聖詠百一)と云ひ、而して爰には「我爾  
 が指の作爲なる諸天を觀る」と云ひて、此等の行為を造工と名づくるか。  
 造工は役者に屬せずして、之を成全する者に屬す、而して何人にまれ單に役者たら  
 ば、その作爲は彼に歸せずして、此造工を成全する者に歸す。故に前にモイセイを  
 以て「元始に神天地を創造り給へり」又「海の魚を治めしめん」(創世記一)と云ひしは、子  
 に就きて云はれたるなり。「嬰兒と哺乳者との口より讚美を」なし、彼  
 は亦人を「安問せり」。  
 九。モイセイが父に就きて云ひし所のことを、バウルは之を子にも關せしめて、父  
 と子との全く同等なることを示せり。聖人等若し父に就きて述べられたる所の

ことを無差別にして子に歸し、又子に就きて述べられたる所のことを父に歸する時は、萬物は彼に由りて造られたり——イオアン福音一の三(三)役者の名は何處に於て彼に與へらるゝや。此は何處にも見えざることなり。爾等云はん、彼に由りて「は、是れ子に就きて云へるなり」と。然れども父に就きても同じく云はれざるか。然れば爾は如何に言はれしかを聞くべし「爾等を召して其子に共與せしめたる神は信なり」(コリント前九)又「パウルの旨に由りてイイススハリストスの使徒」(テモソイ後一)又「蓋萬物は彼に本づき、彼に倚り、彼に屬す」(ローマ三十一)と。何の爲に爾等は彼を役者と名づくるか。曰く、父を尊ばん爲なりと。然れども子は云へり「子を敬ふこと、父を敬ふが如くせん爲なり」又子を敬はざる者は明かに父をも敬はず(イオアン福音一)と。彼等は云ふ、子を父と名づけざるは何ぞやと。否。彼は爾等我を父と名づけん爲なりとは云はざりき、然らば何と云ひしか——子たる我を爾等が父の如く敬はん爲なりと。爾若し子を父と名づけんか、是れ凡てを混同するものなり。彼等には同等の尊貴あり、然れどその個々の性質は特別なるものなり。彼は爾等が彼等の個位を混同せざらん爲に「子」と云ひ「父」と云へるなり。而して彼若し父と同一の本性を有せずば、如何で同等の尊貴を自己に要求せんや。然れども爾は云はん、何によ

りてハリストスは自己のことに就きて多くの卑下されたることを云ふかと。是れ彼は吾人に謙遜を教へんと欲し、イウヂヤ人の無感覺なるに由りて肉を衣、聽衆の不完全なるによりて次第に人類を智識に導かん爲なり、其他彼は聽衆の理解力に應じて數々己を卑下して云ひしなり。最も高尚なる表言も只僅かに價值(神の本性の)の一端を示すのみ、或は之を尙能く言へば、爾は神に就きて何事を言はんも、其言ひしことは彼の本性と比較されざる程卑近にして、吾人の見解に應じて言ふに過ぎず。爾は神に就きて如何なる例を云はんと欲するか。神の大なることに就きて何の例を取らんと欲するか。縦し如何なる例を取りて云ふとも、是れ神に就きて僅かに云ふに過ぎず、何となれば大なるものは其如何に大ならんも限あればなり、又神は無限なりと云ふも、此亦神に就きて僅かに云ふなり、何となれば我は神の限なきことを知りつゝ、神の如何なる者たる神の何處に在すかを知らざればなり。爾は神を以て智なる者、或は善なる者、而も無限に善なる者と名づくるも、尙爾は無限に彼の本性に適當なることを毫も云はざる也、然れども表言に對しては適當なる意味を有せざるべからず。若し斯る高尚なる名稱にして、神の本性を全く表言さるときは、此等の名稱をも縮少せんと力むる者は如何で其罪を赦免され

んや。然れば吾人は彼等の集會を避け、獨生子の無始の存在、三位の能力、神子の自  
 有の權其父と分れざることを、彼の經綸の寛忍及び其吾人に關する照管の種々なる  
 配慮を知りて、然れど此聖詠の中に含蓄する寶藏は注意なる人々を此等のこと及び  
 び之より大なることに教ふ最も正確に定理を守り、又定理に適當なる生活を顯さ  
 ん、是れ皆吾人が尊貴光榮の世々に父と聖神と偕に歸する所の吾人の主イエスマ  
 ハリストスの恩寵と仁愛とによりて來世の福樂を受けん爲なり。アミン。

### 第九 聖詠講話

ラベンの死後ダウドの詠

主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を

傳へん(節)。

一。此聖詠は長し。此亦神の睿智の作爲なり。彼は凡ての聖詠を短からしめず、  
 又悉くの聖詠を長からしめず、其分量を以て此書に差異を興へ、長きを以て聽者を  
 怠惰より興し、又短きを以て勞を軽くす。「主よ、我心を盡して爾を讚め揚

げ、爾が悉くの奇跡を傳へん」。讚揚に二様あり、一は己の罪を認むること、  
 一は神に感謝を獻することなり。爰に讚揚とあるは感謝の意味なり。「我心を  
 盡して」とは何の意なるか。凡ての希望と凡ての熱心とを以て、幸福の爲のみな  
 らず、幸福に反對なることの爲にも力を致すことなり。悲哀なる事情ある時にも  
 神を感謝し、萬事の爲に仁慈の爲のみならず、罰の爲にも彼を讚揚することは  
 特に恩を感じ、及び智なる靈に適當なり。大なる報酬は之によりて得らるゝなり。  
 仁慈のために感謝するは神に債を拂ふなり、不幸の爲に感謝するは神を己の負債  
 者となすなり。幸福を樂みて感謝の念を起す者は爲すべきことを行ふなり、然れ  
 ど不幸を忍耐して神を讚揚する者は自己に報酬を備ふるなり。神は斯る感謝の  
 爲に彼處に於てのみならず此處に在りても他の多くの幸福を賜ふが故に、吾人は  
 其不幸をも感ぜざるに至らん。何人も神を感謝するが爲に悲ます。斯くの如く  
 吾人は之よりして尙他の益を受け、悲哀より救はるゝことを得。爾若し財産を奪  
 はれて感謝する時は、其損失の苦は感謝の感情が爾を樂ましむるに若かず。此は  
 悪魔の爲に困難なる打撃なり、此は靈を智なる者となし、現世の事物に對する真正  
 の判断を吾人に教ふ。多くの人々の悲哀に渡さるゝは、此世の事物に就きて眞の

見解を有せざるに由る。然れば智慧に故障ある者は恐るべからざる事を畏れ、  
々々實在せざる事物を恐れ、陰を見て逃走るなり。財産の損失を畏るゝ者も亦之に  
類す。

斯る恐懼は事物其物の性質より生ずるにはあらずして吾人の意志よりす。實際  
に若し此事にして自然に悲しきことならんには、財産を奪はれたる者は皆悲まざ  
るべからず、然るに之を失ふ所の凡てが必ずしも悲まざるは、是れ其事物の性質よ  
り生ずるにはあらずして、靈の不完全より生ずることを意味するなり。暗黒裡にある  
者は、繩を見て數々蛇なりと畏れ、凡ての之を疑ひ、友をも敵と思ふが如く、無智なる  
人々も亦深く闇黒裡にありて事物の性質を知らず、泥濘若くは無益なる雜草の中  
に匍匐して之を惡草なりとは思はざるなり。貪慾に陥りたる彼等は、其惡臭を感  
せざるも、之を離れたらんには感ずることを得ん。醜婦を愛する者己の情慾を棄  
つる時は、明かに其醜惡を知るが如く、貪慾者も亦斯くの如し。然れど爾は云はん、  
我如何ぞ此愛を棄つるを得んと。吾人は再び同一の例に向はん。醜婦を愛する  
者若し斷えず之と相對する時は、自己の煖爐を情慾熾にするも、若し之と離るゝこ  
と數時なる時は、其情慾の漸次鎮靜するが如く、爾も亦暫時之を棄てよ、僅かに遠ざ

かれ、然らば此些少なる距離は大なるものとならん——唯矯正し始めよ。爾に余分  
なる家あらば之を賣りて貧しき者に與へよ、與ふるは失ふにあらずして却て獲る  
ことなるを思へ、損失を見ずして之より生ずる所の益を見よ、爾が愛に之を失ふ所  
を見ずして、其を彼處に於て充分に領有するを見よ。然れば爾も亦常に「神の奇  
迹」を告ぐることを得ん。此事に就きては聖詠の始に云はる。然れど財貨を貪る  
者は、常に此事に習はず、彼は常に收入商法の遺線、契約貨物、依頼家、屋田畑の價値、純  
益等を慮り、此等のことを考へて斷えず心痛す、人の「貨」の在る所には「其心」も亦あれ  
ばなり（音六の廿一）。預言者は此事に就きて言ひ、此事に就きて慮る、僕は常に己の主  
人の爲に配慮するが如く、預言者も亦主に屬すること、即ち主が何事を誠め、何事を  
行はれたるか、未だ行はれずとも將に行ふべきことの何たるかを慮るなり。是故  
に我は爾に誠む、世の多くの計慮を脱せよ、而して前に述べたるが如き配慮を以て  
常に樂み、且つ毎日行はるゝ神の奇蹟、一般の人々および各人の上に別々に行はる  
ゝ個々の奇蹟と一般の奇蹟とを報げよ。生活は斯る奇蹟を以て充さる、而して爾  
は天より或は地より、或は空氣より、或は動物より、或は種子より、或は植物より、或は  
何事より始むとも——何處に於ても裕に報告の端緒を見出さん、爾は律法前にあり

しこと或は律法の下にありしこと或は恩寵時代或は死後或は其臨終の際にありし所の仁慈に就きて云はんと欲するか—爰にも報告の爲に無限の海あるを見出さん。是故に斯く快樂をも利益をも靈の福をも吾人に與へ得る報告の裕なる材料あるに際して貪慾強奪に關する談話を娛みて己の智慧を汚穢なる泥土の中に没するは無智ならずや。

二。爾等若し欲せば天のことを止めて地のこと即ち地の宏大なること其秩序の整全たること其任務性質其常に果實を生ずること其各種の産物種子草木花實牧場庭園に就きて談話せん。次に吾人は各種類の樹木其状態其高さ其芳香其果實其時を失はざること其使用法其他耕されたる及び耕されざる土地をも示さん—何となれば地にあるものは一も無益なるものなく地は金銀銅鐵香料と多様なる藥物を生ずればなり。誰か淡水及び鹹水の利益山の任務—種々なる寶石の産地山中に流るゝ泉建築に適當なる樹木の利益を畫き得るか。此等のものは皆原野の産物なり。原野は動物をも凡ての野獸をも養ふなり。又誰か湖と泉水と河とを畫き得る。子を生んとする婦人は乳の貯蓄を得て新生者に食物を供給するが如く地も亦河と泉とを恰も乳房の如く廣げつゝ豊なる灌溉を草場と庭園とに供

給す。然れども婦人にありては子供は母の乳房に近づかさるべからざるも爰に地は凡ての者に對ひて自ら己の乳房を垂るるなり。

原野は他の利益をも與ふ。原野は最も新鮮なる空氣を供給して呼吸することを得しめ其高所よりは全世界を觀察することを得しめ其閑靜なるは人を冥想に渡し又世の經營より息はしめ頗る身體の健康に適す。誰か唱歌者たる鳥及び野獸の生活状態を畫き得る者ぞ原野は尙他の利益を與ふ。原野は丘陵險崖絶壁を頭しつゝ村の爲に墻壁の代りとなること稀ならず。誰か原野に生ずる草病者に大なる利益を與ふる草を敷へ得る。斯くの如き利益斯くの如き多くの幸福の山野より生ずる時は耕されたる地廣濶なる田野に向はゞ爰に報告の爲に如何なる源泉を見出し得るかを思へ。吾人の體に筋肉骨髓のあるが如く地上にも丘陵溪谷及び肥沃の田野ありて人生を益す。然れども我は斯る巨大なる世界に就きて云はざるべし。爾若し只一の樹木其種類用法果實枝葉其季節を遠へざること等を畫かんと欲せば爰にも亦報告の爲に汲盡されぬ海を發見すべし。然れば吾人は此事に習はん此處よりして吾人に至大なる樂あらん此處よりして益あらん此處よりして得も云はれざる智あらん。故に預言者も之を説明しつゝ「我爾の爲に



慶び祝はん(三)と續く。他の譯者は「我爾を讚め揚ぐ」(アキラ及び)となす。『至上者よ、我爾の名に歌はん』。他の譯者は「爾の名を歌はん」(マフ)となす。神の事を樂むは智識を賦與せられたる重大の目的なり。神の爲に當然に慶ぶ者は世の凡ての快樂を擯斥す。『爾の爲に慶ぶ』とは何の意なるか。言ふ意は我が喜と我が樂とは斯る主宰を有するにありとなり。當然に此快樂を知る者は他の快樂を感せず。此は眞正の意味に於ての快樂なり而して他の凡ての快樂は快樂の名あるも、其實眞正の快樂にあらず。此快樂は人を高尚にし、靈を體より自由にし、此快樂は人を天に昇せ、人をして俗界の上に超然たらしむ。此快樂は人を惡より救済す。而も此快樂は甚だ自然なり。若し身體の美を以て心を奪はるゝ者が、生活に於ける他の事物より毫も快樂を感せずして、唯其愛する事物の偽善に向ひて進まば、況て愛すべきが如く神を愛する者は、現世の快樂若くは悲哀を感せざるべし。否何事をも感ずるを得ず、彼は不死なる快樂を樂みつゝ、現世の快樂の上に超然たり、其愛の目的物も亦高尚なるに由る。他の何ものかを愛する者は、其愛する目的物の凋落し又は滅亡するによりて心ならずも其愛する事物を速かに忘るゝに至る、然れども此愛や無限なり、不死なり、此愛や高尚なる喜と大なる

利益とを興ふ、且つ何時も滅びざる所のことを以て一層愛する所の人を活動す。『至上者よ、我爾の名に歌はん』。是れ特に愛する所の人に相應しき事なり。愛する所の人は愛せらるゝ者を讚美調歌す、概ひ自ら其人を見ざるも謳歌して己を慰む。預言者も亦之と同一なることを行ふなり。彼は神を見ること能ざるにより、神を讚揚するが爲に聖詠を作り、唱歌を以て彼と交通し、己の愛を熾にして、恰も彼を觀念するが如し、或は之を尙よく言ひ表せば、唱歌及び聖詠を以て、他の多くの人々をして彼に於ける愛を起さしむるなり。愛する所の者は己の愛する者を讚美頌揚して到處にその名を讚揚するが如く、預言者も亦同じく行ひて『至上者よ、我爾の名に歌はん』と云ふ。

三。視よ、預言者が如何に地より絶ち、己を神に渡して、之に(至上者に)己が全性を結着けたるか。故に彼は斷えず彼の名を復唱して愛する者の行ふが如く、當然に行へり。『我が敵は退けらるゝ時、躓きて爾が顔の前に亡びん』(四)。

而も是れ特に愛する者に相應し、是れ常に吾人を愛する者の仁慈に就きて云ひ、且つ之を以て樂まん爲なり、是れ愛より生じ、又再び愛を發す。預言者が愛に見えざる敵に就きて云へるなりと云ふ者は、誤らざるなり、何となれば、彼等も勇しき

靈に遭遇する時は後方に逡巡すればなり。戈は薄弱なる盾を突きて之を貫くも、堅固にして彈力ある盾を突くも之に些の損傷を蒙らしめず乃ちその鋭鋒鈍りて後方に反撥するが如く靈に於けるも亦斯くの如し。悪魔若し荏弱にして不注意なる靈を見出す時は之に矢を投ず而してその矢は靈の深底に貫くなり堅固にして強力なる靈を見出す時は成功せずして遠ざかり之に些の害をも被らしめざるが故に、二倍或は之を尙能く云へば三倍の利益生ず、即ち彼は靈に些の害を被らしめずして益々之を堅固なる者となし而して自らは夫よりも一層弱き者となれば也。視よ、預言者は如何に神の能力を傳ふるを。曰く「躓きて爾が顔の前に亡びん」。爾は再び神の顔のそばを聞きて之を具體的に考ふる勿れ。彼は爰に神の作動と神の顯現および彼が他の個所に於て「彼地を觀れば地震ふ」(聖詠百三)と云ふが如く、其能力の容易に作動するを顯すなり。彼は爰にも同一の事を顯す。不虔者を亡ぼすが爲には彼の瞥見にて足れり。若し諸聖人の存在にして惡魔の力を無効ならしめば況て神の存在をや若し神の電光顯れて衆人を畏れしむる時は、その不朽の能力は如何に惡者を畏れしめ又之を滅ぼすかを思へ。爾は歌の性質を見るか。爾は預言者が神の能力を傳ふる讃詞に次第あるを見るか。彼は爰

にも「至上者よ、我爾の爲に慶び祝ひ、爾の名に歌はんてふ言に於て重大なる課程を吾人に授く。其重大なる課程とは如何なるものなるか。彼は艱難の時のみならず幸福の時にも忘れざりし所のものなり。多くの者は艱難にて謙遜となり益善行に熱心なる者となるも幸福を樂みては彼が次にイウデヤ人に就きて「神が彼等を戮す時彼等は神を尋ねたり」(聖詠七十七)と云へる如く、不注意等閑なる者となるなり。然れども聖詠者は斯くの如き者にはあらざりき、即ち彼は幸福の時のにも忘れずして勇めり。彼等は「蓋爾は我が判を行ひ、我が訟を理めたり」(節五)てふ言をも少からず恰例に學べり。他の譯者は「我が訟を理めり」てふ言を「我を打衛れり」(ラキ)となす。「義なる審判者よ、爾は寶座に坐し給へり。爾は諸民を憤り、惡者を滅せり」(節六)。「其名を永遠に抹せり」。復び此人の智なるを見よ、即ち彼は自ら敵に復讐せざりしも使徒の「己の讎を復す勿れ」(ローマ廿九)てふ誠を行ひつゝ、神に審判を任すなり。而も是れ唯認むることの必要なるのみならず、彼が不相應の艱難を忍耐したること亦必要なり。彼若し相應に艱難を忍耐したらんには、神は彼の爲に讎を復さざりしならん。「義なる審判者よ、爾は寶座に坐し給へり」。爰に彼は寶座及び座位

を前に立て、人事的に言ひ顯すなり。「義なる審判者」てふ言は義なることは特に神に固有にして、神の本性の特別なる附屬物たることを示すなり。人に就きては斯く云ふを得ず、人々は如何に義なるも常に義によりて審かす是れ時としては無智により、時としては不注意にして義を知らざるによる、然れども神には斯ることなく、知り且つ望みて義なる審判を行ふなり。斯くの如く「寶座に坐し給へり」てふ言は爾は審けり、爾は驕を復したり、爾は報いたりとの意なり。「爾は諸民を憤り、悪者を滅せり」。爾は神が戈をも、劍をも、弓をも、矢をも要せず、此等のものは皆人事的に言ひ顯し、ことなるを見ん、神の爲には唯「憤る」ことのみにて足れり、而して罰せらるべき者は滅びん。然れど爾が一層神の能力を知らんが爲に、左の言を聞け。「其名を永遠に抹せり」(節六)即ち全く滅せり、根と偕に抜き取れり、彼等に就きての記念の消滅するが如くに滅せりの意なり。「敵には武器悉く盡さ」(節七)他の譯者は「破壊されたり」(マスム)となす。エウレイ語に於ては「空くなれり」となす。「城邑は爾之を毀てり」。是れ何の意なるか。言ふ意は、奸計及び不虔の企圖を滅して彼に其武器を奪へりと也。神の怒は斯の如きものなり、即ち神の怒は凡てを滅し、又凡てを盡す。或は「空しくなれ

り」と云ひし他の註釋者の吾人を教ふるが如く、爾は彼等の城邑を毀ちたるのみならず、沙漠をも滅し、城邑をも盡せり。義人は斯くの如く戦をなせり、彼は武器又は戈を用ひず、而も神の扶助を得て斯くの如く己の敵を破れり。故に彼の戦は赫々として名譽あり、勝利も亦莊嚴なりき。「其記憶は驕然として滅びたり」。他の譯者は「是(是と云ふ言)と偕に」(不測の)となす。エウレイ語の譯書には「是(是と云ふ言)と偕に」(是と云ふ言)とあり。「驕然として」とは何の意なるか。或は全然たる亡滅或は艱難の顯著なるを示すなり。而して神が或人々を罰して他の人々を矯正するが爲に、公然と審判を行ふことは、是れ神の人々を照管し給ふ以所なり。預言者が亡滅の明かなることを顯すや斯くの如し。

四。「唯主は永遠に存す」(節八)他の譯者は「坐せん」(ラアキ)となす「坐する」とはイエレミヤも「爾は永遠に存する所の者なり」(預言者ワル)と云へることく、數々神の本性の不變なる意に用ひらる。預言者は一方よりは神の本性の不死を顯し、また他方よりは人類の死を顯しつゝ、數々人々の罰を盡く時に之を用ふ。神の本性と威嚴とは終極なし。此事や断えず記憶せられて吾人に畏を勵む、是れ吾人が其理由によりても、他の理由によりても、即ち神の光榮の威嚴なる

によりても我等自己の本性の微小なるによりても神が永遠に存するに由りても、神が永遠に而も畏るべく罰するに由りても神を畏れん爲なり。何事をか寓意的の意味に解明する必要ある時は之を忘るべからず。時として聖書の言の中にも或他のことを理會すべきことあれども、時としては唯聖書の言の儘に之を理解せざるべからざることあり、例之は「元始に神天地を創造り給へり」(創世記)てふ言の如きは是なり。然れど或言は其言外の意味に理解せざるべからず、例之は「彼は愛くしき鹿の如く、美しき鹿の如し、その愛をもて常によこべ」又「これを自己に歸せしめ他人をして汝と偕に之に與らしむること勿れ爾の泉に福祉を受けしめよ」(箴言五の十)てふ言の如きは是なり。爾若し此等の言に注意を向け、其言の意味を會得せんと欲して、文字の儘に理解する時は、何人にも水をだに與へざることを其だ残酷なりしを見ん。然れど爰には妻のことに就きて云ふなり、即ち妻に對するに貞潔なるべきを云ふなり、妻は配偶同居の潔淨なるに由りて「泉」及び「鹿」と名づけらる。爰には斯くの如きも他の個所に於ては言の儘にも受くべく、又其言を以て表言されたる他の意味を理會せんことを要す、例令は「モイセイ蛇を擧げし如く」(イオアンの十四)てふ言の如きは是なり。爰には其ありしこと、而も實にありしことを信じ、又之を以て

表言されたるハリストスの預象を理會せざるべからず。然れば爰にも聖詠者の語りしことをイウデヤ人に歸する者は誤らざるなり。「義なる審判者よ。爾は諸民を憤り、悪者を滅し、其名を永遠に抹せり。敵には武器悉く盡き、城邑は爾之を毀ち、其記憶は是と偕に滅びたり。」ハリストスを十字架に釘したる者の艱難は全世界に著し、即ち彼等の城邑は破壊され、又悪魔の詭計は万民を治め給ふハリストスの照管の作動によりて空しき者となれり。然れど吾人は智識を愛する者に斯る應用をなすことを止めて、前に述べたる言に就きて解明を續けん。「彼は審判の爲に其寶座を備へたり」他の譯者は「審判の爲に定めたり」(ラアキ)となす。「彼は公義を以て世界を審判し、正直を以て審判を諸民に行はん」(節九)爾は如何に預言者が漸次言語を強むるを見るか。彼は寶座のことを記憶して、木或は他の或物質にはあらず、乃ら義を以て組織されたる此寶座の性質を畫けり。曰く寶座は義を以て基せられたりと。「彼は公義を以て世界を審判す」。最れ現在の審判および未來の審判に就きて云ふなり。世界の審判は彼處にあらん、然れど現世に於ても各人の審判あらん。神は今も多くのことを行ひ給ふは、是れ無感覺なる人

々の照管なくして万有の存在するが如く思はざらん爲なり。衆人若し爰に榮冠を受けずとも之を驚く勿れ蓋彼己に日を定め義に由りて全地を審判せん」(使徒行傳十の三)而して現世は浮世なり苦行の場所なり戦争の時期なり。故に爰にありては人々皆功勞に應じて受けざるも彼處に於ては賞は義人に罰は罪人に備へらる。爰には待つことと恆忍とあり是れ痛悔を以て罪の潔められん爲なり然れど彼處に在りては然らず。然れば殺人者は途にある間は矯正して罰を免れ得るも裁判者の宣告に服する時は劔と劊手と墳墓とは彼の爲に存するなり。現世にありては斯くの如し吾人は現世にある間は或は矯正して罰を避け得るも彼處に逝る時は空しく泣かん何となれば「彼は審判の爲に其寶座を備へたればなり」。「備へたりてふ言を其言の儘に理解する人も誤らず何となれば神は凡そ罰をも榮冠をも宣告をも備へたればなり。神の爲には待つこともなく時もなく猶豫も亦なし然ればパウルが「我等生きて主の來る迄存する者は寢りし者に先だゞざらん」(コリント前四の十五)と云へる如く生ける者は死せし者に先だゞざらん。正直を以て審判を諸民に行はん」。預言者が現世に就き又來世に就きて語る所の如何に智なるを見よ彼は現世に就きて「爾は諸民を憤り悪者を滅

したりと云ひ來世に就きては「彼は審判の爲に其實座を備へたり彼は公義を以て世界を審判せん」と云へり。彼の斯くなすは來世のことを信せざる者が現在の證據を以て承服せん爲なり。「主は貧しき者の爲に避所とならん」(十)他の譯者は「疲れたる者の爲に」(ラキ)となし第三の譯者は「苦しめらるゝ者の爲に」となす。彼は王たりしも數々己を以て卑しき者及び貧しき者と名づけたり然れば他の個所に於て「我は貧しくして乏し」(三十八)と云へり。彼は明かに人間の万事は影よりも空しく善行の外何ものも吾人に屬するものなく且つ凡そ他の一切は外方より着けたる枝葉なることを知れり。而して善行が吾人の所有たることは左の事によりて見ゆ即ち吾人は何處に行かんも己と偕に之を携ふれども其他のものは一切之を携ふるを得ず故に善行は吾人の所有にして其他のものは皆他に屬するものなり。吾人は人々の中より吾人に近き者を己の者と名づくるが如く善行を以て富よりも尙吾人に屬するものと名づく善行は常に吾人に近ければなり。

五。預言者の靈の恩を忘れず且つその智なるを見よ。彼は駒を有し軍隊を有し、その他多くのものを有したれども此等のものを棄て、上よりの扶助を呼び己が

凡ての救贖を神に置けり。彼は我の避難所は軍隊なり、或は金銀なり、或は牆壁なりとは云はずして「主は苦めらるゝ者の爲に避所なり」と云へり、預言者の言ふ意は、神は自ら我に安全を與へたり。其便利にして安全なる、何ものも此避難所と較ぶべきなし、他の避難所は危険に服し、又準備せる避難所は速かに見出され得ずして、時によりても、場所によりても、其他多くの事情によりて、屢々望み得べからざるこゝとあり、然れども此避難所は、唯注意して之を尋ぬる時は、爾の近邊にあらん。「爾よ、爾は我こゝに在りといひ給はん」(イサイヤ書五十八の九)「我は唯近く」に於てのみ神たらんや、遠くに於ても神たるにあらずや(イサイヤ書三十三の二三)。「爰に吾人は走ることを要せず、旅行を企つることを要せず、家に坐しながら此避難所を見出し得るなり。時として神は人々を危難より救ひ、又時としては危難を以て人々を敵よりも榮えしめ、且つ強き者となすことあり。是に依て神は適當なる時に於て危難を與へ、又榮を與ふ。此避難所を見出す者にして謙遜ならば、神は危難と榮とを與ふ、又もし彼等にして全く斯る善行を示さざれば、危難を賜ふのみ、是れ彼等が榮をも受けて高慢せざらん爲なり。而して實に此が數々傲慢に導くことは、榮を受けたるによりて傲れるエゼキヤの例を以て承服することを得べし、然れど神は彼を忘れ給はざりき、乃ち

幸福なる勝利は彼の靈に傲慢を生せしめたるが故に、病を以て彼を悔改に導けり(イサイヤ書三十八の二)「好き時に於て、即ち憂の時に於て、佑助くる者なり」(正教會の原文を譯する)「せり、本文の解釋に便せん爲なり」。「好き時に於て」とは何の意なるか。適當なる時に於て、時を得ての意なり。爰に預言者は二の好き時に就きて云ふなり、即ち神は助くること、適當なる時に於て助くること、是なり。彼は爰に憂を好き時と名づく。何によりて然か、名くるや。憂は知識の母なるによりて、人を死より自由にすることを得、且つ特に神の佑助を牽引すればなり、吾人は憂によりて怠惰と不注意とを滅し、憂によりて祈禱に最も熱心なる者となるなり。雨天は耕作の爲に最も適當の時なるが如く、憂も亦靈のことを慮るが爲に最も好き時なり。吾人は幸福の時に於ても常に神の佑助を要するも、特に憂にある時に於て必要なりとす。彼は「佑助くる者」てふ表言を以て、吾人に或他のこと、即ち吾人自らも實行者たるべきことを勸む、助くる者は働く者に助くれればなり。是故に吾人は爲す所なくして止まるべからず、乃ち己の方よりも亦祈禱を献げ、施濟及び其他凡てのことを爲さるべからず。軍友も自ら戦ふ者に助くるも、元氣を沮喪して作動かざる者には助けざるなり。然れば爾若し神の佑助を得んと欲せば、

爾の爲すべき凡てを爲せ。然ればイオフは扶助を得たり、堅く立ちて自ら戦ひたればなり、使徒等も扶助を得たり、彼等は自ら勤勉者たりしに由る。「爾の名を知る者は爾を頼まん」(節十一)。他の譯者は「望まん」(テキヤ及び)となす。預言者は全世界の教師にして、衆人に知識の寶藏を供へつ、祈禱より教戒に向ふこと數々なり。彼が「爾の名を知る者は爾を頼まん」と云へるや宜し言ふ意は、爾の加勢と爾の扶助とを知る者は、當に艱難より救ふことを約せらるゝのみならず、其艱難の中に於ても錯亂することを許さざる所の堅固なる希望の礎強き盾破るべからざる城を有すとすなり。實に現世のことを離脱して上よりの扶助を希望する者は、當に艱難に際して速かに救助さるゝのみならず、此礎に對する希望にて勵まされし者は、其艱難の中にありても動かす亂れざるなり。然れば三少年は當に火爐の中にありて焚かれざりしのみならず、その中にありて心を亂さざりき、彼等は神の扶助を頼としたればなり。是に由りて他の譯者は「望まん」と云ふ、即ち頼まんの意なり。神に對する希望より生ずる安全は、艱難の時に於て權威よりも一層希望あり、權威は人事なるも、神に對する希望は神聖にして勝つべからざるものなればなり。預言者は神は扶助くる者なり、避所なりと言ひて、之が如

何にして扶助くる者たり、避所たるかをも解明せり。吾人もし常に彼を望み、而して彼が俄に吾人を艱難より救はざるは、是れ吾人を試みん爲なり。神は爾に艱難を受けしめざることを得るに拘らず、之を受けしむるは、爾を最も堅固になさん爲なり、斯くの如く艱難の始に於て之より救ふことを能しつゝ、之を猶豫し、又期限を延引するは、爾の忍耐を固め、爾の希望を練り、神に對する爾の愛を強めん爲なり、神は吾人の失望せざるが爲に、斷えず吾人の艱難を受くることをも許さず、又吾人の罪に陥らざるが爲に、常に幸福を受くることをも許さず。「主よ、爾を尋ぬる者を爾棄てざればなり」。又シラフの書に曰く「目を注ぎて古の人々を見よ、誰か主を信じて辱められたる、又誰か主の畏の中にありて遺てられたる」(二の十)と。然れども何處にも在す神を如何にして尋ねべきか。熱心と勤勉を以て世俗の一切を捨つることを以て得べし。然れば吾人が他の何事かを思想ふ時は、往々眼の前にあり及び手裡にあるものを、此處彼處と尋ねることあり。

六。吾人は如何にして神を尋ね得るか。吾人の思想を神に向け、世俗の一切を遺る時始めて之を得べし。尋ねる所の者は他の一切を心中より放逐して尋ねべき事物に進む。然れば單に尋ねるのみならず「尋ね求めんことを」要す。「尋ね求めむる」

者は自ら尋ねるのみならず、尋ねべき事物を見出すが爲に他人の助力を求む。吾人は世の何ものかを求めて數々見出さるゝとあるも、靈的事物に於ては見出さることなし、乃ち凡そ尋ねる者は必ず之を見出すなり、何となれば吾人が尋ね始むるや否や「凡そ求むる者は得ん」(マテイスイ福音七の八)と神の自ら言ひ給へる如く、神は久しく吾人の苦むことを許さなければなり。「シオンに居る主に歌へ」(十二節)。他の譯者は「居るを」坐する(ラキ)となす。「彼の行爲を諸民の中に傳へよ」。爾は何を云ふか。「天を寶座となし、地を足凳」となし、地の深き處は其手に在る(イサヤ九十四の四)。所の者はシオンに住居し得るか。然り。彼は爰に住居てふ言の下に住居の中に籠居るにはあらで、神の威嚴は無敵なればなり、神が特に此場所を嘉せらるゝこと、此場所の特に神に近きことを意味するなり、是れ斯る寛容を以て自己にイウデヤ人を牽引せん爲なり。然れば吾人に在りても、吾人が特に住居する其家を吾人のものと名づく。然れば神は己を吾人の中に籠めず、特更に吾人の左右に在らすして、吾人の中に住す。聖堂は寓意的の意味に於てシオンと名づけらる。聖書に「爾等の就きし所は乃ちシオンの山及び活ける神の城」(エケレイ福音十二の廿二)とあり。而して聖堂の山と名づけらるゝは、正しく其堅牢、鞏固不動なるによりてなり。山

を動かし得ざる如く、神の殿をも動かし得ず。「彼の行爲を諸民の中に傳へよ」。是れ聖詠者は人々が神の仁慈を傳ふる者となりて、何時も彼の賜を隠さざらんことを欲し、又之が常に傳ふる者又聞く者の幸福とならんことを望むなり。何となれば彼等若し注意する時は、相方共に此よりして益を得ればなり。「蓋彼は血を流す罪を問ふ」(十三節)。爾は神が爰に如何なる行爲に就きて云ふを見るか。仁慈に就きてなり。爰に預言者は又大なる真理を述べ、即ち殺人罪は罰せられずしては止まず、モイセイも創世記に於て「爾等の血を流すをば我討さん」(創世記九の五)と云へる如く、必ず罰に服せらるゝことを述ぶるなり。是れ神の無限の照管最も注意深き配慮の表徴なり。神若し俄に罰せずとも、驚く勿れ、神は罪人に悔改する時を與ふればなり。「彼は苦めらるゝ者の號を忘れず」。又貧しき者が如何に神の慈恵を利用するかを見よ。然れど爰に言ふ貧しき者とは、單に貧しき者にあらず、ハリストスの所謂心の貧しき者(マテイスイ福音五の三)に就きて云ふなり、心の謙遜にして悔改する者の祈禱は殊に聴容れらるればなり。爰には祈禱をも謙遜をも共に勧む。主曰へり「我はたゞ苦み、又心をいたため、我が言を畏れ、慄ぐ者を顧みらるなり」(イサヤ福音六十六の二)。而して謙遜は常に祈禱の聴容らるゝに助く、主は悔改する心に



近ければなり。故に祈禱する者は特に傲慢を遠ざからざるべからず、バズルも怒なく疑なく(テモスノイ前)と言ひて之を要求せり。宜なり、聖詠者が「苦めらるる者」の「號」と言ひしは靈の傾向を「號」と名づけたるにて、聲の音を指したるにはあらず、又彼は「忘れず」てふ言を以て、彼等が斷えず神を呼びしも直に其願ひしものを受けざりしことを言ひ顯すなり。此等の言は如何なる意味を含むや。神は忘れて難を復さずと思ふ勿れ、假令何人の彼を呼ばずとも、斯る事を爲し給ふは神に當然の事なり、而して彼等が呼ぶの時及び呼ぶ者の自ら謙遜なる時は、尙更のことなり。「主よ、我を憐み、我を死の門より升せて、爾が悉くの讚美をシオン」の女の門に傳へしむる者よ、我を疾む者の我に加ふる苦を見よ(十四節)。他の譯者は「爾の讚美」を「爾の歌頌」(マム)となす。視よ預言者が如何に常に祈禱に耽るかを。然れば彼は艱難より救はれ、安全の中においてつ祈禱することを止めず、且つ將來のことを神に願ひつ、「我を憐め」と云ふ。實に吾人は常に神の照管を要す、特に艱難より救はれし時を然りとなす、何となれば、以前よりも困難なる他の戦、即ち怠惰と傲慢との戦は、此際吾人の眼前にありて、悪魔の攻撃も一層強ければなり。是に由りて天の祐助の特に吾人に必要なるは

吾人が艱難より救はれたる後なりとす、是れ吾人が能く幸福を利用せん爲なり。然ればイウヂヤ人はエギベト人より救はれて自負と不注意との殘酷なる戦をなしたるも、彼等は能く戦はざりしによりて、當時殊に死に服せり。彼等は口腹の樂および小膽に對して勇しく立つことを得ざりしも、彼等を亡ぼしたるエギベト人の情慾に倣へり。ダウドもサウルの窘逐及び己が他の敵より救はれて平安を得たる時に於て最も危険なる戦、彼を最も重き罰に導ける所の不節制の情慾に服せり。斯くの如く艱難より救はれたる時は吾人の殊に畏るべき時なり。七。吾人は繋がれたる猛獸をば繋がれざる猛獸程に畏れざるが如く、惡癖も亦憂愁ある時は左程畏るべきにあらず、惡癖は憂愁の時に於て悲哀及び他の桎梏を以て縛らるるも、幸福の時に於ては殊に畏るべしとす。實に幸福が艱難よりも尙多くの惡を生ずるとは吾人の數々目撃する所なり。然ればエゼキヤは戦勝の後に殆ど亡びんとしたり。故に聖詠者は他の個所に於て「我が苦みしは、我の爲に善なり(聖詠百十八)と云へり。彼は爰にも艱難より救はれたる後に慈憐を願ひ、その重き苦を以て慈憐の原因となす。「我を疾む者の我に加ふる苦を見よ」又「我を死の門より升せたり」言ふ意は、我は常に祐助の手を我に與ふる扞衛者を

および照管者に趨り就くとなり。彼が如何に將來の事を祈りつゝ願ひし事の爲に感謝して二倍の善行を顯すを見るか。彼は死の門より我を救ふ者とは云はずして『我を升せて』と云へり神の仁慈は唯艱難より救はるゝことのみに限らず、救はるゝ者をして奇異なる者、光榮なる者、著名なる者、高き者となす。又戸よりと云はず乃ち多くの危険を顯しつゝ『門より』と云へり。『爾が悉くの讚美を、シオンの女の門に傳へしむる者よ』。彼は他人に行ふことを勸告したることは自らも之を行ふ。彼曰へり『彼の行爲を諸民の中に傳へよ』と、今我も同じく行ひ、而して之を行ふには曾に二三人の前に於てせず、多くの觀者の中に於てせん。彼等は『爾が救の爲に喜ばん』。我が榮冠は此中にあり、我が冠冕は此事にあり、是れ爾によりて勝を制し、爾によりて救を得ん爲なりと。然れば吾人も亦或方法によらずして神に救を求め、又其如何なる方法なるに拘らず、方法に由らずして艱難より救はるゝことを神に求めん。我が之を云ふは病める時に於てその疾を軽くするが爲に呪禁を用ひ、他の妖術に趨く者に對してなり。是れ即ち自己の救を求むるにあらざして亡滅を求むるなり、至大なる救は神より受くる所のものなればなり。『諸民は其掘りたる阱に陥りたり』(十六)。彼は

惡癖を『阱』と名づく、何ものも惡癖の如く吾人を亡さしめればなり。何ものも惡人より無力なるはなし、惡人は己の武器にて征服せらる、鐵は鏽より革は蠶蟲より消滅するが如く、罪人も亦惡癖より亡ぶるなり。斯くの如く罪は神の罰を受くるに先だちて自ら之を行ふ者に復讐す。預言者は天の義鞠及び神の佑助に就きて云ひ、而して天の義鞠は俄に顯されずして數々猶豫延期せらるゝにより、多くの者は一層不注意なる者となるが故に、今預言者は罰の遠からざることを云ひ、バズルも其迷謬に當れる報を己の身に受けたる(二十七)と云ひて罰の惡人に至ることを注意せり。然れば視よ、彼は如何に正しき表言を用ふるかを。預言者曰へり『陥りたり』と、即ち強ひて壓抑せられたり、避くべからざる不幸に服したりとの意なり。次に『其藏したる網に其足は繫はれたり』とは、惡人が解くべからざる桎梏をもて己を縛するを云ふなり。此事は使徒等及びイウデヤ人に應じたり。イウデヤ人は使徒等に反抗して之に如何なる害をも蒙らしめざりしも、城邑と自由と其他一切を奪はれて、己を無數の艱難に服したり、使徒等の傳へし道は弘まりて惡意を懷ける人々は滅びたり。然ればワウロンの火爐に三人の少者を投じたる者等は、自ら火爐によりて亡びたり。ダニイルの時にも斯くありき。而もダニイル

の時に之が正しく行はれたり何となれば投せし者親らダニールを坑の中に投じ  
 たればなり然るに三人の少者の時には罪を犯したるは王なりしに何故火爐の側  
 に立ちし者は罰せられたるか。是れ彼等が壓制者の命令に従ひ又金像に叩拜し  
 て己に媚にて抱かれたるに由る。彼は「其藏したる網」てよ言を以て如何に彼  
 等の罪過の非常なるかを表言すを見よ。彼等は己の耻づべき行為を隠し自らも  
 隠れんことを力む。「主は其行ひし審判に依りて知られたり」(十七)。  
 即ち罰しつゝ、誹責しつゝ、復讐しつゝ、知られたるなり。爾は罰の中に尙仁慈のあ  
 るを見るか。罰は管に罰せらるゝ者を一層熱心なる者となすのみならず神を知  
 るの光を弘布し、且つ之によりて一層神が如何に人々に就きて慮るかを見ること  
 を得、然れば主が豕の群に懸崖より投じて海に溺るゝことを許し、時人々は特に  
 驚けり(マルク福音五)の舊約に於てもイウデヤ人等は預言者の云へる如く神が彼等を  
 戮す時彼等は神を尋たり(聖詠七十七)の何故に彼は常に之をなさいるか。仁慈を以  
 てよりは、寧ろ罰を以て善行に興奮せしめられたる人々が強ひらるゝことなく、自  
 由にして善行を爲さんことを欲するに由る。然れども彼等は云はん自由なる行  
 爲をなして悪者たらんよりは、寧ろ強ひられて善人たるは一層勝れるにあらずや

と。強ひられては善人たるを得ず。唯束縛せられて善人たる者は常に善人たら  
 ずして、その自由を得るや悪に歸るなり、然れど自由の行為によりて善人たらん様  
 養成されて善人となりし者は、其善や堅固にして常に善人として止るなり。「悪  
 者は己が手の所爲にて執へられたり」。彼は神の手と云はすして「悪者  
 の手」と云へり。  
 八。爾は預言者が或は上より来る罰、或は惡癖より生ずる罰を願しつゝ、如何に言  
 を多様にするを見るか。上より来る罰は何處にあるか。曰く「主は其行ひし  
 審判に依りて知られたり」と。惡癖より生ずる罰は何處にあるか。曰く「諸  
 民は其掘りたる阱に陥りたり」と。次に彼は惡癖より生ずる罰を像りつ  
 つ「悪者は己が手の所爲にて執へられたり」といへり。彼はたゞ神の  
 罰に就きて云はず、神は屢々待ちて猶豫すればなり、又惡癖より生ずる一の罰に就  
 きて云はず、多くの者は平安にして惡に耽けるに由る、乃ち預言者は己の言を双方  
 のことに對して固むるなり。是故に彼は續けて「悪者は己が手の所爲にて  
 執へられたり」といへり。他の譯者は「己が手」を「己が指」(不明の)となす。  
 斯くの如く爾詭計を行ふ時は、他人に對して之を爲すと思ふ勿れ、爾は自ら己に對

して網を編むなり。「歌なり、變調なり」(スラウ、語の譯)に此等の語なし。他の譯者は「聲は變らず」(譯者)となす。「願はくば惡者、凡そ神を忘る、民は地獄に赴かん」(節十八)他の譯者は「向はん」(ラ、アキ)となす。彼は再び同一のことに止り、惡辭は罰を伴ふの避くべからざること、不虔は死を生じ、罪は艱難を生ずることを證す。「蓋貧しき者は永く忘れらるゝにあらざり、乏しき者の望は永く絶たるゝにあらざり」(節十九)他の譯者は「溫柔なる者を待つことは、永く忘れらるゝにあらざり」(譯者)となす。預言者は平安の常に求むべからざること、説き示しつゝ、「永からず」と言へるは誠に宜なりと云ふべし。若し常に平安ならしめば、如何で忍耐を顯さんや。而して預言者の言ふ意は左の如し、惡人は罰せられて非常なる艱難を受く、神は辱めらるゝ者に恒に凌辱を受くることを許さなければなり。彼は之を以て後者を勵し、前者を畏れしめ、罰を猶豫しては、或者をば最も多く善行に經驗なる者となし、他の者には、悔改に導く所の神の仁愛を指示す。視よ、貧しき者、單に貧しき者のみならず、心の謙遜なる者は如何なる名譽に當るかを、彼等は特に忍耐し得ればなり、あるひは之を能く云ひ顯せば、一は他のものより生ず、即ち謙遜より忍耐を生じ、忍耐より謙遜を生ず。人若し何故に

艱難は謙遜を意味するかと問はゞ、吾人は云はん、艱難は特に善行を爲さしむるに由ると。富者は不安と混雜との中に生活を送るも、貧者は恰も競争場裡にあるが如く、數々艱難との戦に己が力を練習しつゝ、容易に凡てを忍耐す。故にハリストスも富める者の天國に入るの難きことを言へり(十九の二十三)。「乏しき者の望は永く絶たるゝにあらざり」とは何の意ぞや。何時も亡びずして必ず己が果實を受くるを云ふなり。數々目的の達せられず、又努力を失ふことは世間に多くある所なり。然れば農夫は收穫を待ち、商人は利益を待つも、天候悪しきが爲に、共に己が勞働の結果を失ふこと數々なり。然れど神にありては、然らず、其目的は常に必ず達せらるゝなり。而して目的を達することを固く信するの念慮は、少からず吾人を慰むるものなり。「主よ、起きよ、人に勝を得しむる母れ」(節廿)他の譯者は「狂妄者たらしむる勿れ」(ラ、アキ)となす。「願はくば諸民は爾の前に審判せられん」。他の譯者は「爾の顔の前に」(譯者)となす。預言者は多くの人々を支配したる不虔に就きて云ひ、彼等の惡癖、掠奪、貪慾、兇殺に就きて述べ、以て辱められたる者を助けんことを神に願へり。聖人等の仁愛も亦斯くの如し、彼等は己自らの爲のみならず、全世界の爲に慮ること宛も一身の爲に祈るが

如し。『主よ、起きよ、人に勝を得しむる母れ。』主よ、起きよ』とは何の意なるか。難を復せよ、助けよ、不義なる者を罰せよの謂なり。彼は能く『起きよ』又人に勝を得しむる母れ』と云ふが如き直接の表言を用ふ、是れ人の微々たること、地より出でたること、塵たり、灰たることを示さん爲なり。『願はくば諸民は爾の前に審判せられん』此等の言は何を意味するか。彼等は己が罪の爲に審判せらるべし、彼等は爾の恒忍によりて善良なる者とならざりき、彼等に犯罪の答を要求せよの謂なり。『主よ、彼等の上に立法者を立てよ、諸民が己の人たるを知らん爲なり』(節廿一)『變調なり』他の譯者は『變らず』となす『彼等の上に立法者を立てよ』とは何を意味するか。彼等は答を與ふるを欲せずして自ら凡てを處理するが故に、爾は起てよ、彼等に勸告するの代りに之を罰せん爲なりとの謂なり。他の譯者も亦『主よ、彼等をして懼れしめよ』(ラアキ)と表言しつゝ、同様に云へり。視よ、彼が望む所は彼等を罰することにあらずして、彼等が學びて己を矯正し、且つ不法なる生活をなさざらんことなり。彼の言ふ意は、彼等を勸告する代りに罰すべし、常に彼等のみならず、他の者をも亦然すべしとなり。又爾をして此によりて如何なる益あるか、其如何に彼等の疾病

を消滅するかを見せしめん爲に左の言を聞け。曰く『諸民が己の人たるを知らん爲なり』と。言ふ意は、多くの者は之をも失ひ、己が出生に就きて忘れ、無知となり己自らを知らずの意なり。又彼が之を知ることの必要なるは、常に艱難の時のみならず、幸福の時にも必要なることを表言しつゝ、『常に』と附加へたるや、誠に宜し。爾若し今彼等を罰しなば、彼等は強き懼を感じ、彼等に及べる艱難を記憶しつゝ、幸福の至りし時にも己の天性を知らん。

九。爾は預言者が如何に彼等の爲に祈り、又彼等が己の無知を棄てんと欲するを見るか。己自らを知らざるは、真に大なる無知にして、狂氣よりも悪し。狂氣は不隨意の疾病なるも、無知は放肆なる意志の結果なり。『主よ、何を遠く立ち、憂の時に己を隠すや』(節二十)是れ預言者は凌辱められたる者に代りて神に願ひ求めつゝ、毫も神を責めずして云ふなり。患部の切斷を受くる病者が其全く切斷し終らざるに、手術を止めんことを醫師に願ふは、是れ痛傷に耐えずして己の爲に不利益なることを願ふなり、彼等は數々醫師に向ひて、爾は我を苦しめたり、爾は我を亡さん、爾は我を殺さんと云ふ、然れどもこれ無智の言なり、痛傷の言なり。之と同じく多くの苦める者も亦憂愁に興奮せられ、時機を待たずして裁判を受けん

ことを願ふなり彼等は困難に耐えずして病者の如き言を發す。然ればソフィニヤも亦同一の事を云へり(書三の二)。然れども是れ程善き苦行を要求したる舊約に於てありしことなるも新約の開けたる時代に於ては相應しからぬことなり。「悪者は誇りに依りて貧しき者を凌ぐ、願はくは彼等自ら設くる所の謀に陥らん」(廿三)。「蓋悪者は其靈の慾を以て自ら誇り利を貪る者は己を讃む。悪者は其驕によりて主を輕んず」(廿四節)。預言者は自ら仲保者の態度を取りて辱められたる者の爲に願ひつゝ、人の荏弱より生ずる其固有なる悲哀の感情をも表言せり辱めらるゝ人は己を辱むる者に對する罰と當然なる應報を受くるを見ず、不虔者の幸福を受くるを見るに堪へずして悲めばなり、然れど不虔者の爲には此幸福も亦小ならざるの罰なり。次に聖詠者は彼等の罰を受くること、彼等の奸計は彼等自らを陥れんことを願ひて、不虔の耐え得ざることに就きて云へり。然らば如何なる状態に就きて云ふか。「蓋悪者は其靈の慾を以て自ら誇る」言ふ意は、隠すべきこと、耻づべきことの爲に人々は彼を讃稱し、又驚歎すとなり。惡癖にして稱讚せらるれば如何で癒されんや。是は今も屢々あることなり。彼は或者の權威に達したるを稱揚し、他の者の己の

敵に復讐したるを稱揚し、第三者をば衆人の財産を奪ひしが爲に之を智なる人として稱揚す、彼が己を亡したる時彼等は云ふ、彼は成功したりと他の者は他のことを云ひ、靈のことに就きては一言も云はざるなり。彼等は己の悪行より遠ざかりし人艱難を愛する人を速かに稱揚せず、富める者事を敢てする者、陥溺ふ者、益なき種々の責任を受くる者を稱揚す。聖詠者は彼等の惡癖の強まり、之に心を奮はれて自負する迄に至り、尙之よりも惡しきことは、彼等が己の惡癖を耻ぢずして、却て自ら己の行爲を誇るのみならず己に對する他人の讚詞を聽く程迄に惡癖の強まりしことを歎くなり。何事か斯る無智より惡しからんや。「悪者は主を輕んず」。他の譯者は「其靈の慾を以て自ら誇りし悪者と己を讃めし利を貪る者とは主を怒らしめたり。其怒の高まる時は糺さゞらん」(マフ)となす。第三の譯者は「蓋不虔者は其靈の慾に於て自ら誇り、又貪慾者は主を誦れり。不虔者は其怒の高によりて糺さゞらん」(ラキ)となす。而して七十譯者は「悪者は其怒の多きによりて主を輕んじて糺さゞらん」となす。爾は不虔者の狂暴が何れにまで彌蔓るを見るか。預言者は次いで曰く不虔者の貧者を凌辱することに就きては何をか云は

んと。彼は主自らを怒らしむ。預言者曰へり「己が怒の多きによりて」神を「糺さゞらん」と。又他の譯者は「己の高きによりて」即ち驕傲自慢によりてと表言しつゝ之を不虔者に係く。爾は不虔者の無智の大なると其放肆なるとを見るか。彼は近者の敵となり、反對者となり、善行を避くる者となり、惡癖を愛する者となり、又之を讚美する者となる。次に他の譯者は不虔者の神を尋ねず、暗黒に充され、神の眼前に畏を有せざることを表しつゝ「其悉くの思の中に神なしとす」(譯者)と云へるは宜なり。臆は目を盲ならしむる如く、惡癖も亦人の靈を盲ならしめ、人を淵に陥らしむ。「彼の前には神なし」。他の譯者は「其悉くの思の中に」(譯者)となす。「彼の道は恒に害あり、爾の定は彼に遠ざかる」(節廿六)。他の譯者は「爾の審判は取られたり」(譯者)となす。爾は不虔の結果を見るか。不虔者の智慧の光は消え、その思念は鈍り、自ら惡癖の捕虜となる。譬者の數々穴に陥るが如く、不虔者も神の畏を見ずして、常に不虔なる生活をなす。即ち或は敬虔なる生活をなし、或は不虔なる生活をなすにはあらずして、常に不虔の中にあり、彼等は「ゲエンナ」をも、未來の審判をも、應報をも記憶せず、彼等はその罪惡を抑ゆべかりし、善の如き此等のことを排斥して、恰も積載せざる船の

之を管理する所の熱心なる人もなく、暴風怒濤のまに／＼委するが如し。爾は惡者が如何に其惡癖の中に於て罰を見出すを見るか。何もものか、善なき、賈貨物を積載ざる船と、盲者より惡しかるべけんや。

十。然れども己の中に畏神の光を消して不虔の虜となりし惡者は、彼等よりも尙不幸なりとす。「彼は其悉くの敵を藐んじ視る」「其心に謂ふ我動かざらん、代々禍に遭はざらん」と(節廿七)。爾は無智を見るか。爾は表言すべからざる艱難を見るか。爾は漸々成長しつゝある亡滅を見るか。爾は無智者が幸福として尊ぶ所の状態の如何に大なる艱難に充され、如何に其状態の轉倒するを見るか。人々は罪人の罪を稱揚し、其不法を祝す。之は不注意なる者を亡す所の最初の淵なり。

是故に惡事を讃め、又媚諂ふ人々を受けんよりは、寧ろ責め、又諭す所の人々を受くるを優れりとす、何となれば前者は不注意なる者を放肆ならしめ、且つ之をして大なる惡癖に向はしむればなり。然れば彼等は此等の人々をも傲慢に向はしめて、無智ならしめたり。故にバズルも姦淫者に就きて述べつゝ、同一のことをコンリフ人に勸めて「爾等誇りて尙痛哭せず」(書五の二)といへり。最も必要なるは泣くこ

とにして罪人を讀むることにあらず。爾は惡人が當に審定せられざるのみならず、讚美せらるゝ時にさへ極めて放肆なるを見ざるか。又彼は己の無智なると讃めらるゝとによりて己の惡癖を増し神の畏と神の義鞠とを忘れ己の天性に就きてすら忘れたり。眞に神の義鞠に就きて忘るゝ者は己のことをも忘るゝに至らん。視よ、預言者が如何に判断するかを、曰く「我動かざらん、代々禍に遭はざらん」と。人即ち速かに變遷する所の事物を以て圍まれ、無数の變化に服する腐敗すべき者が、斯る想像を養成するに至りては、何ものか斯る判断より無智なるあらんや。そも斯くの如き判断は何處より生ずるか。無智よりす。無智者の幸福を以て樂み、敵に勝ち、讚美歎稱せらるゝは何ものよりも惡しからん。彼は己が状態の變遷を預期せじ、無智にして幸福を利用するも、艱難に遭はんと思はずして、艱難に遇ふ時は狼狽失神するに至らん。イオフは然らざりき、彼は幸福の時に於ても毎日艱難を期せり、故に彼は「我が戰慄き懼れし者我に臨み、我が怖懼れたる者の身に及べり。我は安然ならず、穩ならず、安息を得ず、惟艱難のみ來る」と(イオフ書三)と云へり。他の智者も又「飽足れる時に餓うる時のことを記憶ひ、富裕の日に於て艱難と宛乏のことゝを記憶へ」と(ハの廿五)と云へり。然れども此罪人は嘗て放蕩を

なし、人事の變遷あるを顧みず、己が幸福の基礎を見て之を動かざるものと思惟す。是れ極端なる無智腐敗の徵表にして亡滅の原因なり。然れば敵に勝利を得て讚美さるゝ、富者を福なる者となす勿れ、凡そ此等のことは不注意なる者を不慮の深所に誘引する危険なる淵なればなり。「其口には呪詛と欺詐と詭計とを満て、其舌の下には窘迫と殘害あり」と(廿八)。他の譯者は「不利益なるものあり」と(アキ)となす。「彼は富者と偕に(正教會譯に)埋伏所に坐し、罪なき者を隠れたる所に殺す」と(廿九)。他の譯者は「垣の後に坐し」と(シム)となす。「目を以て貧しき者を窺ふ」。『獅が窟に在るが如く、隠れたる所に於て執へんとす』(三十)。他の譯者は「其陷に於て」と(不明の)となす。「貧しき者を執へんとす、貧しき者を執へ、牽きて入る」。他の譯者は「其誘引に於て」と(不明の)となす。「彼を己の網に捕ふ」と(三十)。他の譯者は「網の中に(譯者)となす。『彼貧しき者を領する時、躡みて伏す』。他の譯者は「己の強き者と偕に弱者を攻撃する時は、身を躡めて隠る」と(アキ)となす。

爾は惡者が如何に猛獸にさへなりしを見るか。預言者は惡者の詭計伏兵陰謀を



願しつゝ、彼を猛獸として畫けり。彼若し貧しき者の財産を要めば誰か之より不幸ならん、又誰か之より憐なる者あらん。我に告げよ、吾人は彼を富める者と名づけんか。之をしも富者と名づけなば、盜賊をも富者と名づくるに至らん。預言者曰く、然らずと。彼若し欺騙きて裁判官の光を暗さば、彼が裁判所の下に穴を穿ち、又夜襲せざることに於て何かあらん。彼は寝ねたる者を掠奪せすとも覺むる者を常に掠奪することに於て何かあらん。彼は之よりも尙破廉耻なることを行ふなり。是故に律法は白晝盜する所の惡漢を嚴罰す。爾は彼の貧しさと偕に其殘忍なるを見るか。其貧しきは、彼が貧者に屬するものを望めばなり、其殘忍なるは、彼が他人の不幸に心を動さず、貧者を憐み助くる代りに自ら之を窘むればなり。然れば其行爲は罰せられずしては止まず、然れども彼が己を強き者と感ずる時、己が目的を達せんと思ふ時、己を勝たれざる者と思ふ時は、亡ぶ、是れ神の睿智、貧しき者の忍耐、惡者の改善し難き事、神の溫柔および恒忍を示さん爲なり。罰の俄に彼に及ばざるは、神が己の恒忍を以て彼を悔改に呼ぶに由る、而して彼若し此恒忍より何の益をも受けざれば、神は罰を以て彼を悟らしむ。惡者に窘迫められし者は、何等の害をも受けずして却て其悲哀によりて最も善なる者となり、最も光榮

ある者となり、神も亦己が溫柔と恒忍とを顯すも、恒忍の後不虔者が實際よりも己を強き者と思ふ時は、之を攻撃して能力と權威とを顯せり、斯くて彼は改善されぬ者となりて最も殘酷なる罰を受くるなり。而して是れ幸福を受くる者の爲に小なる悟道にはあらざるなり。

十一。然れば爾が敵に勝利を得、凡てのもの爾を樂ましむる時は、不注意にして惡しき行に耽らざれ、斯る時は一層恐るべしとす、何となれば爾もし其時警醒せざれば、爾の惡癖は成長して己の爲に辯解すること能はざるに至り、且つ罪を赦免さるゝの希望を全く奪ひ去らるればなり。『彼は其心に謂ふ、神は忘れ己の面を匿せり、永く見ざらんと』(三十節)。視よ、彼は如何なる亡滅の淵に投じ、如何なる判断を爲すかを、其判断の破廉耻なるによりて、敢て明かに言顯し得ずして之を秘し、眞理に對して起たしめ、又己が靈の旨なるによりて、太陽よりも光明なることを暗うするなり。『主我が神よ、起きて爾の手を舉げよ、苦めらるゝ者を永く忘るゝ勿れ』(三十節)。『何を惡者は神を輕んじて、其心に爾は糺さざらんと云ふ。爾之を見る、蓋爾は凌と虐とを鑒みる、爾の手を以て之に報いん爲なり』(三十四節)。不法者掠奪者、貪慾者は罰を受

けざる間斯く云ふも、預言者は彼の判断を排斥しつゝ、神の恒忍に就きて據ひ。不法者曰く、神は己の顔を横向けたり、然れば何時も見ざらんと、彼又反對に云ふて曰く、爾(神)は不虔者が爾の手裡に陥らざる間看視りて恒忍すと。爾の手を以て報いざる間』とは何の意なるか。預言者の表言は人事的にして其意味は左の如し、爾は彼等が極端なる不虔に渡されざる間恒に忍びて待たん、縦ひ爾は其始に於て彼等を止めて亡ぼし得たらんも、爾の恒忍の海や涯際なし何となれば、爾は見て報いずして彼等の痛悔を待てばなり、彼等にして頑固ならんか、彼等が爾の恒忍より如何なる益をも受けざるに至りて罰し給ふなりと。預言者は窘迫せらるゝ人民に就きて多くのことを言ひて、彼が左の「貧しき者は爾に頼る、孤を扶くる者は爾なり」てふ言に於ても如何に同じく表言すかを聞け。此言の意味は左の如し、貧しき者又は孤を扶くるは、爾(神)の業事なり、是は特に爾に適當なりと。而して神は己に屬する者を舍てず、又引渡さざるなり。工師には建つること、舵手には船舶を治め、太陽には照らすこと、自然なるが如く、孤を保護し、手を伸して貧者を助くることは、爾に適當なり、何人も爾の如く、彼等に助けざるなり。是は「頼る」てふ言を以て表言さるゝなり。言ふ意は、他の何人もあるなし、唯爾は孤と

貧しき者の保護者なりとなり。「求む、悪者と罪者との臂を折きて、其惡事を尋ねとも得るなきに至らしめよ」(三十節)。他の譯者は「其不虔を尋ねとも彼自ら得ざるべし」(チオン)となす。彼は罪人其者の破られずして、惡人の勢力、權威、木度の勢力の破られんことを願ひ、次に罪人も亦罰に服し己の行為に答辭を與へんことを願ひ、又其不虔の大なることを表言しつゝ、若し是ある時は、彼は堅立し顯るゝことを得ずして、その行の穿鑿さるゝ時は、消亡して全く隠さるといへり。然れば何人も孤となり、又艱難に遇ひて泣くべからず、彼等の成長するに従ひて神の祐助も亦増加へらるればなり。何人も己が權威を誇りて自負すべからず、是れ不注意なる者の甚だ容易に陥り易き滑なる危険の場所なればなり。「主は世々に王とならん」(七十節)。これ預言者が、罪人の直に罰せられざるを見て疑惑する者に答ふる言なり。言ふ意は、爾は何を畏れ、何を驚くか。主は暫時的審判者なるか。彼の國は終あるか。罪人は今罰せられずば、後必ず罰せられん之を要求する者は永遠に在りて王たるに由るとなり。「異邦民は其地より絶たれん。主よ、爾は謙卑の者の願を聞く、彼等の心を固めよ、爾の耳を開きて」(八十節)。他の譯者は「爾の耳は彼等の心の企圖を聞

けり(ラキ)となす。第三の譯者は「爾彼等の心を聞くが爲に爾の耳を整へよ(マフ)となす。『孤と苦めらるゝ者との爲に審判を行ひ給へ、人が復地上に於て恐嚇を爲さざらん爲なり』(九節)」。爾は預言者が如何に惡人に就きて多く言ひ又之が爲に慮るを見るか。爾の知るが如く、預言者は特に惡を忍耐す。辱めらるゝ理由なくして辱めらるゝ者は唯所有を損失するも辱むる者は非常なる危険に服す。實際斯る人々が病に罹りつゝも之を感ぜざるは小事にあらず。是れ無感覺の極點に達したるものにして、特に憫むべく又不完全なる智慧の徵表なり。小兒は危險物を恐れず、彼等は數々手を伸して火を取らんとす、然れど假面を見ては驚き恐る。貪慾者も亦之に同じ、彼等は毫も畏るべからずして、却て一層安全を得しむる所の貧窮を恐れ、而して凡ての火よりも尙恐るべき所のもの、即ち不正にして集めたる財貨と貪ることゝを此上なく愛するなり。實に貪ることは常に惡たり。是故に預言者は威嚇し、恐れしめ、又斯る無感覺を罰するが爲に起たんことを神に願ひつゝ、常に此貪慾を節すべきを誠しむ。預言者曰らく「異邦民は其地より絶たれん」と、彼は異邦民を威嚇すに亡滅を以てし、又理由なくして辱めらるゝ者の爲に祐助者及び保護者たる

るを神に願ふ、是れ後者を勇ましめ、前者を悟らしめん爲なり。然れば何人も財貨の裕なるが爲に苦められざるべし。驕傲怠惰嫉妬等多くの惡は此貪慾より生ず。然れども爾等もし此等の情慾を脱却せんと欲せば、其根(貪慾)を拔取るべし。根なき時は惡しき植物生せず。此等のことは吾人が唯之を聞かん爲にあらず、乃ち獨正して世々に光榮と權能とのある所のハリストスイイススによる多くの善行を願さん爲なり。アミン。

### 第十 聖詠講話

#### ダウダの詠(ダウダの凱旋歌)

一。「我主を恃む、爾等何ぞ我が靈に謂ふ、鳥の如く飛びて、爾の山に至れ」。他の譯者は「鳥の如く山に上れ(ラキ)となし、第三の譯者は「移住せよ(不明の)となす。『蓋視よ、惡人弓を張り、其矢を弦に注へ、暗に在りて心の義なる者を射んと欲す。』「基壞られたらば、義人何をか爲さん」。他の譯者は「律法にして壞られたらば(マフ)となし、第三の譯者は

は「教にして投棄てられたらば」(不明の)となす。神を仰望む力は大きなものなり。此力は近づく可からざる柵壁し難き牆壁勝たれの援助静なる港破るべからざる城防難き武器勝ち難き力通過すべからざる途なり。武装せざる者は此力を以て武装せる者に打勝ち妻は夫に勝ち子供は此力を以て戦術に経験ある者よりも容易に甚だ強き者となれり。彼等は全世界の上に勝利を博したるも、其敵に勝ちたるは驚くべきことにあらず。万有は彼等の前に己の天性を忘れて之に利益を與へたり、猛獸は己に猛獸たらざりき爐も己に爐たらざりき神を仰望むことは凡てのものを變ずればなり。狹隘なる牢獄猛獸の鋭き齒其天性の猛惡其苦痛の飢餓其臆は預言者の身邊に在り、而して彼等は之を防禦すべき何ものをも有せざりしが、唯神を仰望むことは千百の轡よりも猛獸の臆を強く抑へつゝ、彼等を後方に轉せしめき。聖詠者は此事を思ひつゝ、彼に安全なる場所に避け、逃走して救はるべきことを勧めたる人々に對ひて、「我主を恃む、爾等何ぞ我が靈に謂ふ」と云へり。爾は何事を云ふや。我は己の祐助者として世界の主宰を有し、常に凡てを容易に爲し行ふ者を己の大將及び保護者として有するに、爾は住居はれざる場所に我を遣し、安全を曠野に求むべきことを勧めらるか。凡てを至と容

易に爲し得る者に勝る所の祐助者は曠野にあるか。何の爲に爾は強く武装したる我を、恰も裸體者の如く、武装せざる者の如く逃走せしめ、又放逐者たらしめんと欲するか。爾は軍隊を有し、牆壁及び武器にて防禦せらるゝ者に對して、曠野に逃走すべきことを勧めざりしならん、若し勧めたらんには笑はれん、何故に爾は世界の主宰と偕にする者を窘逐し、罪人の攻撃より流浪逃走せしむるか。我は以上に述べたることの外にも逃走せざる他の理由を有す。神若し助け、而して攻撃する者の罪人なる時は、臆病なる鳥に倣ふことを勧めむる者は甚しき不度に陥らざるか。爾が我に對して備へし軍隊は、蛛網よりも弱きことを知らざるか。此世の王の敵が、何處に行くとも、到處危険に遭遇して、恐懼戰慄する時は、況て萬物を遣りし神の敵をや、彼は何處に行くとも、凡ての人々は彼の敵なり、万有も亦彼の敵とならん、何となれば、天然及び猛獸も神の友を畏れ、万有も之を尊ぶが如く、無生の万物も亦神の敵神の反抗者に對して、武装し、之を攻撃すればなり。視よ、之に由りて、或者は其未だ地に觸れざる前既に猛獸に搔裂かれ、或者は火の焚く所となりて滅びたるを。敵は箭と筒筒とを持し、凡ては彼等に準備せられたり、即ち預言者の曰ふが如く、己に其矢を弦に注へたり、然れども、彼等には何の勢力もなし、吾人は毫も斯るも

のを恐れざればなり、我若し人の矢を發つを見るとも、斯る時にも尙恐れざりしならん。實際武器にして効力なくば何の益あらんや。斯くの如く彼等には勢力なく、神の祝福なし。彼等は詭計を設けて直接に攻撃せざれども、彼等が特に己の矢を暗黒に於て投ずるは笑ふに堪へたり。何ものも詭計を行ふ人の如く無力ならず。他の人々を以て彼を攻撃するの要なし、彼は自ら己の手によりて倒れ己の奸計に由りて滅ぶ。何ものか己の武器にて征服さるゝ者より無力なるあらん。加之ならず彼等は神によりて固められたる吾人を罪人としてのみならず、而も奸計を以て攻撃するのみならず、彼等に如何なる惡をもなさざりし無罪者を攻撃す。是亦彼等を弱き者となすこと少しとせず。刺を蹈む者は(使徒行傳九の五)如何なる害をも之に蒙らしめざるも、自ら己の足を害するが如く、彼等も亦斯くの如し。之と偖に尙彼等の攻撃の力を無力ならしむる所の原因あり。其原因とは如何なるものなるか。預言者曰らく「基壞られたらば、義人何をか爲さん」と。此言の意味は左の如し、彼等は爾の誠と爾の命令とを壞りつゝ、攻撃して爾と戦をなす。眞に彼等は爾の誠而も完全なる「誠を」壞ることに盡力す。或は預言者は之を言ひ或は彼等が律法の犯罪人たることを云ふなり。彼等の弱きことの小ならざる證據

は、彼等が爾の誠を守らずして戦に出でしことにも存す。彼等は爾の命令を聞かざるによりて「義人」に對して戦ひ、又奸計を廻らすなり。  
 二。預言者は敵の弱きを示し、而して之を示すや他の者が示す所の事に於てせず、(故に預言者は他の者が財貨をも、城砦をも、同盟者をも、市街をも、戦術をも有せずとは云はずして、此等のことをば、毫も知らざる者の如くに之を遺て、之を輕蔑し、而して彼等の不法者なること、彼等に對して如何なる惡をも爲さざりし人々を攻撃すること、彼等が神の誠を破ることを云へり)次に之によりても彼等が敵に勝つことの容易なるを顯しつゝ、義人の武裝に就きて云へり。吾人も亦強きものと弱きものとを分ちて、特に笑はるべき人々を畏るゝ所のことを畏るべからず。彼等は實際何事を云ふか。敵は斯る殘酷者なり、奸計を行ふ者なり、多くの財貨と大なる權利とを有すと。然れども我は是に由りて特に彼等を笑ふなり、此等は皆薄弱なるものなればなり。然れども爾は云はん、彼は奸計を爲し得るか。爾は此事に於て我に荏弱きことの新しい状態を示せり。  
 斯る人々の中多くの者は何故に勝つや。爾は能く彼等と戦ふことを得ず、爾は自ら彼等を弱きものとなす所の榮譽權威を切願するに由る。宜しく仇の此原因を

避けて反對者を攻撃すべし、換言すれば謙遜を以て傲慢なる者を攻撃し、無慾を以て利を貪る者を攻撃し、節制を以て不節制なる者を攻撃し、友誼を以て嫉妬する者を攻撃すべし、然らば爾は容易に彼等に勝たん。我が前に述べたるが如く、預言者は反對者の荏弱を顯して、如何に義人の武装することを畫くを見よ。曰く「義人は何をか爲さん」と。乃ち爾は問はん、敵が斯く準備するに際して、義人は如何に武装するかと。聞かれよ。曰く「主は其聖殿に在り、主の寶座は天に在り」(節四)。爾は彼が如何に簡短に其保護を言ひ顯したるを見るか。爾は彼が何を爲せしと問ふか。彼は天に住ひて何處にも在す所の神に趨り就けり。彼は其敵の如く弓を張らず、箭筒を備へず、暗に向はずして、此等の一切を棄て、神に於ける希望を以て、凡てのものに對する防禦となし、又斯ることに、時にも場所にも、武器にも、金銀にも必要を有せず、一の手號を以て、凡てを爲す所の者を彼等に對表せり。爾は勝れぬ迅速にして容易なる其保護を見るか。「其目は貧しき者を

見、其臉は人の諸子を試みる。主は義者を試み、其心は惡人と暴虐を好む者とを疾む」(節五)。他の譯者は「其臉は穿鑿す」(ラアキ)となし、第三の譯者は「主は義なる試験者なり」(譯者不明)となし、第四の譯者は「義者を

試み、其心は惡人と不義を好む者とを疾めり」(ラアキ)となす。「其心は暴虐を好む者を疾む」。爾は到處に存在し、凡てのものを見、凡てのものを觀察して、助くるに備ふる者、待むべき保護者を見るか、彼は何人の彼に顯はすとも、自ら照管し、自ら配慮す、即ち凌辱する者に障害をなし、凌辱さるゝ者に助け、或者には善行の爲に報賞を與へ、他の者には罪の爲に罰を定む。彼は萬事を知り、其目は全世界を見る、番に知るのみならず、凡てを改良せんと欲す。故に預言者は他の個所に於て同一のことを表言しつゝ、彼を「義人」(節七)と名づく。彼若し義なる時は、唯斯る業事を見ざらん。彼は惡人を避け、義人を嘉す。次に彼は前の聖詠に於て言ふ所と同一なること、即ち惡癖は自ら充分に罪人を罰することを此にも表言しつゝ、「其心は暴虐を好む者を疾む」と附加す。惡癖は心に反對し、即ち仇をなし、又亡滅的なり、惡を行ふ者は罰を受くるの前已に罰を嘗む。爾は義人が斯る刑助者を有するも、諸敵は如何に諸方より捕はれ易く、又彼等は自ら己に害と亡滅とを蒙らしめつゝ、其保護せらるべき己の武器を以て征伐さるゝを見るか。爾は此幫助の容易なるを見るか。何處に行き、何處に走り、又財産を費すの要あらず、神は何處にも在して萬物を照覽し給ふに由る。「彼は熱炭、烈火、硫磺を雨の如

く悪人に注がん、炎風は彼等が杯の分なり。蓋主は義にして義を愛し、其顔は義人を視る(六節)。他の譯者は「彼は不法を行ふ者に熱炭を注がん(不明の)となし、第三の譯者は「彼等」義人若くは(彼神の)「顔は公正を視る(上全)となす。預言者は惡癖より生ずる所の罰に就きて語り又多くの者は之を觀ざることを知りて、遂に強硬なる表言、畏るべき罰を用ひつゝ、上より遣さるゝ罰を以て不虔者の靈を震動す、預言者が上より烈火硫磺暴風熱炭の彼等に注がるゝことを云ふは、此等寓意的の表言を以て復讐の避くべからざること、非常なる苦罰の迅速なること及び破壊的勢力を願さんことを欲すればなり。

三。「彼等が杯の分なり」とは何の意なるか。言ふ意は、此は彼等の分なり、此は彼等の所有なり、此は彼等の生活に及び、彼等は之によりて亡びんとなり。次に彼は其原因をも引用す、凡てを見給ふ所の者は、不法にして通過することを許さなければなり。他の預言者が「汝が目清くして、背て惡を觀たまはざる者、背て不義を觀たまはず(アブラム)と言へる如く、彼も亦「蓋主は義にして義を愛す」と言に於て同一のことを表言せり。義即ち正義を受くるは特に神に適す、然れば神は何時も義に背けることを許し給はざるなり。

觀よ、何に由りて預言者は此聖詠の始に於て「我主を恃む爾等何ぞ我が靈に謂ふ、鳥の如く飛びて爾の山に至れ」と云ひしか。世上の幸福を望む者は、人々の爲に容易に捕へらるゝ野の鳥に勝らず。富を欲する者も亦斯くの如し。鳥は網若くは係蹄、其他種々の方法にて子供等の爲に捕るゝが如く、富者も亦友又は敵の爲に捕はるゝなり。惡人は己を捕へんと欲する多くの人々を有しなから、鳥よりも大なる危険の中に生活す、然れど爾を捕ふるものは、何ものよりも先づ己が惡癖の希望なりとす、彼は常に時の事情に左右せらるゝ放逐者なり、彼は削手の殘忍をも、王の怒をも、諂媚者の奸計をも、友の欺騙をも畏る、諸敵の彼に對して起つ時は、彼は衆人よりも多く戰慄す、又彼は平安の時にも奸計を危懼る、其堅固にして奪はれざる財貨を有せざればなり。故に彼は山野を通過し、暗黒の中に住し、日中に深き暗黒を見出し、且つ奸計を作しつゝ、常に一の場所より他の場所に流離轉す。義人は然らず。「義者の途は旭光のごとし、いよく光輝を増す(箴言四)」。彼等は奸計を作さんともせじ、不正を行はんとせずして、其心は平安なり。然れど惡人は常に奸計を行ひ、盜賊強盜及び姦淫者の如く、何時も暗黒と恐懼との中に在り、彼等は日中に於て暗黒を見る、彼等の靈は恐懼を以て抑へらるればなり。此

暗黒は如何なる状態に散布せらるゝか。爾は、縦し、大罪人たらんも、若し此等のことを避けて神に於ける希望に固めらるれば如何。睿智者曰く「古の族を觀て誰か主を信じたる、又誰か耻ざりしかを視ん」(シナノ十)と。彼は「義人」と云はずして「誰か」と云へり。彼曰らく、縦ひ此は罪人たりしも、罪人等も此锚を持して衆人の爲に征服されぬ者となることは驚くべきなり、神に對する順従の特質は斯くの如きものなり、爾諸罪の重荷を負へる者も、神の仁慈の中に嘉せらるゝことを見出さん、人を恃む人は誼はるゝが如く、主を恃とする人は「福なればなり」(イエレキヤ書 一七、五、七)。然れば他の一切を棄て、此锚を持て。神は凡てを見て正しく審判す、否審判するのみならず、乃ちその審判を實行す。是に由りて預言者は神の正義に就きて述べ、以て火及び不安の精神を以て罰することをも顯せり。彼の之を爲すは罪人の爲に慮り罰を以て彼等を矯正せんと欲してなり。吾人は凡そ此等の理由によりて彼に趨り就きて常に己が目を彼に向けん。然らば吾人は光榮の世々に歸する所の吾人の主、イエススハリストスによりて凡ての福を得ん。アミン。

### 第十一 聖詠講話

八絃の樂器を以て歌はしむ。  
主よ、我を救ひ給へ、蓋義人は絶えたり、眞理は人の子の中に減少す。他の譯者は「人の子の中に忠信の者なし」(ラキ)とす。

一。元來善を行ふことは困難にして行ひ易からざるも、特に之を行ふ善人の少き時を然りとす。旅行は困難なるも、特に旅行者が唯一人にして同伴者なき時に然るが如く、愛にも亦同様なり。兄弟の關係と慰藉とは實に重大なる事なり。然ればパウロは「我等互に顧みて愛と善き行とを勵ますべし」(エウレイ書 一、十、廿四)と云へり。吾人は古昔の義人等をも特に尊ばざるべからず、實に彼等が善行を行ひしが爲のみならず、善行の甚だ乏しき時何處にも善行者のあらざりし時に善行を行ひしが爲にも尊ばざるべからず。聖書に「ノエは義人なり、其世の完全き者なりき」(創世記 一、四、九)とあるは此事を顯すなり。吾人はアウラム、ロト、モイセイに驚く、彼等は恰も深夜の星、荆棘の間なる薔薇、狼の間なる羊の如かりき、彼等は衆人と反對なる途を歩みて止まざりき。群衆の中にありて善を行ふの困難にして又多くの者が反對の方角に行くに際して善を行ふに困難ならば、獨り群衆に反して行く所の者は無数の



困難を迎へん、若し航海に際して反対の方向に波浪の運ばる、時波浪に逆ひて船を進むることの困難ならんには、況て善行に於てをや。視よ、他の者が反対の途を歩むに際して、善行の途を歩める此義人は、何故に神の照管に趨りて「主よ、我を救ひ給へ」と云ふかを。彼の表言す所は左のことに外ならず、曰く我には至上者の右手、天の佑助、神聖なる助成を要す、我は衆人と反対なる途を歩みつゝ、大なる照管に必要を有すればなり。彼は、我を救ひ給へ、義人なければなり、と云はすして、惡は主權を探り、疾病の強まりしに由りて、在りし所の者も亡びたるを願しつゝ、「蓋義人は絶えたり」と云へり。パウロも亦之より預戒して「豈知らんや、僅なる時は盡くの洩刻を酸くするを」(コリント前書五の六)といへり。又曰く「惡しき交は善き習を壞る」(コリント前書三十三)と。「眞理は減少せり」とは何の意なるか。眞理は多し。色及び他物の間には眞のもの、偽のもの、とあり、例合ば眞正の紫色と贗造の紫色とあり、又洩夫藍藥草の名實、香料及び其他のものにも眞偽あるが如く、善行にも亦眞偽あり。眞理は實に在る所のことなり。然れば眞理は變じたることあり、蔽はれたることあれども、其本質に於て害されしにあらす、乃ち人々によりて排斥されたるなり、是に由りて預言者は「眞理は減少せり」と云ひしのみならず、之を表言さんこ

とを望みつゝ、「人の子の中に」てふ言を附加へたり。視よ、眞の飾あり、偽の飾も亦あることを。眞の飾とは如何なるものなるか。心的飾なり。偽の飾とは如何なるものなるか。肉的飾なり。眞の富あり、偽の富も亦あり。偽の富は財産にあり、眞の富は善行にあり。喜にも眞偽あり、美にも權威にも、光榮にも亦あり。然れども多くの人々は眞の事物を遺て、偽の事物を追跡す。人自らにも眞の者と偽の者とあり——生きて動作く者は眞の人なれども、繪畫に描かるゝは偽の人なり、此くの如く善行に於ても亦然りとす。

二。「人各其隣に偽を言ひ、媚ひ詔ふ口にて忒心より言ふ」(三)。他の譯者は「別々の心より言ふ」(ラキ)となす。預言者は二種類の惡に就きて云ふなり、彼等が偽を言ひしこと、其隣に對して云ひしこと、是なり、而して諷の下に偽なること、或は余分なることを意味す。パウロも亦「互に謙を言ふ勿れ」(コロサイ)と云ひて同一のことを表言せり。而して特に重きことは衆人が慙惑さるゝことなり。彼は斯々の人と云はすして「人各」と云へり。惡は實に外部のみならず、内部にもあり、即ち「忒心」或は他の譯者が彼等の心に大なる表裏あることを顯しつゝ、「別々の心」と云へる如く、心内にありしなり。此は凡て

の敵よりも悪し。明なる及び顯然なる敵は容易に戒心することを得れども、外部に或状態を顯して内部には他物を隠す所の敵に至りては、之を捕ふること困難にして、公然劍を携ふる人々よりも一層危険なりとす。「主は悉くの媚び詔ふ口誇り高ぶる舌を絶ち、彼の言ひて、我が舌にて勝たん」(四節)。

他の譯者は吾人は「主宰せん」(不明の)となす。「我が口は我等と共にあり、誰か我等に主たらん」。他の譯者は「誰か我等を主宰せん」(ラキ)となす。爾は預言者が如何に彼等のことを慮るを見るか。是れ彼等に反對して云へるにあらすして、彼等の爲なり。預言者は彼等亡びんとは云はずして、惡は亡びんと云ひ、主は彼等を絶つとは云はずして「詔ふ口」を絶つと云へり。

三。爰に預言者が絶たれ及び滅されんことを希望するは、彼等の實在の絶たる、を云ふにあらす、乃ち彼等の舌と高慢と奸計及び驕傲の滅さるゝことを云ふなり、又彼は彼等の無智を笑ひて「我が口は我等と共にあり、誰か我等に主たらん」といへり。是れ惡鬼に憑られたる者及び發狂者に相應なる言なり。故にパウロは彼等に反して云ひつゝ「爾等己に屬するに非ず價を以て買はれたり」(コリ前書六の)と注意し、又己の爲に生活せざるべきを命ず(六の七)言ふ意は左の如し、此

等の口は爾に屬せずして主に屬す、何となれば主之を造り之を整へ之に生命を吹入れたればなり。然れども爾は口を有するか。吾人が有する所のものは悉く吾人のものならず、吾人の之を有するは、是れ猶他人より依託されし金錢を有するに等しく、他人に雇はれて任せられたる地を領有するが如きもの也。然れば神が口を爾に與へたるは、荆棘を生せん爲にあらす、乃ち有益なる種子を蒔き之を以て高慢及び詭譎にあらで、乃ち謙遜と祝讃と愛とを弘布せしめん爲なり。又神が爾に目を與へたるは、爾が見て以て色慾に溺れん爲にあらす、貞操を以て之を飾らん爲なり、又爾に手を與へたるは、爾の人を打たん爲にあらす、施濟を與へん爲なり。爾の口を以て罪を行ひ、姦淫不潔を行ふの武器となさば、如何で「我が口は我等と借にあり」と云ふを得んや。「誰か我等に主たらん」。嗚呼、是れ惡魔の言なり、惡鬼の心なり。人よ、爾は萬物が爾の主宰の能力、睿智、配慮及び照管を報じ、爾の體と靈生命及び凡そ見ゆると見えざるものは、殆ど皆造物主の全能を宣へ傳ふるを見ざるか。爾も亦「誰か我等に主たらん」と云ふ、是れ無智、憤激、心靈的放肆の言なり、無數の惡は多く之よりして生ず。斯る人々は「誰か我等に主たらん」と云ふ、然るに他の人々は主を認むるも、審判及び懲罰に關する教誨を排斥し、暫時

的快樂の爲に大なる苦を得又彼等は地獄のことを忘れて己を慰めんことを望みつゝ認めずして斯る大膽を以て己を亡滅の淵に陥擠すなり。是故に我は爾に地獄のことを記憶し、地獄のことを説話し、斯くの如き麗しき状態を以て己が靈を飾らんことを勸む、何となれば斯る談話は甚だ有益なればなり。神が地獄を以て吾人を威嚇すは空しきことにあらず、且つ之を以て地獄を疑なきものとなすのみならず、畏を以て吾人を善良なる者となさん爲なり。故に悪魔は力めて地獄に就きての記憶を滅さんが爲に全力を用ふ。然れば地獄のことを忘れずして何の爲に我は時ならず己を煩すやと云ふ勿れ。此煩惱は時ならざるか。此煩惱は爾が地獄に於て苦む時に時ならざるものたらん、現世は痛悔の時にして未來は其時にあらず。ラザリの時に生活したる富者が、死後無数の苦を受けしも、彼に何等の益をも與へざりしは此事を證するなり。然れど彼若し好時を得て痛悔したらんには、斯る苦を受けざりしならん。『主曰く、貧しき者の苦乏しき者の嘆に因りて、我今興き、執へられんとする者を危からざる所に置かん』(六)。

他の譯者は『明なる救をなさん』(マフ)となす。

視よ、謙遜の力は如何なるものなるかを。貧しき者愛に貧しき者とは痛悔の心あ

る者を云ふの力は彼等の苦の爲に與ふる神の保護なり。預言者は愛に貧しき者の生活及び善行に就きて言はず、唯彼等の苦が神を傾けて罰と復讐とに鼓舞するを言ふなり。勇みて凌辱を耐忍ぶは是れ何の意なるか、視よ、如何に神が不正にして耻めらるゝ者の爲に慮るかを。不幸と苦艱とは彼等の爲に至大なる保護となる。愁歎の力や大なり、此力は至上者の扶助を呼ばばなり。爾等貧しき者を凌辱する者は畏るべし。爾等は權威、財寶、金錢及び裁判者の懇切を有するも、彼等は何ものよりも強き所の武器——愁歎、涕淚及び凌辱を忍耐することを有す、彼等は此武器を以て天の扶助を自己に引付くるなり。此武器は家を破毀し、根底を崩壊し、市街を絶滅し、全人民を溺没せしめたり、是れ不正にして凌辱めらるゝ者の愁歎の力なり。善良なる貧者が苦を受けて一の悪言をも出さず、唯歎きて己の不幸を泣く時は、神自ら彼等を眷顧み給ふなり。『執へられんとする者を危からざる所に置かん』とは何の意なるか。言ふ意は、我は勇敢しく、顯然に、明白に、彼等を保護せん、是れ衆人の之を知らん爲なりと。然れども何時明かに救はざることあるか。時としては明かに救はずして密かに救ふことあり、彼は人の譽を要めざればなり。言ふ意は、今諸敵は現然として彼等を攻撃し、恰も神の扶助を有せざる者

の如く彼等を悲ましめ、彼等を讒謗するに際して、敵自らも實際に於て主の佑助を認め、之を悟りて善良なる者とならんが爲に、我は明かに彼等の救を立てんとす。

『主の言は淨き言なり、爐に於て土より淨められたる銀なり』。此等の言と前に述べたる言との間に如何なる連續あるか。大なる而も直接の連續あり。彼曰く、是れ空言若くは虚喝なりと思ふ勿れ、神の言は淨くして惡を遠ざければなり。鎔解されたる銀の、他の汚物を混せざるが如く、神は如何なる言を述べるとも、其言は必ず成遂げられざるべからず。故に曰く『爐に於て土より淨められ、七次鍊られたる銀なり』(七)と。

四。爾は預言者が如何に物體を以て神の偽なきこと即ち眞理を表象すを見るか。能く反覆注意して鎔解紅熾し、斯くして淨めたる銀の、毫も他の物質を混せざるが如く、神の表言も亦斯くの如し。『主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯世より永遠に至らん』(八)。他の譯者は『彼等を保ち、我等を護りて、斯世より永遠に至らん』(九)。他の譯者は『人の子の中、小人高にあれば、惡者四方に環る』(十)。他の譯者は『歩ん』(アキラ、シム、フ)となす。『主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて』。視

よ、預言者が如何に數々或は之を尙能く云へば、常に神に趨就きて彼より佑助を求むるは、此佑助が偉大なる能力にして如何なる時にも限られざるに由るなり。言ふ意は爾は斷えず吾人を守護するによりて、吾人は如何なる人事的のにも必要を有せずとなり。『惡者四方に環る』とは何の意なるか。七十翻譯者の譯に據れば左の如く會得せざるべからず、曰く、縦ひ惡人吾人を環るとも、吾人は毫も苦を受けざらん、爾吾人を護り、吾人を高めて光榮なる者となせばなりと。他の譯に據れば、左の如く會得せんことを要す、曰く、爾賤卑しき人の諸子を高むる時、爾が輕蔑せられ、及び卑微なる者と數へられたる吾人を榮し、惡人を遠け、之を逐ふ時は惡人遠ざかると。『高に在れば』とは何の意なるか。之を換言すれば、爾は人が爾に肖たる者となり得る程之を爾に肖たる者と爲せりとなり。主曰へり『吾人の肖と像とによりて人を造らん』(創世記一)と。彼天に在りとは、吾人が地に在るとなり、又天の上には彼より上に何ものなきが如く、地上には其價值の人に似たる者なし。彼は吾人に『天に在す爾等の父の如く爲れ』(マト、ス、イ、福音五の四十五、四十八)といひ、吾人に、吾人自らの名をすら傳へて『我曰へり、爾等神なり、爾等皆至上者の子なり』(聖詠八十)といふ、又『我爾をして、ラオンにおけること、神の如くならしむ』(出埃及記一七の六)といへり。然れば

モイセイは或天然物を變化し又或者は或天然物を變化せり神は吾人に己自らを神の殿と作すことを命じたり。縦ひ爾は天を造らざるも神の殿を造らん。天の光華あるは其中に神の住居し給ふに由る況て吾人はハリストスによりて天に住するをや使徒曰へり彼と階に復活せしめ天に坐せしめたり(エヌス書)と。ハリストスは吾人に其自ら爲しより多く爲すの權を吾人に與へたり曰く我が行ふ所の事を彼も亦行はん且此より大なる者を行はん(イオアン福音)と。舊約に於ても或者は海の流を變じ(出埃及記十)或者は大陽を支へ月に止ることを命じ(イイスス、ナタ)或者は太陽を還し(第四列王紀)燈にある少年等は火の自然力を止め激烈なる火焰の動作をも失はしめて縛られたるもの、如く呻吟せしめ(使徒行實)猛獸も神の友の尊ぶべきを知りて己の甚く餓え居たるにも拘らず之を害せざりき(ダニイル書)口腹の快樂に耽ける者は猛獸の斯る節制を見て愧づべし。獅はダニイルを見て伶俐き者となれり然れど吾人は神の子の吾人に來れるを見て伶俐しき者とはならざるなり。彼等は聖者の體に觸れんよりは寧ろ餓えて死なんと決心せり然れど吾人はハリストスの裸となり又餓え疲れたるを見て餘分あるものをすら之に願たす乃ち裕に生活して諸聖人を蔑視す。地は神の他の友に對して後來嘗てなかりしが如き

豊富なる贈物を己の懐より産出せり(イコラ四)彼等の衣服及び影が悪鬼死及び病の爲に畏るべきものなり時は彼等自身の尊ばれたるや怪むに足らず(使徒行傳五)三。天使等も斯る人々を尊敬して之に特別なる尊敬を顯せり(創世記十八の十)然れば彼等は主自ら尊敬を顯し、所の者を如何で尊ばざるを得んや。是は舊約にも新約にもありしことなり。故に預言者は人の子の中小人高に在れば惡者四方に環ると云ふ。然れば吾人は此尊貴の偉大なるを思ひ之が爲に適當なる尊敬を以て報いん是れ異なる尊敬の吾人の爲に間の發端とならざらん爲なり之を教ふる者及び教へらるる所の吾人は皆光榮尊貴叩拜の世々に歸する所の吾人の主イイススハリストスによりて救はれん。アミン。

### 第十二 聖詠講話

「ダウダの詠」他の譯者は「ダウダの凱旋の歌」(シム)となす。「主よ我を全く忘るゝこと何の時に至るか。爾の面を我に隠すこと何の時に至るか」他の譯者は「隠すや」(アキラ、シムマフ)となす。  
(ネオドテオン)

「我が己の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと  
何の時に至るか」(二節至)。

一。神より忘れられたることを感ずるも亦少からぬ福なり。忘るゝと云ふ言は偏愛の状態にはあらず、遺つるの意なり。多くの者は神の忘るゝ所となるも之を認めず、又悲まず、然れど福なるダウドは神より忘れられしことを認めたるのみならず、忘れらるゝ時をも數へたり、何となれば「何の時に至るや」とは時の永きことを示せばなり。然れば彼は悲みもし泣きもするなり。視よ、彼が如何に何時も世の何ことに就きても富に就きても光榮に就きても悲まずして常に神の慈愛を得ざることを悲めるを。爾は云はん、彼は何によりて神に忘れられしことを知れるかと。彼は何時神が彼のことを記憶したるかをも知り、又此忘れらるゝことは何事にあるか、此記憶さるゝは何事に在るかを明かに理解せり——多くの人々が、其富める時、人に讃稱さるゝ、時何事にも成功する時、敵に勝利を得る時を以て、神彼等を記憶すと思ふが如くにはあらず、彼等は何時神が彼等を忘るゝかをも知らず。彼等は神の記憶することの意味を知らず、又彼の忘るゝことの意味をも知らざるなり、彼等は神の愛の徴表を解せず、又其恵み給はざることをも解せず。神は地上

の福を有する多くの人々を特に忘るゝに反して之を有せざる者に就きては、數々記憶し給ふなり。吾人の神に記憶さるゝは、善行、注意、警醒、善行に練習することの外、何ものよりも生ぜざるなり。然れば愛すべき者よ、爾も亦不幸の中にありて神我を忘るゝよりも生ぜざるなり。然れば愛すべき者よ、爾も亦不幸の中にありて神我を忘れ給へりといふ勿れ、之に反して爾罪の中に在る時、萬事に成効する時は、神我を忘れ給へりと云へ。爾若し之を認めなば速かに悪行を離脱せん。「爾の面を我に隠すこと何の時に至るか」。是れ忘るゝの極なり。預言者は神の作動即ち其怒をも、其罰をも、人事的に像れるなり。而して神が其面を隠すは、吾人が彼の誠を行はざる時なりとす。主曰へり「我爾等が手をのぶる時目をおはふ」と、次に其理由をも示して曰く「爾等の手には血満ちたり」(イサイヤ書)と。然れど此遺つること、面を隠すこと、は神が大に吾人に就きて配慮する行為なり。彼の之を爲すは、最も強く吾人を己に引付けん爲なり。然れば慈情の愛にて傷害されたる人は、其愛する者が自己に注意せざるを見て之を遺て且つ之を遠ざくるも心より之を忘れんとにはあらず、彼を自己に向け、之を引付けんことを望みてなり。預言者は面を隠すこと、及び忘るゝことを述ぶると偕に、其より生じたることに就きても亦

云ふなり。其より生じたる事とは何なるか。彼が次に『我が己の靈の中に謀ること何の時に至るか』と云ふ所のことは是なり。港を出でし者の到處に彷徨ふが如く光を奪はれし者の屢々蹶くが如く神の忘るゝ所となりし者が、常に掛念不安憂愁神の己を遠ざかることに就きて談話するは彼が復び吾人に向ふことに助くるや少々たらざるなり。然ればパウロもコリント書の中に己がことに就きて『我が愛ひしむる者の外誰か我を喜ばしめん』(コリント後)と云へり。愛すべき者よ神を遠ざかることを感じ、之を悲み、之を哭くことより生ずる益は小なるものにあらず、吾人は斯くの如くにして復び彼を己に向けしむればなり。『我が敵の我に高ぶること何の時に至るか、主我が神よ願みて我に聽き給へ、我が目を明にして我を死の寢に寝ねざらしめ給へ』(四) 神吾人を保護し、吾人と偕に在す時は、凡ての悲哀の消滅するが如く、彼が吾人より遠ざかり、吾人を忘るゝ時は、吾人の靈は掻き裂かれ、心は悲み、人々は吾人を憐まし、又到處は皆吾人の爲に斷崖絶壁なり。然れども此等のことは有益なる目的を以て容るる、即ち不注意なる人々をして之が爲に苦みつゝ、最も注意して斷崖絶壁の上に登り歸る様力めしめん爲なり。預言者曰く『爾の背は爾をせめ、爾の惡は爾を懲さ

ん』(イェレミヤ)と。斯くの如く神の人々を遣て給ふことも亦その照管の一種なり。神は吾人の爲に照管し、吾人の爲に配慮するも、吾人の能く己に注意せざるを見て、暫時之を離れ之を遠ざかることあるは、是れ不注意なる者が不注意を遣て、最も熱心なる者とならん爲なり。預言者が『願みて』と云へるは、吾が上に高ぶる敵を見よとなり、且つ若し我が卑賤の爲にあらざれば彼の自負傲慢の爲に『我に聽き給へ』となり。爾は何事を願ふか。敵に勝つことか。曰く否、只我が心の目の照らされ、我が靈の沈思する部分を包容し、我が意の目を暗まし、所の暗黒を散せんことなり。視よ、我は何事を願ふを曰く『我が目を明にせよ』。我が罪の死に沈めるを見て『我が敵が我は彼に勝てり』即ち我は彼に勝ちて欲する所を成就せり』と曰はざらん爲なり(五) 『我は彼に勝てり』とは何の意なるか。縦ひ彼は概して強からざるも、我に對して強かりしなり。我が打撃は彼に力を與へ、彼を強き者堅固なる者及び勝れぬ者と顯すなり。

二。爾は見るか、即ち吾人罪を犯す時は、吾に自ら己を辱しめ己を亡ぼし己を死に服するのみならず、吾人を攻撃する所の己の敵をも強き者及び權力ある者たらしめ、加之一層彼等を喜び樂ましむるなり。嗚呼己を愧かしむる其敵を助け吾人

の盤を激せしむる者を樂み喜ばしむるは、如何なる無智如何なる盲目なるか。視よ、「敵には武器悉く盡き及び悪者を滅す」(聖詠九の)代りに即ち敵に勝利を占むる代りに吾人自ら攻撃を受くるは如何に無分別なるを加之ならず、彼を強き者及び權力ある者とも顯し且つ吾人の無智吾人の非常なる疾病は之にも止まらずして、一層喜と樂とを彼に得しむるなり。罪は眞に極端なる狂妄なり極端なる惡なり。

「我を攻むる者が我の撼く時に喜ばざらん爲なり」。預言者は主が彼を顧み、彼に己の顔を向け、彼の祈禱を聽容れんことを主に願ひつゝ、其願ふ所の三の理由を引けり。第一、敵の權柄能力、第二、彼等の驕傲自慢、第三、彼等の樂と喜とは是なり。彼は恰も斯く云へるが如し、主よ、若し我が願によらず、又我が賤微しきにも拘らず、爾の顔を我に向くるものは、諸敵の傲慢なるによりてなり、彼等は己の能力を誇り、我の艱難を受くるを樂しみ、我が墮落を嘲り笑ふ。「我に聽き我が目を明になし給へ」即ち己が罪の管下にある我より深き眠を放逐せよ、我は其罪をもて死して速かに靈の死に服すべければなり。若し爾の堡砦より我の動搖するや否や、諸敵は喜び悦びて之を己の力となし、高慢して堪へ難き者となるとも、我が死に導かるゝ時は、彼等將た何事をか爲し得んと。爾は預言者が一般の敵の喜

ぶが如きこと、一般の敵が強き者と思ひしこと及び高尚なりと思ひしことを如何に其受くべき罰及び苦よりも小ならざる最も大なる害と數へたるかを見ん。彼若し此惡を最も大なるもの及び堪へ難きものと思はざりしならば、神の仁愛を受くるが爲に此惡を顯さざりしならん。吾人も亦斯く行はん、吾人が敵を讒め、敵を強き者と爲さじ、敵に喜を與へずして却て敵の賤卑き者、微少なる者、荏弱者憂愁ふる者、不快なる者と顯れん様、親且つ力めん。而して此等のことは、敵が罪人の善行を行ふことを見る時に行はるゝなり。「我爾の憐を待まん」(七) 爾は己の如何なる善行を以て、神が復び爾を顧み、爾の祈禱を聞き、爾の思想の目を開くが如き憐を自己に願ふか。抑々爾に斯る善行あるか。預言者の言ふ意は、人もし何事をか想像し得ば想像すべし、然れど我は一を知り、一を話し、己が凡ての希望を一事に置き、一を想像す、即ち「爾の憐、爾の仁愛是なり」。「我爾の憐を待まん」。爾は預言者の謙遜を見るか。爾は此人の恩を感ずるを見るか。縦ひ彼は多くの徳を有し、又之を以て神の心を傾けしむることを得るも、彼は其徳の一に就きても言はず、唯神の仁慈に趨就さぬ。是に由りて彼が例令ば「我若し何事をか爲し、若し我報いしならば」(聖詠七の) といひ及び之に似たる言を以て其徳に就きて云ふ時は、



全く話すべき必要ありて爾云ふなり若し夫れ必要なからんか彼は毫も斯くの如きことを云はず他の凡ての祈願の由るべき所を措きて唯一に神の憐れと仁愛を示すなり。次に彼は己の希望に欺かれざることを信じて「我が心爾の救を喜ばん」と續く。

爾は希望に満たされたる望を見るか。彼願ふ時は受くるに先ちて己に受けしが如く感謝し神を謳歌して前以て凡てをなす。斯る鞏固なる希望は何處より彼の中に生ずるか。深く神恩を感じることにより祈禱に於ける大なる熱心より—彼は神が斯くの如く願ふ者に注意することを知れり—強き熱心及び衷心の活ける感情よりす。怠慢不注意にして願ふ者は其願ふ所を受くも殆んど賜の重大なることを感ぜざるが如く非常なる熱心を以て祈禱を献する者は其願ふ所を受くるに先ち己が鞏固眞實なる志向によりて己に重大なる賜を受けしもの如く感ず。これ神聖なる恩寵は預め彼等を喜に充たすによりて—彼等は之が爲に感謝し而して之を受くること遠からざればなり。「我が心爾の救を喜ばん」。言ふ意は爾より救を受くることは我が望を喜ばせ爾が望を救ふことは我が望を樂ましむとなり。

三。爾は喜に二様あるを知るか、敵の喜は墮落他人のに就きての喜にして望の喜は自己の救贖に就きての喜なり。前者は不虔者に適當にして、後者は救はるゝ者に適當なり、前者の樂は其樂み居るが如き其人をも、其樂む所のことをも偕に亡滅に至らしむるも、後者は樂む者の救贖となり、又之を活動す。吾人も亦此後者の喜と樂とを以て喜び樂み而して前者を避けて之を遠ざけん。「我恩を施す主を讚め頌ひ至上なる主の名を崇め歌はん」。即ち我は此恩恵を記念するが爲に、我に恩恵を垂れ敵を鎮壓し之を辱めて其弱さを示し、我が祈禱を聴容れ我が死に向ひて進むに方り、其間に彌漫せる雲霧と暗黒とを散じて己が顔を我に向けたる所の主を讚め歌はんとなり。我は救を喜びつゝ、主が我に顧されたる仁慈の爲に此歌を献する時は、恰も毀つべからざる記念碑を建つるが如し、昔に今之を歌ひて記念の中に仁慈を保つのみならず、將來に於ても固く己が望の中に主の大なる仁慈を銘刻して其名を讃頌せん。斯る望は艱難に服するも容易に其艱難より救るゝのみならず、復び同様の艱難に服せざる様一層謹慎するなり。實際望に於て若し常に仁慈を記念する時は、仁慈を受けて救はれし所の艱難をも記憶するや明なり。望にして艱難を記憶する時は、望は何によりて艱難に遭遇したるか、如

何なる理由によりて斯る惡に服したるかを注意思考す又此事を思考しつゝ再び斯る不幸に陥らざる様諸方より己を守らん斯くして靈は己の生活を立て直しつゝ大に己が贖罪者を感謝し彼を贖罪者となし來世に於ても常に彼を己が守護者となすことを望まん。吾人も亦斯る靈に倣はん而して若し罪を犯すことあらば直に起ちて此陷落を以て己の爲に大なる安全に至る端緒となし爾後罪を犯さるに至る動機となさん。爾は如何様にして之を爲すか。爾には教師たるダウドあり。爾は罪を犯さんか。罪の中に寝ねすして起ちて直ちに神が其顔を爾より轉じ爾を忘れたることを想ふべし次に泣き悲み毎夜涙を以て爾の寢床を洗ひ不法を行ふ者より去れ。ダウドの教誨は斯くの如し。彼と偕に言へ「主よ、我を全く忘るゝこと何の時に至るか爾の面を我に隠すこと何の時に至るか」と。言を以て話さんよりも先づ心を以て話せダウドの他の祈願を献げよ。爾何事を言ひ出すとも神の慈憐を待み待みて疑ふこと勿れ。使徒は曰へり「蓋疑ふ者は風に掀げられて碎かるゝ海の浪に似たり此くの若き人は何をか主より受けんと想ふ勿れ、或心の人は其凡の路に於て固からず（一イコフ公書）と。然れば神の慈憐を待みて毫も疑ふこと勿れ然らば爾も亦願ふ所を斷えず受けん

而して之を受けなば恩者に對して忘恩者となる勿れ彼の仁慈の記念碑を建て、主に感謝の歌を献れ。爾若し自ら之を建つること能はずば貧者を招き彼等の口を利用して己の代りに彼等を用ひよ。貧者が爾の爲に歌ふ所の歌は、主の爲にはダウドの歌よりも心地善きことを信すべし。多岐の樂器は一絃の其よりも心地善き音を發するが如く多くの貧者の歌も亦貧者の聲に注意する所の神に心地善く且つ愛せられん。己に對し神に對して斯くの如き記念碑を建てよ即ち神に對しては仁慈の記念となし己に對しては感謝と恩を忘れざることゝの記號となし常に之を己が心の中に保ち以て己が生活を整全すべし或は之を尙能く曰へば光榮權能の世々に歸する所の吾人の主ハリストスイイススによりて來世の幸福をも相續するに堪ふる者とならん様己が生活を整全せん。アミン。

### 第四十一 聖詠講話

「我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」(二節)。

一。頃日我がメルヒセデクに就きて述べし時(ハリストス降生後三百八十七年九月アンテオロヤに於てイウテヤ人に對して述べられたる第七説教を指す)爾等は我が説話の長きに驚けり然れど爾等が説話の長きに拘らず又我が説話の

長かりしのみならず、而も其中に多くの困難なることの有りしも、終に至る迄熱心に聞けることに我は驚けり。然れど説話の廣きことも、困難なることも爾等の熱心を弱めざりき。今又我は爾等の前に最も明なる講話をなして、前に困難なる講話を聴きしが爲に力めて爾等を賞せん。聴者は常に心を張るの要なし、心は速に衰弱すればなり、然ればとて心をして常に放縱ならしめ、又息はしむべからず、心は是に由りて動作かざるものとなればなり。教訓を種々にし、或は何人にも一般に了解し易き問題、或は最も困難なる問題に就きて述べんことを要す。我は皆て牧者等が狼の群を攻撃するに際して、笛を奏して、投石索を探ると云へり、然るに今凡ての狼よりも悪しきイウデヤ人の祭の過ぎたる時、吾人は投石索を棄て、復び笛を探り、難問題に就きて云ふことを止めて、他の最も明瞭なる問題に向ひ、ダウドの聖詠爾等が皆今日歌ひし所の附歌を探りて題となさん。此は如何なる附歌なるか。「神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」。然れども前以て、何の爲に吾人は日常聖詠を用ふるか、又其預言は何故特更に歌を以て述べられしかを述べんことを要す。歌は何の爲に用ひらるゝか。聞かれよ。神は多くの人々の不注意なると、心靈上に關する書を読むことに困難し、又自己に

此困難を望みずして受くるを見て、此困難を希望あるものとなし、疲勞の感覺を減せんことを望みつゝ、歌調を預言と合したり、是れ衆人が附歌の好調を樂みつゝ、非常なる熱心を以て彼に聖なる歌頌を獻らん爲なり。實際に何ものも好調き唱歌、整然へる聖歌の如くに靈を高くして飛ばしめず、靈を地より絶離れしめず、體の揺摺より救はず、冥想に向けず、凡て世俗のことを輕蔑するに向けざるなり。嬰兒の泣き叫びて安を得ざる時は、歌を以て眠らしむるが如く、吾人の天性は唱歌及び好調き附歌を樂み、又唱歌に傾向を有す。乳母は嬰兒を手の上に抱き、彼方此方に歩み、あるひは子守歌を歌ひて彼等を眠らしむ。旅行者等もまた數々日中の炎天に馱馬を逐ひつゝ、歌を歌ひて旅行を續く、而して此等の唱歌は旅行者の困難を容易ならしむるものなり。獨り旅行者のみならず、農夫も亦葡萄を集め、或は其液汁を搾り、或は淨め、或は他の仕事をなしながら屢々歌ひ、航海者も櫂を漕ぎながら歌ひ、剩へ婦人も亦單糸を紡みて之を縫らし、愉にて之を正す時は、往々歌を歌ひ、時としては皆偕に或歌を歌ふなり。婦人にまれ、旅行者にまれ、農夫にまれ、航海者にまれ、皆歌を謳ひて勞働の困難を輕からしむ、吾人の心は好調き歌の音によりて最も容易に退屈と勞働とを忍耐し得ればなり。斯く吾人の靈が此種の快樂に傾向を有

するを以て、神は悪鬼が放蕩なる歌を入れて凡てを破壊せざる様彼等を防禦せん  
 とて、快味あると偕に有益なる聖詠を設けたり。世俗の歌より生ずるものは害と  
 亡滅と他の多くの悪とにして、凡そ不徳義なる悪しき歌の中にある所のものは靈  
 の中に貫きて之を薄弱にし、且つ之を放肆ならしむればなり。之に反して心靈上  
 の唱歌は太なる裨益と大なる教訓と大なる成聖とを得しめ、且つ凡ての智徳を愛  
 する本原となる、彼等の言語は靈を潔め、聖神も亦此等の歌を歌ふ所の靈に速かに  
 降ればなり。而して實に此歌を理解して歌ふ者が、神の恩寵を自己に招致ぐこと  
 に就きては、パウルの言ふ所を聴け、曰く「酒に酔ふ勿れ、此に由りて放蕩あり、乃神に  
 満てられよ」と次に神に満てらるゝ方法をも示して曰く「爾等の心に和して主を讚  
 美せよ」(エペソ五)と。「爾等の心に和して」とは何の意なるか。是れ理解しての意に  
 して、口の言を發言するが如くにあらす、又靈が何處に於てか外物によりて彷徨ふ  
 が如くにあらす、乃ち靈が言語を生ずることに注意することなり。

二。泥濘のある所に、豕趨り花と芳香の在る所に、蜂の集るが如く、淫猥なる歌のあ  
 る所には、悪鬼集り、心靈的唱歌のある所には、神の恩寵降りて口と靈とを聖む。我  
 が之を云ふは、爾等の唯我を讃めんが爲にあらす、乃ち爾等をして、絲を紡む時及び

他の労働をなす時のみならず、特に食卓にある時に斯くの如き歌を歌ふことを爾  
 等の子供と妻とに教しめん爲なり。斯く惡魔は大抵宴會に於て即ち、酩酊飽食鄙  
 陋なる笑と靈魂上の癡癡の助によりて計を行ふが故に、斯る時は、特更食前食後に  
 於ても聖詠を歌ひて惡魔を防禦し、妻子と偕に食卓より起ちて神に聖歌を歌はざ  
 るべからず。パウル若し自己に堪ふべからざる傷を負ひ、足には履物を穿ち、夜半、  
 特に人々の安眠する時に於てシラと偕に牢獄の中に在りつゝ、讚詞を以て神を謳  
 歌し、而して場所も時も、心配も睡眠に對する傾向も、斯る勤勉より生ずる疲勞およ  
 び其他何ももの亦彼に謳歌することを禁せざりせば、況て吾人は幸福と神の賜とを  
 樂みつゝ、神に感謝の歌を献せざるべからず、是れ酩酊飽食より或不潔物の吾人の  
 靈の中に入る時は、謳歌を以て凡ての不潔及び惡望を放逐せん爲なり。又多くの  
 富者が食卓に食物の汚點を存する時は、海綿に、拔爾撒謨を浸して之を拭淨むるが  
 如く、吾人も亦拔爾撒謨の代りに、靈的美音を充たして同じく行はん、乃ち飽食より  
 靈の中に或不潔の生ずる時は、此美音を以て洗ひ去り、且つ衆と偕に起ちて「主よ、爾  
 は爾の作爲を以て我を樂ませたり、我爾が手の工作を歡び樂む」(聖詠九十)と叫ばん。  
 歌頌には祈禱をも合すべし、是れ吾人が靈と偕に其家をも聖めん爲なり。宴會に

諧謔者、舞者、不<sub>レ</sub>要<sub>レ</sub>なる婦人を招<sub>レ</sub>ぐは、是れ惡鬼及び惡魔を呼び、非禮を以て己が家を充たすなり、爭論放蕩、姦淫等の諸惡は之によりて生ずればなり、斯くの如く聖詠と偕にダウドを自己に呼ぶ者は、彼を以て自己にハリストスを呼ぶなり。ハリストスのある所には、常に一の惡鬼の入らざるのみならず、窺ふことをすら敢てせずして、却て平和と愛と凡ての幸福とは、川流の源泉より流出づるが如く、其處に流れ溢ぐなり。彼等は己が家を觀物となすも、爾は己が住所を聖堂となせ。眞に聖詠祈禱諸預言者の喜悅あり、および唱歌者に神を愛するの精神ある集會を確かに教會と名づくることを得。縦ひ爾は聖詠祈禱等に用ふる言語の意味を理解せずとも、兎に角之を發音するに口を慣れしめよ。熱心に言語を發音する時は、舌も亦その言語にて聖めらるゝなり。吾人若し斯る習慣を得ば、既に我意は怠惰によりて何時も此美事を棄つるが如きことなからん、習慣は意志の承諾なきも、毎日此美しき勤を行ふに吾人を勵ますべければなり。斯く謳歌するに際して、老人なると青年なるとに拘らず、或は野鄙なる聲を以て謳歌し、或は全く歌の調和を知らざる者ありとも、そは何等の罪過にあらず。爰に要するは、貞潔の靈勇しき智慧、痛悔の心、堅固なる思慮、潔白なる良心是なり。爾もし此等の性質を備へて、神靈なる唱歌隊

に入らば、聖ダウドと並立つことを得ん。爰には聖詠緊張りたる絃弓(提琴の)技術及び如何なる武器も亦必要ならず、然れども若し欲せば、肢體を殺し己が體を靈と一致調和して、己自らを聖詠となすことを得。肉にして「神に逆はじ」(ガラテヤ書)その命令に従ひて此の美麗にして奇異なる途に於て、其命令を實行する時は、爾は神靈的音調を成さん。爰には永き間練習して得るが如き技術を要せず、唯固き決心を要す、然れば吾人も亦其短き時に於て經驗せん。之が爲には特別なる場所、特別な時をも要せず、乃ち何處に於ても如何なる時に於ても心に歌ふことを得べし。爾は市場に行き、或は旅行にあり、或は朋友の間に坐するとも、到處に靈を興奮することを得、黙しつゝも高く呼ぶことを得べし。然ればモイセイは呼び、而して神は聞き給へり。爾職工たらんか。工場に坐し、勞働をなしつゝ、歌ふことを得ん。爾軍人たらんか、或は裁判所に坐せんか。又同じく爲すことを得ん。

三。靈若し内部に音を發する時は、聲なきも歌ふことを得、吾人の歌ふや人々の爲にせずして、心を聴き、又吾人の靈の隠れたる深所に貫通する神の爲にすればなり。此事に就きては、バズルも「神自ら言ふべからざる歎息を以て我等の爲に求む。而して心を察する者は神の意を知る、彼は神の旨に遵ひて、聖徒の爲に求むればなり」

(廿六、廿七)と云ひて之を證す。彼の斯く云ふは、神の歎息するが如きを云ふにあら  
 す乃ち神の恩賜を領けたる屬神の人々が、人の爲に禱り及び祈禱を献じつゝ、痛悔  
 の心と歎息とを以て之を爲すが如き意なり。吾人も亦毎日聖詠を歌ひ、祈禱をも  
 て神に向はん。然れど吾人は徒に言語を發するのみならず、言語の主意を理會せ  
 んが爲に、この聖詠の初句を解明さん。其初句とは「神よ、我が靈爾を慕ふこ  
 と、鹿が水の流を慕ふ如し」是なり。愛する者の性質は斯くの如きものなり、  
 即ち沈黙に於て愛を隠さず乃ち其愛を人の前に顯して、彼等が愛する所を云ふな  
 り。愛は其性質の如きものなり靈も亦沈黙して愛を守るが爲に忍耐するを得  
 す。然れば視よ、愛を以て活動されたるパウロはコリント人に對ひて「コリント人  
 よ、我等の口は爾等の爲に啓かれたり」(コリント後一)と云へり即ち我は愛を隠し、之を黙  
 するを得ず乃ち常に何處に於ても心の中に於ても、言語の上にも爾等を負ふとの  
 意なり。然れば福たる預言者も神に對して愛を養ひ、この愛を熱して黙するを得  
 す乃ち時としては「神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」  
 と云ひ、時としては「神よ、爾は我の神なり我曉より爾を尋ぬ我が靈は通じ難く又永  
 なき地及び沙漠の如く渴きて爾を望む」(聖詠六十三)といへり——他の譯者は彼は言語

を以て愛を儼り得ずして到處に比較を求め斯くしてなりとも吾人に己の愛を示  
 し、又吾人を愛に與かる者となさんと欲す(不明の)と云へり。吾人も亦預言者に聽  
 き従ひて預言者の如く愛することを學ばん。何人も我に云ふ勿れ我は如何にし  
 て見ざる所の神を愛し得るか。吾人は吾人の眼前に在らぬ朋友子女兩親親戚  
 及び家人を愛す、而して彼等を見ざることは、寧ろ吾人が彼等を愛する障礙とはな  
 らずして、其不在は却て殊更に愛を熱し愛慕の念を強む。然ればパウロもモイセ  
 イに就きて、彼は財寶富貴榮譽其他エギプトの一切の尊貴を棄て、イウデヤ人と  
 偕に苦むことを勝れりと決心したりと云ひ、次に此原因を以て彼は此等のことを  
 神の爲になしたるを示しつゝ、之に加へて「蓋彼は見るべからざる者を見るが如く  
 に爲して忍耐せり」(エペソ書一)と云へり。爾は神を見ざるも彼の造物を見彼の作爲  
 なる天地海を見ん。而して愛する所の者は、其愛する者の行爲或は靴或は衣服或  
 は其他のものを見て其愛を熱せらる。爾は神を見ざるも彼の役者及び友即ち諸  
 聖人と神の前に勇氣を有する者とを見ん。今彼等に勤めよ、然らば爾は己が愛の  
 爲に少からざる慰を得ん。吾人は通例唯己の友のみならず其友の愛する人々を  
 も愛す。吾人の愛する者の中何人か我は斯る人を愛す又其人に對して顯された

る凡ての仁慈をも我自らに對して顯されたるものとなすと云はゞ吾人は彼を以て最も愛すべき人となし、此人の爲には何事をもなし、種々に之を喜ばすことを力めん。今ハリストスに對する關係に於ても同様になすことを得。ハリストスは云へり、我は貧しき者を愛するにより、若し貧しき者或慈惠を受けなば、我自ら其慈惠を受けたるに同じ、故に我は之が爲に報いんと。吾人は貧しき者の運命を軽くするが爲に凡てをなさん、或は之を尙善く云へば、吾人が貧者に慈善をなすは、神に對して善事をなすことなるを信じて、彼等の爲に己が凡ての財産を盡さん。而して吾人は實に貧しき者を養ひながら、神自らを養ふことに就きては、ハリストスが「我が飢ゑし時爾等我に食はせ、我が渴きし時我に飲ませ、我が裸なりし時我に衣せたり」(マテウ福音廿五、三十六)と云ふを聞け、而して彼は吾人に吾人の愛を満足するに多くの機會を得しむ。

通例左の三者は吾人に愛を生ず體の美大なる慈惠吾人に對する他人の愛是なり。此等のものは皆自然に愛を吾人の中に熱せしむ。縦ひ吾人は他人より如何なる慈惠を受けざらんも、吾人若し彼は常に吾人を愛し、吾人を讃稱し、又吾人を感歎することを得れば、自らも亦直に彼に心を引付けられて、恩者の如くに之を愛せん。

然れど神に於ては管に之のみに止らす言を以て之を言ひ顯し得ざるが如き高尙なる程度に於て、此三者を完全に見ることを得。即ち第一、此神聖にして不朽なる者の美は解明されず、何物を以ても比較されず、凡ての言よりも最も卓越し、又凡ての理解にも勝る。然れど愛すべき者よ、爾美に就きて聞くと、毫も體のことを想像する勿れ、乃ち無形なる或光榮と言ひ顯すべからざる莊嚴とを理會すべし。

四。預言者は此光榮を儼りつゝ、曰らく「セララムその上になつ……二の翼をもて面をおほひ、二の翼をもて足をおほひ、二の翼をもて飛翔り、たがひに呼び曰ひけるは、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、」(イサイヤ書二、三)と即ち此美と此光榮とを驚き異めるなり。ダウドも亦此美を想像し、此神聖なる者の光榮に心を奪はれつゝ、「剛き者よ、爾の劍を爾の光榮と爾の美麗とを股に佩びよ」(聖詠四十)といへり。然ればモイセイも亦神に對する愛の害されたと、此光榮を愛したるとによりて、數神を見んと欲する希望を言ひ顯せり。オリブも亦我等に父を示せ、然らば我等に足る「(イオアン福音)と云へり。然れど吾人は如何程云はんも、神聖なる美の最も小さきもの、其美に似たる最も微弱なるものをすら想像し得ざるなり。然れども爾吾人に神の仁慈を數へしめんと欲すとも、是れ亦言を以て像ることを得ず。然ればパウエルは「神に感

謝す、其言ひ盡されぬ恩賜に由りてなり」(コリント後九の十五)といひ、又「神が彼を愛する者の爲に備へし事は、目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らず」(コリント前二の九)といひ、又「嗚呼深い哉、神の富と、智慧と、智識や、其定は如何に測り難く、其道は如何に究め難き」(ローマ三十一の)といへり。而して彼が吾人に顯したる愛は、如何なる言もて之を像り得んや。イオアンは此愛に驚きつゝ、「蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり」(イオアン一の十六)と云へり。爾若し神のその言を聞き、又其愛を知らんと欲せば、彼が預言者を以て言ふ所を聞き、曰く「婦、その乳兒を忘れて、己がはらの子を憐まざることをあらんや、縦ひ彼等忘るゝことありとも、我は爾等を忘るゝことなし」(イサイヤ書四)と。又聖詠者が「神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」と云へる如く、ハリストスも亦「母鶏が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき」(マテオ福音三十七)と云へり。預言者は曰く「父の其子を憐むが如く、斯く主は彼を畏るゝ者を憐む」と又曰く「天の地より高きが如く、斯く主を畏るゝ者に於ける其憐は大なり」(聖詠百二の)と。預言者は己が愛を言ひ顯すが爲に類似を求むる如く、神も亦吾人の救贖を立つる愛を吾人に顯すが爲に或類似を用ふ。預言者は渴ける牝鹿及び乾燥せる地を例に引けるも、神は母鶏の其雛に對する愛、父

の配慮、天の地より高きことと、母の憐情とを例に引けり、是れ神が吾に母の子女を愛するが如くに吾人を愛したるに由りてにあらす、此等の模範類似及び譬喩の外に最も強く愛を言ふべき他の例の吾人になきに由る。又神の吾人を愛し給ふことは、常に柔和なる母の子女を愛するが如きのみならず、一層之に勝れることに就きては「縦ひ婦、その乳兒を忘るゝことありとも、我は爾等を忘るゝことなし」て、神の言によりて知るべし。彼は此等の言を以て、彼の吾人に對する愛は、他の凡ての愛よりも熱心なることを表言せり。爾は此等のことを偕に想像すべし、然らば爾も亦熱き愛を起し、光明なる焔を燃さん。爾等の知れるが如く、人々に對する愛も、通例吾人が他人より受けし慈恵を記念するが如くに、何ものも吾人を熱せしめざるなり。吾人は神に對する關係に於ても、斯く行はん。

吾人は自ら神が吾人の爲に如何なるものを造りしかを想像せん、即ち天地海空氣、地上の動植物、昆蟲海および空中に住する生物、日月星辰、其他凡その見ゆるもの、電光、四季の順序、晝夜の連續、年時の變遷を造れり。神は吾人に靈を嘘入れ、吾人に智慧を賜ひ、最も大なる權柄を與へて、吾人を尊からしめたり、彼は天使を遣し、預言者を遣し、終には己の獨生子を遣したり。次に神は自ら獨生子を以て爾を救贖に招



ぐことを積く。パウロも亦勸説めて「神が我等を以て爾等に勸むるが若し我等ハリストスに代りて爾等に求む神に和睦せよ」(書五の廿後)と云ふを止めざるなり。神は之にても限らざりき、乃ち爾の本性の初果を取りて彼を「凡の首領権柄能力主制及び凡そ此の世のみならず、來世にも稱ふる所の名の上に置けり」(エス書一)。「今や真に」孰か能く主の大能を言ひ其悉くの讚美を述べん」(聖詠百)又「我何を以て主の我に施し、悉くの恩に報いん」(聖詠百十)と云ふは好時なり。實に斯く神を辱め及び斯く輕蔑されたる吾人の族の初果が、斯る高さに坐し及び斯る名譽を領くるに際して、何ものか斯る名譽と比較するを得ん。又己が智慧の中に、管に一般の仁慈のみならず爾自身に關する所のことを數へよ——例令ば爾が嘗て讒言に遇ひし時、誣告より救はれたるが如き、嘗て暴風雨の暗夜に於て盜賊の手に陥りし時、彼等の陰謀を免れたるが如き、嘗て爾が負へる損失の後に賞せられたるが如き、重病に罹りて輕快せるが如きことを數へよ。

五。爾の一生涯に於て、神が爾に顯されたる諸仁慈を數へよ、然らば爾一生涯の中にはあらで、一日の中にも神の多くの仁慈を見出さん。而して神若し吾人が認めず知らずして、毎日神より受くる諸仁慈を吾人に顯すを欲せば、吾人は之を數ふる

ことすら能はざりしならん。此空中には惡鬼の存在すること幾何なるか。吾人の敵は幾何あるか。若し唯神は惡鬼にその畏るべく醜き顔を吾人に顯すことを許したらんには、吾人は畏れざるを得べきか、滅びざるを得べきか、消滅せざるを得べきか。此等のこと、並に吾人が知ると知らずして行ふ所の己が罪に就きて考へつゝ——神が毎日吾人の犯罪を罰せざることも、亦是れ少なからざる仁慈なり——吾人は神に對する愛を脩養することを得。實際爾は毎日罪を犯すこと幾何、仁慈を受くること幾何、如何なる恒忍を受け、如何なる寛容を受くるかを思ふに際して、神若し毎日罰したらんには——預言者が「主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん」(聖詠百二)と云へる如く——暫時も生存せざるべきを思ふ時は——神に感謝し、爾に遭遇する所の何事をも怨みかこたざらん、却て爾は多くの數ふべからざる惡を受くるとも尙適當なる罰を受けざりしを見ん。爾は心の状態の斯くの如き時に方りて、自己に大なる愛を熱し、預言者と偕に「神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」と云ふを得ん。爰に預言者は何によりて此動物を例に引きしかに注意を向くるは適當なり。鹿の數水の流に趨くは、強く渴を感ずるによりてなり、此渴の感覺は天然により、又彼が蛇を食食ひ、其肉にて養はるゝによりて生

す。爾も亦斯く行へ、智的蛇を呑噬し、罪を殺せ、然らば爾は神の愛に渴かん。惡しき良心は吾人を不潔なる者となし、失望に陥らしむるが如く、吾人が己の罪を殺し、己を惡癖より潔むる時は、吾人は靈的渴望の爲に洞察することを得、大なる熱心を以て神に祈り、己の中に最も強き愛を熾にし、言を以てのみならず、行を以ても此の附歌を歌ふことを得ん。福たる聖詠者が、此等の聖詠を詠じて之を吾人に遣りたるは、或は之を能く云へば、神の恩寵を詠じたるは、吾人が單り言のみを獻せん爲にあらず、乃ち行を以て之を實行せしめん爲なり。然れば、爾唯言を獻するが爲に此に入るが如く思ふ勿れ、否、爾が此附歌を伴唱する時は、神と爾との間の契約書として之を讀め。爾「神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」とて、云ふ時は、爾は神と約條を結べるなり、紙なく墨なき約定書を書けるなり、爾は何ものよりも多く神を愛すること、何ものも神の如くには尊ばざること、又彼に對する愛にて燃ゆることを高聲に承認したるなり。然れば、爾若し此處を出で去り、爾を誘惑して己の愛に誘引んとする、或破廉耻なる美婦を見れば、彼に云へ、我は爾に従ふことを得ず、我は兄弟司祭教師等の前に於て神と約定を結べり、我は此附歌を以て「鹿が水の流を慕ふ如く」彼を愛することを承認し、且つ約束せり、

我は約定を破らんことを畏る、又我は一なる神に對して愛を養成す。爾若し市場に於て銀、或は黄金の衣服、或は僕を携ひ、金の馬具を置たる駒に跨りて傲然として行く人々を見ると、此光輝に眩惑する勿れ、乃ち自ら復謳歌して己の靈に云へ、曰く「吾人が神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」とて、歌ひしは、久しからず、我は此言を自己に應用して之を己のものとなせりと。然れば、吾人は此等世俗の幸福を愛せざらん、是れ神に對する愛が、吾人の中に潔きものとして存し、分裂して弱まらざらん爲なり。此富は他の凡ての富、凡ての財貨、凡ての尊貴、凡ての光榮、凡ての顯達を吾人に得しむ。吾人は之を守らん、然らば吾人も亦他の何ものをも要せざらん。或者は若し耻づべき愛に己を渡し、或美しき娘に對する情慾に熱して、數、兩親の威嚇、朋友の譴責及び或人々の嘲笑を受くるも、尙之を遣てず、乃ち彼の女は縦ひ身分卑しく耻づべき者なりとも、又如何なる者たりとも、己の愛する女に悦ばるゝ時は、彼の女に對する執着よりして、己が家をも、家名相續をも、名譽をも、朋友の忠告をも、輕じて己の爲には、此等の事物に代ふべき大なる報酬となさば、況て當然に神を愛する者は、何時も人生の喜愛に動かされ易き者とはならずるなり。否、此愛に渡されたる者は、剩へ現世の光輝を見ずして、神に對する愛

を以て結び付けられ、一なる神の外他の何ものをも見ず、何處にありても彼の事を思ひ己を凡ての者よりも幸福なりと數へつゝ、凡ての幸福を嘲笑し、凡ての艱難をも輕蔑せん。彼等は縦ひ艱難の中にありとも、不名譽の中にありとも、挫折の中にありとも、悲哀の中にありとも、非常なる艱難の中にありとも、己が凡ての苦艱の間にありて、己の愛する者神の爲に之を忍受することの中に、或不可思議なる快樂を見出しつゝ、諸王よりも福なる者と己を數へん。

六。視よ、バウルも何によりて日々牢獄難船曠野に於ける死の危険の中にあり、鞭笞及び他の無數なる罰を受けつゝ、樂み祝ひて自負したるかを、然れば彼は或は神の光榮を望むを以て誇と爲す、第此のみならず、乃亦患難を以て誇と爲す(ローマ書五)と云ひ、或は又「苦を喜び、且つ我が肉體に於てハリストスの患難を補ふ」(コリナ書四)と云へり、然れど又「蓋ハリストスの事に關して爾等に賜りしは唯彼を信するのみならず、亦彼の爲に苦を受くるなり」(コリナ書九)と承認し、且つ表言しつゝ、之を恩寵の賜と名づけたり。吾人も亦斯る心の状態を有することを力め、且つ吾人に及べる凡ての艱難を喜びて忍受せん。而して吾人もし預言者の愛し、が如く神を愛しなば之を忍受することを得ん。預言者の愛は此附歌のみならず、彼の左の言よりも見る

ことを得。彼は「我が神よ、我が靈爾を慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し」と云ひ、又「我が靈は勇毅生活の神に渴く、我何の時にか至りて神の顔の前に出でん」(三)と續けたり。彼は我が靈は活神を愛したりきと、は云はざりき、或は我が靈は活神を愛し始めたりとも云はざりき、乃ち己が状態を顯さんが爲に、己が愛の二つの性質及び愛の熱切と堅固なることを示しつゝ、愛を「渴」と名けたり。渴ける者が自然の要求によりて、嘗に二三日のみならず、乃ち一生涯に於て渴を感じるが如く、此福たる預言者及び諸聖人の痛悔の感情を有ししことは、嘗に二三日のみならず、斯くの如き痛悔は毫も驚くべきことにあらず、乃ち日々敬虔にして常に愛することを續け、又己が愛を強めたり。彼は此事を表言しつゝ、「我が靈は勇毅生活の神に渴く」といへり。彼は爰に己が愛の原因を説明し、及び如何に神を愛すべきかを爾に示さんと欲す。彼は之を顯すに「我が靈は生活の神に渴く」と云ふ言を以てせり。彼は恰も左の如く呼びて、俗事に縛らるゝ衆人に説き勧むるが如し、何の爲に爾等は無智にして體にて誘惑さるゝか。何の爲に爾等は名譽に渴するか。何の爲に爾等は快樂の爲に窘迫めらるゝか。此等のものよりは常に何ものも遺らず、又此等のものは常に存せず、乃

ち凡ては去りて過ぎ行くなり、凡ては蔭よりも虚しく、夢幻よりも欺かれ易く、春の花よりも速に凋落す、或者は吾人の死と偕に吾人を遺て去り、或ものは吾人の生時已に亡失す。此等の事物を領有することは望ましからず、快樂は堅固ならずして變化は迅速なり。然れども神に在りては、毫も斯くの如きことなし。神は如何なる變易變化にも服せず、生存して永遠に實在す。是故に吾人は暫時にして速に過ぎ去るものを遺て、永遠なる者及び永在の者を愛せん。彼を愛する者は何時も耻なく、愛する者を失はず、奪はれざるなり。富を愛する者は死の至れる時或は其死する前に己が愛の目的物を奪はる。暫時的な名譽を愛する者も亦之に同じからん。而して體の美は數、名譽富貴よりも一層速かに失せ去るなり。總じて世俗のことは暫時にして速かに過去するものにして、其始るや否や、若くは顯るゝや否や直に消滅す。然れども靈的事物に對する愛は、全く斯くの如きものならず、此愛は常に活きて花咲き、老を知らず、舊びず、如何なる變遷如何なる變化にも服せず、未來の知れざることを畏れざるなり。此愛を得る者は現世に於ても益を得、諸方より彼等を保護し、此世を逝りたる後も彼等を遺てず、乃ち彼等と偕に彼處に移り、彼等と偕に旅し、彼等を其將來の日に於て星よりも光明なる者となす。福なるが、牙ドは之を

知れるが故に、斷えず神を愛し己の愛を心中に隠し得ずして、凡ての狀態を以て彼の内部に燃ゆる所の火を聴衆の前に顯すことを力めたり。彼は「我が靈は勇毅生活の神に渴く」と云ひ之に附加して「我何の時に至りて神の顔の前に出でん」と云へり。視よ、彼の如何に熱するかを。視よ、彼は如何に燃ゆるかを。彼は此世より逝りて後神を見ることを知りつゝ、其遅緩なるに苦み、又延期に堪へずして、爰に使徒の如き心の狀態を吾人に顯せり。然れば使徒は此世を逝るの遅緩なるを歎息せり（コリント後）。聖詠者も亦同じく感じたるによりて「我何の時に至りて神の顔の前に出でん」と云へり。貧賤の中に生活せし尋常の人、而も著しからぬ人の現世の生活を輕んずるは、縦ひその事の大なるも、凡ての快樂を受け、非常なる光榮を擔ひ、千百回の勝利を得、多くの敵を征服し、四方より光榮と尊貴とを受くる所の王が、此等の幸福、富光榮及び凡ての快樂を嘲笑して、熱心に未來の幸福に向ひ進む程には大ならず。是は高尚なる靈に取りては當然のことなり、是は智なる靈及び天の愛を以て圍繞まるゝ靈の記號なり。

七。吾人も亦彼に則りて此世の幸福に驚かざらん、未來の幸福に驚かん爲なり、或は之を尙能く云へば現世の幸福に驚かざる爲に未來の幸福に驚かん。吾人もし

堪えず未來の幸福を思ひて、天國不死無限の生命諸天使と偕に樂むこと、ハリスト  
 スと偕に在ること、過去らざるの光榮、凡ての悲哀を遠ざかれる生活を想像し、來世  
 に於ては涕淚罵詈、惡口死悲哀勞、老衰疾病、荏弱貧賤、讒言、餘寡、罪惡、審定懲罰、苦痛  
 及び總じて唯憂愁にして不快なる現世の生活にあるが如き、凡てのものにあらず  
 して、却て平和、溫柔、仁善、愛喜、悅光榮、尊貴、光明、其他言語を以て言ひ顯されざる幸福  
 の在ることを記憶する時は、此世の何ものも吾人を誘惑せずして、吾人も亦預言者  
 の如く「我何の時に至りて神の顔の前に出でん」と云ふを得ん。而  
 して吾人は斯る心の状態によりて、世の幸福の中にありても、傲慢に陥らず、不幸の  
 中にありても、憂悶に陥らず、嫉妬、虚誇、其他之に類することも、亦吾人を領せざらん。  
 然れば吾人は空しく此處に來らず、注意して附歌を歌はん、乃ち杖の代りに此附歌  
 を提げて此處より出でん。此等の各句は大に智徳を愛することを吾人に囑め、正  
 き信仰を教へ、及び生活の爲に至て大なる利益を興ふ、吾人もし注意して此初句の  
 各語を研究する時は、大なる福を得ん。是に依りて彼は爰に艱難、繁忙、若くは因循  
 にも罪を歸すべからず。縦ひ爾は貧しく又貧きによりて聖書を有せず、あるひは聖  
 書を有するも之を讀むの暇なくば、唯爰に爾が一再ならず、而も多回歌ふ所の聖詠

の附歌を記憶すべし、然らば爾も亦此處を出でし後、大なる慰を受けん。視よ、此附  
 歌は實に如何なる寶藏を吾人の爲に開きしかを。何人も之が解明を聞かざる前  
 は、其効力を知らざりしと云ふ勿れ、此附歌は解明さるる前にも、凡ての聽者の爲、及  
 び幾何か理解せんと欲する者の爲に、理解し易し。爾若し唯「神よ、我が靈爾を  
 慕ふこと、鹿が水の流を慕ふ如し、我が靈は勇毅生活の神に渴く、  
 我何の時に至りて神の顔の前に出でん」と云ふに己を慣さば、解明  
 を聞かざる前にも、諸の智慧に満たさるゝを得ん。又箇に此のみならず、各の附歌  
 も之と同様なる富を吾人に得しむ。假令ば爾若し「神を畏るゝ人は福なり」(聖詠百十  
 といひ、而して爾が云ふ所を理解せんと力むる時は、爾の羨望するは富める者、主權  
 を探る者、美麗なる者、強き者、宏莊なる家を所有する者、權力ある者、王宮に於て味ふ  
 所の食物、その他何人に對するにもあらず、乃ち敬虔に於て、愛智に於て、神の畏に於  
 て生活する所の者なり、且つ爾は箇に彼の將來の狀態のみならず、乃ち現在の狀態  
 を羨望せん。斯くの如き人は實に現世に於ても、尙此等の人々よりも、權力あり。  
 紫の衰衣を衣たる者も、疾病に罹る時は、侍衛および凡ての華美も亦毫も其病苦を  
 減せしめず、乃ち斯る時は、家人親戚、其他凡ての人々の彼を圍繞むあるも、又彼の身

邊に金衣の横りあるも、彼自らは之に横りて恰も燭の中に焼るゝが如し。然るに敬虔なる生活をなして神を畏るゝ者は、縦ひ其傍に父の居らす、奴僕の居らす、其他何人の居らすとも、唯兩三次天を仰ぎて凡ての燭を消やし得るなり。不幸又は意外なる事情に遭遇する時にも同一なるを見る、即ち富み且つ貴き人々は斯る時に騷擾さわぎぐも、常に敬虔にして智徳を愛する者は、戰慄せんりつせずして凡てを忍耐す。然れども神を畏るゝ人の良心は、雷かみなりに之のみならず、縦ひ如何なる艱難がいなんに遭遇せすとも、富者の靈たましいよりも最も高潔なる快樂にて樂むなり。富者は外部の快樂の中にありても己の不法を記憶し、及び不潔なる良心を以て生活をなしつゝ、飢ゑ勞れたる人々よりも尙己なほおのれを困難なるものと感ずれども、神を畏るゝ人は必要なる食物を有せざるも、幸福なる希望にて養はれ己が善行の爲に毎日報酬を受けつゝ、最も快樂の中に生活する人々よりも遙かに福なり。然れど我は講話を長くして爾等を勞らざるが爲に、最も熱心なる者等に各附歌を分解して、此中に含蓄する意義を研究することを任せ、又爾等の愛に對しては「愛に空しからずして來り、此等の附歌を受けて之を寶物として守れ、家にありて斷えず、彼等のことを思ひ、此等のことを己が朋友と妻とに告ぐべし」とふ教訓を與へて說話を終らん。此附歌は吾人に如何なる

苦を興ふるか、或は肉慾、或は憤怒、或は他の或無智なる情慾の起らば、斷えず附歌を歌へ、是れ吾人が現世に於ても大なる平安を以て樂み、來世に於ても光榮こうえい稱たう尊そんの今も何時も世々に歸する所の吾人の主イエスキリストスの恩寵と仁慈とに由りて永遠えいぞうの福を受けん爲なり。アミン。

### 第四十三 聖詠講話

ユレイの諸子の教訓（一）  
 我等の神よ、我等は己の耳にて聞けり、我が列祖は爾が彼等の日、即ち古の日に、行ひし事を我等に述べたり。  
（二）

一。此聖詠は預言者（ダウド）の作なれども、自己の名儀を以てせず、マカエー等の時に在るべかりしことを預報し、且つ説明しつゝ、マカエー等に代りて作りたるものなり。諸預言者等は皆斯くの如くありしなり、彼等は過去、現在、未來を冥想したればなり。然れども述べられたる趣意の最も明瞭ならんが爲に、マカエー等は何人なりしか、彼等は何事を忍受せしか、又何事を行ひしかを話さるべからず。通稱

エビソンと云はれしアンテオフはイウデヤ人を攻撃し、凡てのものを破壊し、多くのイウデヤ人を國風より離れしめたりしが、此等のマカニ等は斯る誘惑の間に巍然として立てり、而して殘酷なる戦争の始るや、彼等は何事をも爲すして隠れたり。使徒等も斯く行へり。彼等は往々公然と危険を冒し、も時としては逃げ走り又隠れたり。彼等の少しく勇むや、勇猛なる獅子の如く、洞穴より立起り、避難所より出て、唯己の爲のみならず、出來得る丈他の人々をも救はんと決心せり、彼等は生國の諸市及び四方を周行し、尙ほ健全なりし衆人を招集し、而して苦める者及び多くの放肆なる人々に國法に歸るべきことを勧めつゝ、歸正せしめたり。彼等は云へり、神は仁愛なるによりて、常に吾人の痛悔を容れて救贖を奪はずと。彼等は之を報じつゝ、勇敢なる人々を以て軍隊を組織せり。彼等は妻子奴僕の壓服され、生國の破壊されしが爲に戦はずして、律法と國風との爲に戦へり、故に神は彼等を指揮せり。斯くして彼等は戦場に出で、己の生命を犠牲に供しつゝ、武器を携ふることを望まず、凡ての武器の代りに戦争を奨励する充分なる力を見出しつゝ、諸敵を放逐したり。又彼等は出陣しつゝ、或者の行ふが如く、諸敵に走らず、歌をも歌はざりき、又他の戦に於て數々あるが如く、自己の傍に奏樂者を有せず、乃ち彼等と

借に在り、彼等と借に戦ひ、且つ彼等に幫助の手を伸さんことを至上なる神——彼等が爲に戦をなし、其光榮の爲に苦行したりし所の神に祈禱せり。吾人は諸敵に對して行くことを心掛けつゝ、心靈的保護にて守られたる此神の軍隊の何事を云ふかを觀ん。『神よ、我等は己の耳にて聞けり』。彼等の軍に屬する或者等はアンテオフの軍隊の無敵なると整備したると、其軍隊の如何に最初の侵入の時に勝ちて諸物を占領したるかを見、又自己の微弱にして小數なるを想像しつゝ、落膽沮喪したるが故に、預言者は彼等の心を勵まし、並に凡てのこの神の指導に關はることを知らしめ、又軍隊なきも神の佑助によりて勝を奏し得ることを知らしめんと欲しつゝ、軍隊に對ひて祈禱の状態の下に、或訓諭教誨を述べ、及び神との對話を以て彼等に熱心を惹起さしむ。而して此事が彼等に慰を與へしこと少しとせず。彼等に向けられたる言は神に向けられたる言程には力を有せざりしならん。是故に彼は次に『蓋彼等は己の劍を以て地を得たるに非ず、彼等を救ひし者は己の臂に非ず』(四)と云へり。彼は此言を以て苦行をなすに薄弱なる志向を有し、及び人事的方法を以て勝利を得んと欲したる者を鼓舞す。此祈禱は軍人に万事神を恃むべく、神を恃む希望の中に勝利を求むべきことを

獎勵す。彼は何故に單「聞けり」と云はすして「己の耳にて聞けり」と云ひしか。他の或肢體にて聞き得るか。此等の言は余分なるにあらすや。否。人々は通常何事か自ら感服したるを話し、又何事か重大なること或は未だ全く感服せざる人に非常なることを話す時は、吾人は常に己の耳を指して己の耳にて聞けることを示すなり。而して實に此場合に於てのみならず、吾人は他の場合に於ても通例己の感服を證者となしつゝ行ふなり。斯くの如く彼等が己の耳を信用するは、是れ聽衆を信用せしめんとてなり。吾人は目と手とに關しても亦同様に行ふなり。例令ば吾人が己の手にて觸れたり」と云ふ時の如き是なり。然れば使徒等は「我等の目に見我等の手に捫りたり」(イオアン第一)と云へり。然れども爰にも最初に示し「マカス」の諸子の善行を見よ、彼等は斯くも重き艱難を神の爲に忍耐し、生國と自由とを奪はれ、危険に服して、而も彼等の中の或人々は山野を彷徨する流浪者となりても尚「吾人は爾神の爲に斯々のことを忍耐したり、吾人に助けよ」とは云はず、唯如何なる權をも有せざるもの、如く自己の善行をも待まざるもの、如く神が彼等の祖先に示されたる仁慈に向ふなり。敢てするの勇なく、止むを得ず爲しめらるゝ人々の斯く行ふとも、毫も驚くべきことにあらざりしならん、然れ

とも己が善行に就きて多くのことを語り得る者が其善行を待まず、彼等の列祖の受けたりし神の仁慈を待みて救を求むるは、是れ彼等の甚だ智なる證據なり。彼等は列祖が神の仁慈を受けたる事に於て己自らの爲にも勇氣を生ずる少からざる動機を發見せり、何となれば唯神の名のみにて無数の戦を鎮め得ればなり。

二。「我が列祖は我等に述べたり」。爾等己の諸子の爲に注意せざる者よ、聞け爾等は惡魔の歌を歌ふことを彼等に許して神聖なる唱歌を習はしめず。古の人々は斯くの如くにてはあらざりき、乃ち彼等は常に神の行爲を物語る爲に此世を渡りて、二倍の裨益を奏せり。慈恵を受けし者はその慈恵を記憶して最も善なる者となり、彼等の子孫は斯る物語の中に少からず知神の問題を發見して善行に於ける熱心を惹起しぬ。両親の口は彼等の爲に書籍となり、其の爲す所言ふ所は悉く此等の物語に伴はれたり、何ももの之より心地よく又有益なるはあらざりしなり。實際或事件に就きての單純なる說話、空談、想像にして數々聽衆の爲に教訓となることありとすれば、況て大なる仁慈能力、睿智、照管(神の)を説明する此等の物語の大に聽衆を鼓舞し之をして最も熱心なる者たらしむるや、言を待たざるなり。或事件を目撃したる者は、聽官を以て之を他人に授けたり、斯くの如く聽官の信仰



に助くること目に劣らざるものあり。事件の行はれし所の現場に在らず、又其事件を見ざりし者の之を信することは其處に在りて之を實見したる者に劣らず、此事も亦彼等の信仰に少からざる助となれり。吾人は彼等が報せしこと、及び彼等が其身分に相似たる事件に就きて記憶したるを觀察せん。爾等の知れるが如く、何人かに需め願はんと欲する者は、彼が他人に願し、慈惠を見て之と同様なる慈惠を自己の爲にも願ふことを得。我は左のことを會得す、例令ば或奴僕が吾人に賜を願ひて、他の人も斯くの如き賜を受けたりと云ふ時は、彼も亦之を受くる大なる權利あることを示すなり、其例の余り不同ならざる時に限る、この不同とは一人に於て、一は事物に於ての不同を意味す。願はんと欲する人にして若し受けし所の人に類似し、又其願ふ事件に於ても類似せるものなる時は、其例は効力ありとす、又前者もし受くるの權利あるも、後者にして其權利なき時は、願を強めんことを要す。次に我が述べたることを聖書を以て説明さるべからず。ハナチヤの婦は「兒曹の餅を取りて狗に投ぐるは宜しからず」と聞きて「主よ、然り、但狗も亦其主の食卓より遺つる屑を食ふ」(マタイ福音十、廿七)といへり。パウロも一書札の中に、己が人格の秀絶なるによりて大なる權利あることを證しつゝ、「若し他人此の權を

爾等の中に獲ば、況や我等をや」(コリント前、九、十三)と云へり。又彼は「ソリモンに遣はし、書札に於て「兄よ、爾に由りて聖徒の心安んせられたればなり。故に我ハリストスに在りて毅然として爲すべき所を爾に命ずるを得、雖も奪愛の故を以て爾に求む」(一テモニ、二)と云へり。爰にも例は同一なり。誰か若し始めに受けし者ありとすれば、後に願はんと欲する者にして彼に類似し、或は彼と同一なることを願ふ時は、是れ第二者に戸を啓くが如し。而して他人に願はれたる恩惠によりてのみならず、皆て吾人自らに對して願はれたる恩惠によりても吾人の願はるべき力を得ることあり。パウロも斯く行ひて「ソリモンに遣はし、書の中に「爾等、エサロニカにも一、次も二次も我の乏しきに供する爲に送れり」(一テモニ、一)と云へり。視よ、多くの者は何ものをか與へつゝ、何故に此事を他人に語げざらんことを命ずるか、是れ或者に願はれたる慈惠が發端となりて、多くの者をして與へし者に願はしめざらん爲なり、何となれば一度與へし者は、到底他の者にも與ふることを辭し得ざればなり。人々は其與ふるにより貧しきに至るを以て、斯ることを命ずるも、之に反して神は或者に與へたることを告げ知らすなり、是れ神は與ふるにより、一層其富を顯すを以て、他人にも同じく彼に願ふの端緒を得しめん爲なり。然ればパウロは「凡そ

彼を儲ぶ者の爲に豊盛なる者なり』(の十二)といへり。爾は神の富の新なる性質を見るか。爾も亦斯る仁慈に則れ。爾若し貯蓄せる財寶を斯くの如くにして費さば、一層之を増殖すべく若し之を埋藏せば、一層減少すべし。斯く靈的事物と借にあることの時ありて物質的事物と借にあるは驚くべきことにあらずや。麥を借み之を家に貯ひて畠に蒔かざるは、蟲の食ひ盡すに與ふるなれども之を蒔かば豊なる收穫を獲べし。

三。爾等施濟を怠る者は聞くべし。爾等財寶を貯へて己の財貨を減する者は聞くべし。爾等夢の裡にありて富める者の眞に富ざることを發見する者は聞くべし。實に現世の萬事は毫も夢に優らず。夢に財貨を有ち王の寶藏の幸となるも夜の明けて夢の覺むると借に何人よりも貧しき者たるが如く、此世にありて凡ての物を領有すとも現世より彼處に一物をも携へ得ざる者は何人よりも貧しからん何となれば彼は唯夢の裡にありてのみ富めばなり。然れば爾若し我に富める人を示さんと欲せば、日の近づける時即ち吾人が生國に歸る其時に於て之を示せ、而して今や我は富者を貧者より分つを得ず、爰に此等の事物の中には眞理なく、而も數々心地よく且つ好音き名稱あるのみなればなり。多くの者は賢者を以て多く

見る所の者と名づくるも、實は名に適はず却て彼等は何ものをも見ざる者なり、斯くの如く吾人の考によりて、彼處に何ものをも得ざりし者に對して富める者てふ名稱を附するも、亦名に適はざることとす。現世に於て富める者は特に貧しと我は思ふなり、然し甚だ貧しき者ならずとも、甚だ富める者たらざりしならん。賢者は全く賢者たらずとも之を以て多く見る所の者と名づけられざるが如く、爰にも亦同様に判断せざるべからず。然れば吾人は虚名を遺て、實物を求めん。事物は名稱によりて成るにあらず、事物の性質に適合せる名稱は、事物の性質より生ず。斯くの如き者を富める者と稱するも、實際に於ては然らず。彼には多くの金銀、珠寶、綾羅、錦繡あり、其他何不足なきに、如何なれば富める者たらざるか。その富まざるは、金銀衣服にあらず、施濟は人を貧しき者となせばなり。而して此等のものは、草なり、枯條なり、藁なり。我に告げよ、如何なる衣服か裸體にして彼處の畏るべき裁判所の前に立つ所の者を蔽ひ得る。之を畏れつゝ、パウエルも「第願はくは衣たる後にも仍裸ならざらんことを」(五の三)と云へり。如何なる金錢か斯る危険の中にある者を購ひ得んや。如何なる奴僕か斯る刑罰に定められたる主人を保護し得んや。如何なる家屋か之を保護し、如何なる寶石か之を贖ひ得んや。如何な

る洗湯か罪より生ずる不潔を洗ひ得んや。爾等は何時迄己を欺かんとするか。審判は既に戸の側に近づけるに何時迄爾等は事物の真相を見ずして夢現に惑はされんとするか。次に吾人は自己の問題に向はん。「我が列祖は爾が彼等の日、即古の日に行ひし事を我等に述べたり」。此言は寓意的に吾人に關しても解釋することを得べし。若し列祖は彼等(イウテ)に述べたりとせば、聖神の感應にて神恩は彼等が知りしこと、同一なることを吾人にも賜ひしなり。此等の言を如何に他の意義に解釋し得るか。此等の言を新なる恩寵の作動—吾人が天に擧げられたること、天國を受けしこと、神が中間の障壁を破壊して人となりしことに關して會得することを得。然れども吾人は「彼等の日、即古の日に行ひし事」てふ言に向はん。是れ預言者は或古の事に就きて記憶し古の事に就きて云ふなり。彼は何故に新しき事又近來の事を云はざるか。吾人は彼等の記憶力の弱きによりて、近來のことを物語り之を以て正しく彼等を納得せしむるも神は古のことも今のことも一様に知り給ふによりて古きことを云へるなり。聖詠者曰はく「主よ爾己に全く之を(一本には「之を」の代りに「近來」)識る(聖詠百三)と。誰か古き事或は新しき事に就きて言ふとも神の爲には何等の區別あるなし、唯其主意

に適應すれば足れり。然らば預言者は如何に古き事件に就きて述べんと欲するか。吾人は聞かん。曰く「爾は己の手にて諸民を滅して彼等を植ゑ、諸族を撃らて之を逐ひ出せり」(節三)と。彼は如何なることに就きて如何なる勝利如何なる戦利品に就きて云ふを知るか、或は尙吾人の説明を要するか。思ふに、多くの者は今述べし所を既に會得したるなるべし、然れども知らざる者の爲に或事を加へんことを要す。彼は如何なる戦利品に就きて記憶するか。如何なる事に就きて記憶するか。彼等がエギベトにあり、曠野にあり、約地にありし所に達したるはエギベトより出でし者に在りし者に就きて言へり。曰くパレスチナに於て養はれたる彼等の子孫のバレスチナに入りし時は彼等は武器を要せず、只叫びて市を取れり、彼等はイオルダンを過ぎて最初にイエリホン城に至りしが、戦ふと云はんよりは、寧ろ祝ひつゝ之を破壊せり。彼等は武器を採りて出でしも、戦争に行くにはあらず、祭日又は祝典に行くが如く、武器を装へるは防禦の爲と云はんよりも、寧ろ裝飾の爲にし、聖衣を着けて軍隊を先導したる、レウト等と偕に城壁を旋れり(ウツリナ)。斯く數千の軍隊が秩序整然嚴正肅々として、恰も一人の敵なき

土地を進軍するが如く、喇叭の好調を以て凡ての事をなし、所の此奇異にして且つ非常なる観物に注目せざるべからず。聖堂に於て騒擾ぐ者は恥づべし。若し喇叭の響く所に於て斯る整肅のありしならば、神の自ら言ふ所に於て騒擾ぎて聞くことを妨ぐる者は、如何にして免されんや。然れども爾は云はん、何故に預言者はエギベトより出でし者に就きて云はざりしかと。是れ彼等が悉く亡びて罰に服したるに由る。そも何の爲に彼等は悉く亡びたるか。其重罪を犯し、が爲なり。又神は之を以てパレスヲナを占領すべき者がエギベトの悪と妄信及び凡ての不敬虔とを見ざらん様、又何人とも此不敬虔の教師を有せざらん様なし給ひしなり。彼等は曠野に於て多くの奇蹟を見たるも、尙迷夢の覺めざりし程エギベトの悪風に感染し、且つ虜にされたり。而して彼等若しエギベト人よりも尙惡しかりしハオネイ人を己の教師となしたらんには、彼等の不虔は斯程迄には至らざりしならん。是によりて神はエウレイ人より生れし子孫の壯年に達せざりし迄、彼等を曠野に止めたり。

四。吾人の述ぶる所は自説にあらすして聖書より採れるなり。然れば神エウレイ人を曠野に導きて數々彼等と語るや、その神に聽かざりしにより、預言者イエゼ

イヲを以て彼等を誹謗したり(イエゼキヤ五)。然れども彼等がイエリホんに近づける時、武器を採ることを命せしは何の爲なるか。思ふに、武裝せずしてイエリホんに近づくは、彼等の最も驚く所なるべければなり。惣じて神は斯る場合に於て或人事的のことを爲し、又感覺的のことを取りて助となすべきことを命じたるは、是れ人々の荏弱に對する寛容によりてなり。彼等の武裝は城壁を破壊するが爲に何事を爲し得たりしか。喇叭の音は何事を爲し得たりしか。彼等が人々に對して攻撃を加ふる時は、刀劍も亦多少効力あるべし、然れども城壁を破壊するに際して、何の爲に武裝するか。又ゲデオンの時、軍隊に招集されたる者は招集されざりし者の如くなりき、彼等は皆眼前にありたればなり(士師記七)。そも是れ何が爲になされしか。斯くの如き命令を行ふ者を信仰に導かん爲なり。肉體に懸着し、何時も無形の事物を見ずして、感覺に沈める靈をば、見ゆる者を以て見えざるものに異せざるべからず。然れば預言者等が神のことを説話するに、人の肢體を藉りて述ぶることは必要なりしなり、尤も彼等は此等肢體の下に無形物を想像したるにあらず、乃ち感覺に渡されたる靈を、人事的のことを以て人事的以上のことに教へん爲なり。神聖なる行爲は或思想上のことなるが故に、當時の人々の不信に止まら

ざらんが爲に神は或感覺的のことも附加ふるなり。神若し彼等に此日城は破壊せらるゝも爾等は無事平安ならんと云ふとも恐らく多くの者は之を信せざりしならん今神は人の智慧の或支柱とも云ふべき此等の命令を附加ふ。而して述べられたることの唯推量たるが如く爾等の思はざらん爲に我は爾等に我が言の確實なるを證する所の古代の或事件を述べんと欲す。ネーマンはシリヤ人なり。彼は癩病に罹りて之を愧ぢ預言者(エリセイ)によりて病を癒されんと欲し、非常なる危険を冒してパレスチナに出發せり。彼は彼處に至り預言者の戸の前に立ちて自己の治療者を呼べり、エリセイは注意して彼の言ふ所を聴きしも出で來らず、唯イオルダン河に行きて洗ふべきを命せり。命令は容易なることにして、其中には多くの感覺的のことも含み、深き思慮を要せざりしが故に、ネーマンは信せざりき、然れども彼は何と云ひしか。曰く「我は彼必ず我がもとに出で來りて立ち、その神の名を呼びて、その所の上に手を動して癩病を癒すならんと思へり」(第四列上二)と。爾は彼の靈が如何に或感覺的の徴表を要めたるを見るか。治療者の命令のみにては物足らず、尙治療者の手を下すことを必要なりと思ふは是れ癒さるゝ者の荏弱き結果なり。吾人は之を他の多くのことにも解釋することを得。故に

ハリストスは必ずしも言にて癒さずして、亦手にて療せり、時として彼は一言を以て、又時としては一の望を以て萬事を行ひたりしも、手を口及び舌の上に置きて彼に來れる者を療せり。彼は何に由りて斯く爲しや。來る者の荏弱によりてなり。然れば神は爾をして彼等の荏弱によりて神の斯くなし給ひしことを信用せしめん爲に斯る動作を要せざりし者を讀めたり。曰く「我誠に爾等に語ぐ、イスラエルの中にも我は是くの如き信を見ざりき」(マタイ福音書八の十)と、是れ主が百夫長の己の家に來ることを主に願はずして、彼の一命令にて足れりと言ひし時に述べられたる言なり。然ればエゼキヤの爲に至も斯ることは致されずして、唯預言のみを與へ、人事的のことは毫も加へられざりしなり(第四列王紀上十九の七)。然れども己が妻の不義を疑ふ者には或感覺的の行爲を爲すべきことを定められたり(民數紀二二の九)。爾若し之を寓意的に受けんと欲せば、使徒言へり、何となれば「此の諸事は彼等に遇ひて監と爲れり、此等の録されしは我等世の末に及びし者の警と爲らん爲なり」(コリント前二の十一)と、喇叭の代りに言を用ひ、敵の城壁および武裝せる人民をイエスの全備の武具(エペソ書六の十)を以て破りし所の教會の秀でたる教師等を想像すべし。而して七日と云ふ數は「スポタ」(安息日)を破ることを吾人に預示せるなり、何となれば斯る誠命は首に與へ

られざりしに由る。是故に神は献祭に就きて曰く「このことを誰が爾等に要めしや」(イサイヤ書)と又曰く「願と聖き肉汝に災を脱れしむるや」(イエレミヤ書)と又曰く「爾等は四十年荒野に居りし間犠牲と供物を我を献げたりしや」(アモス書)と又曰く「サワより我許に乳香きたり遠き國より薑蒲きたるは何の爲ぞや」(イエレミヤ書)と又曰く「祭祀と禮物とは爾之を欲せざりき」(聖詠三十)と又曰く「その言に従ふことを善し給ふ如く燔祭と犠牲を善し給ふや」(第一列王紀)と又曰く「爾祭を欲せば我之を献らん」(聖詠五十)と又曰く「夫れ願ふ事は犠牲にまさる」(第一列王紀)と又神は祭典を排斥して曰く「我は爾等の節筵を悪み且藐視しむ爾等の歌の聲を我前に絶て汝等の琴の音は我之を聴かじ」(アモス書五)と又曰く「我が心は爾等の新月と節會とをきらふ」(イサイヤ書)と又曰く「斯くの如き斷食は我が悦ぶ所のものにあらす」(イサイヤ書)と「イエゼキイリも曰く「我彼等に善からぬ法度を興へ彼等が由りて活くべからざる律法を興ふ」(イエレミヤ書)と。然れば爰にも「スポタ」安息日は破らる。又何によりて神は「誰か之を爾等の手より求むるか」と云へるや。我は之を決定するに爾等の前に出さん、爾等が潔白なる生活を遂ぐる時に斯くの如き問題を決定することを得ん。

五。神若し「コルニリイを其卓越せる行の爲に招きて言ひ顯すべからざる秘密を

知らしめ又割勢の人に、その熱心にして讀みたるが爲に其讀める所を悟らしめしならば、況て己に信せし所の爾等にして正しき行を示さば、神豈最も顯然に教へざらんや。不潔なる生活は眞理を知るに妨ぐ、されば「バナル」は「我も爾等に語りし」と神に屬する者に於けるが如くするを得ず、蓋爾等の中に争鬭と分離とあればなり」(コリント前書)と云ひ、イサイヤも亦「彼等は我が途を知らんことを好み、又義を行ふ」(イサイヤ書)と云へり。斯くの如く潔白なる生活と綿密なる探求とは彼等を知識に導くなり。主曰へり「尋ねよ、然らば遇はん」(ルカ福音)と。既に寝ねし友にパンを贈ふ者に就きての譬喩も亦同じく之を證す(ルカ福音)。然れば靈的のものを求めし所のソロモンは願はざりし所をも受けたり(第三列王紀)。若し一の懇切なる熱心にして斯る能力を有せば、之に靈的願求と潔白なる行とを合したらんには、其受くるや如何に容易なるかを想像すべし、然れば聖書に「我爾等に語り、若し彼は友なるが故に、起きて彼に與へずば、乃其切迫に依りて、起きて其需むる如く彼に與へん」(ルカ福音)と云へり。次に吾人の問題に向はん。「爾が彼等の日、即古の日に、行ひし事を我等に述べたり。爾は己の手にて諸民を滅して、彼等を植ゑたり」。視よ、預言者の表言は如何に正確なるかを。言ふ意は、爾は當時唯勝利

と攻撃とを以て事を終らざりしも、最も遠き所に迄凡てを擴張めたり——縦ひ其方  
 向は反對にして同じからざるも——一は國を領し、他は寄寓者たり——然れども前者  
 は全く亡され、後者は市民となり、領主となれるが如き變化を生じたり。是に依り  
 て彼は前者に就きて「爾は己の手にて諸民を滅して」と云ひしも、エウレイ  
 人に就きては「彼等を植ゑたり」と云へり。預言者は神の能力を名づけて「手」  
 と云へり。外より來りて、市もなく、家もなく、行くべき所宿るべき所をも有たざる  
 者を、神は斯く速かに土着の住民よりも強き者となしたらんには、況て生國より放  
 逐されたる吾人をば、神豈輕蔑せんや。「植ゑたり」とは何の意なるか。爾は確  
 立せり、植ゑられたるものは堅固にして動かざる者となればなり。然れども爾は  
 云はん、エウレイ人等は移されざりしか、他國に引かれざりしかと。然り引かれた  
 り、然れど彼等に移らしめたる者の弱きによるにあらず、乃ち植附けられたる者の  
 悪しきによるなり。若し彼等の行爲が原因とならざりしならば、彼等の家に止ま  
 ることは何ものも妨げざりしならん。「爾は諸族を撃ちて之を逐ひ出せ  
 り」。或人々は此言を以て、エギペト人に就きて云はれたり、と云ふ我も亦其等の  
 異教人に就きて云はれたることと思ふなり。神は敵を滅ぼすことに於ても己

に屬する者を固むることに於ても己の能力を示して、後者(異教人)を罰に服せしめ  
 たり。「蓋彼等は己の劍を以て地を得たるにあらず」。「彼等を救ひ  
 し者は己の臂にあらず、即爾が右の手、爾の臂、爾が顔の光なり」  
 (四) 實に彼等は全く武装されつゝ、戰に勝てり、彼等は武装されたり、然れども此  
 は武器にはあらず、彼等を率ゐる神の行爲たりしなり。爾は預言者が如何に祈禱  
 の状態の下に、萬事を神に委ぬべきことを訓戒しつゝ、勸告を與ふるを見るか。又  
 父祖は此地を領せず、而も以前に没したるに、預言者は何故に之を父祖の嗣業と名  
 づくるか。約束の列祖に與へられしに由る。神はアウラアムに言へり「我が爾に  
 示さんその地に至れ、我之を爾と爾の裔に與ふべし」(創世記十二の十一、十三の十五)と。預言者は「右の  
 手」及び「臂」と云ひて、斯る感覺的の表言を用ひ、次に「爾が顔の光なり」(保護照  
 管と附加へて、言語を高むるを見よ。彼等の爲には唯神が喜したること、神が彼等  
 と儕にありしことも亦満足なりき。次に「蓋爾は彼等を愛せり」と云ひて、其  
 原因をも示せり、何となれば爾は彼等を愛し、之を喜したればなり。斯くの如く彼  
 等の成効は恩寵の作爲にして、功勞にあらず、彼等の之を受けたるは、己が善行の爲  
 にあらずして、神の仁慈によりてなり。「神我が王よ、願はくは救をイヤコ

フに賜へ(節五) 爰に談話に如何なる接續あるか。前に述べられたることに關して大に接續せり。其言の意味は左の如し、吾人は彼等列祖の子孫なり而して爾は彼の時も今も行ふ所のその神なりと、然らば斯る變化は何處より來るか。實に其神と爾と異なる者にあらず乃ち同一なる爾なり。

六。爾の同一なるが如く、我も他の神を認めず乃ち「爾は我が王にして我が神なり」吾人は爾の權内を離れず、他の保護者を認めざりき。「願くは救をイアコフに賜へ」即ち神も同一なる神にして照管も同一なり事情の變遷は何より生ずるか。爰に預言者は復び神の佑助の容易なると其權威の偉大なるを願ひ、又祖先に就きて記憶すること徒然ならず乃ち彼は神を己に傾けんと欲して己が權利の代りに彼の善行を示せり。「我等爾と偕に角を以て我が敵を衝き破らん」(節六) 言ふ意は爾も同じ照管も同じ、吾人も亦爾を認めて同一の武器を用ふとなり。此言の意味は斯くの如し。他の譯者は「我等を苦むる者を衝き破らん」(不明)となす。「爾の名に頼りて我等を攻むる者を踐まん」。他の譯者は「足にて踏著けん」(シムマフ)となす。彼續けて曰らく「我爾と偕に」何をか云はん。唯爾の名を呼べば足れり而して万事は非常なる進

歩を以て行はると。彼は、吾人は勝たんと云はすして「踐まん」と云へり。言ふ意は、吾人は彼等を何者とも思はじ畏れずして、毫も意に介するに足らざる者として尾撃せんとなり。他の譯者も「足にて踏著けん」てふ言を以て同じく言ひ表しつゝ、權力ある勝利勞苦なき攻撃畏なき戰闘を示せり。「蓋我は我が弓を頼むに非ず、我が劍は我を救はんとするに非ず」(節七) 何によりて爾は弓又は劍を用ふるか。何故に武装するか。何故に弓と劍とを手に掲ぐるや。神の斯く命じたるに由る、然れば我此等の武器を用ふとも萬事に於て神を恃むなり。然れば上よりの佑助を以て保護せらるゝ者は常に斯くの如く見ゆる敵と戦ひ、又見えざる敵と戦ふ。然れば爾も亦惡魔に抵抗する時は云へ、我は己の武器を恃まず、即ち我が恃む所は己の力にあらず、己の善行にもあらずして神の慈憐なりといふ。然れば「ニイルも我等が汝の前に祈禱を献つるは、自己の公義によるに非ず」(節八)と云へり。「乃爾は我等を我が敵より救ひ、我等を疾むる者を辱しめん」(節八) 言ふ意は、古のこと及び祖先と偕にありしことを引くは何の爲なるか。吾人は自ら爾の照管の多くの聘質を有し、又榮譽ある戦利品及び奇異にして且つ非常なる斷えざる勝利を列挙することを得。故に「辱しめん」と云へり、



即ち爾は單に吾人を救はず、單に強奪せず、乃ち吾人を攻撃する者を耻かしむとなり。「我等は日々神を以て己の譽となし、永く爾の名を讚榮せん」  
 (九) 言ふ意は勝利は通過かんも、恩寵は吾人に止まるとなり。「日々」とは一生涯を云ふなり。吾人は爾を謳歌し、爾の扶助を讃揚することを止めざらん、是れ吾人の光榮なり、吾人の名譽なり、吾人は之を以て衆人の前に自負す、吾人に宏大なる市あるに由るにあらず、第一の勝利を得たるに由るにあらず、體力の他の者に勝れたるに由るにあらず、乃ち眞の神を有するを以て自負するなり、吾人は之を以て爾が吾人を助くる時のみならず、吾人を棄る時も讚美せん。視よ、「日々」てふ言は如何なる意味なるかを。パウロも之と同様に云へり、「我に在りては我等の主イエス・キリストの十字架の外に誇る所なし」(六の十四)と。否實に他に斯る光榮なきなり。視よ、彼は又何によりて「第此のみならず神を以て誇る」(ローマ五)と云ひしかを。何ももの斯る榮譽と比較ぶることを得ざるなり。然れば何人も富を以て誇らざるべし、何人も世俗のことを以て自負せざるべし、唯神を己の主宰として有することを誇るべし。此は凡ての自由に勝り、尙天にも勝る。若し或名を稱せらるゝことにして、數々人々の間に榮譽となる時は、神の名を以て稱せらるゝこと

は如何なる光榮たるかを想像すべし。然ればパウロも「凡そキリストスに屬する者は肉體を十字架に釘せり」(五の廿四)と云ひて之に大なる價値を歸せり。「然れども今爾は我等を棄て、我等を辱しめたり」(十)。棄つることの後に、直に汚辱と危険即ち凡ての艱難を受くべきこと生ず。預言者は己の軍隊を「力」と稱す、神の智なる攝理によりて、主長と臣下との間を和合せしめんが爲に、軍隊の中に王の力の含まるゝに由る。王は臣下に待つ所あり、而して臣下は主長に待つ所あり、何となれば彼等は多く互に相助ければなり。神は傲慢なからしめん爲に、廣々大なるものをして小なるものに待つ所あらしむる様爲し給へり。彼は生命なき物にも亦斯く爲し給へり。然れば時としては動く所の柱は、其下に装置せる小石にて保たれ、貨物を満載せる船舶は小なる船にて整理せられて危険を免るゝなり。「爾は我等を棄つるとも」とは何の意なるか。言ふ意は、吾人は斯る苦難の時にも爾より離れず、爾を謳歌讃揚すとなり。「我等をして敵の前より退かしめたり、我等を疾む者は我等を掠む」(十一)。他の譯者は「爾は凡ての敵の下に我等を立てたり」(マフ)となす。視よ、彼は彼等が甚だ大罪人たりしも、充分なる課程(或は罰)を與へたることを示しつゝ、如何に重き艱難に就きて

云ひ又如何に悲哀の點を以て不幸を書かざる。

七。火城の中にありし少年等も亦同じくなせり、彼等は其時歌ひ且つ言へり「又爾は不法なる敵最も嫉むべき背教者の手不正の審判をなし、且つ全地に於て最も悪なる王に附せり」(三十三)と又曰く「我等は凡ての人民よりも貶され、今や吾等の罪の爲に全地に於て輕蔑せられたり」(三十七)と。預言者は爰にも此事を言ひ願し、恰も左の如く云ふが如し、吾人は爾の照管を奪はれたるが故に、何人よりも輕蔑せられ、且吾人の艱難は之にて終らず、己の任意によりて吾人を分配する敵の獲物となれり。「我等を掠むて」云々の意は左の如し、即ち何人も彼等を妨げずとなり。「爾は我等を羊の如く食はるゝに任せ、我等を諸民の間に散せり」(十二)。「羊の如く食はるゝ」とは何の意なるか。即ち吾人を捕はれ易き者となし、不用の者と爲すの意なり。繁殖の爲に適當なる種羊あり、老いたるによりて或は子を産まざるによりて、唯食用にのみ適する所の羊あり。然れども彼等が異邦人の間に散らされたるは、何事よりも悪しく、彼等の爲には最も辛し、何となれば彼等は彼處にありて嚴格に律法を遵奉する能はず、又生國の風俗より遠ざかりたるに由る、加之彼等は一人人民の間にあらずして四方に散されたり、故に彼は曰へ

り、吾人は重く苦むのみにて復讐もしくは反對するを得ずと。是は羊との比較を言ひ顯すなり。「利なくして爾の民を賣り、其價を高くせざりき」(三十節)。此言の意味は如何。述べられたることは甚だ不明瞭なる様に思はる、然れども能く注意すべし、爾等の之を理解して歌はん爲なり。述べられたることは何を意味するか。預言者は其不要なると其論するに足らざるとを顯せり。言ふ意は、爾は吾人を何にもならぬ人々、最も價なき輕蔑されたる人々として棄てたりとなり。彼は人事上の慣習に合して之を云ふなり。吾人には不要にして大切ならぬ物を價を取らずして譲るの風あり、吾人は大切なりと思ふものは大なる價を取りて譲り、大切ならずと思ふものは價を取らずして之を譲り、例合ば或者は役立たぬ僕を、其半額を取りて人に譲るも、他の者は彼等の爲に何もかも取らざるなり。若し僅少なる價の爲に譲るは、賣らるゝものゝ大切ならぬことを示すとすれば、況て價を取らざるものをや。預言者も此事を云ふて曰く、些の價なき自己の所有物を棄つる者ありしが、如く爾も亦何にもならぬ吾人を棄て、全く吾人を輕蔑したりと。彼は次に「其價を高くせざりき」と附加して同じく表言しぬ。販賣は交換なり、然れば吾人は數々奴隷を譲りて其代りに金銀を受く。「我等を隣の辱

に任せ、我等を環る者の嘲と戯とに任せたり(十四)。「爾我等を諸民の諺とせり(十五)」。罰特に不虔者に辱められ、敵より罰を受け己の周圍に誹謗する者を見、四方より罵詈する者にて圍まるゝは耐え難し。「諺」とは何を云ふや。世評なり、嘲笑なり。彼等の周圍には惡意ある者無情なる人々ありき、此等の人々は管に彼等を恤まざりしのみならず、特に彼等を惱ましむる様に非難せり。思ふに、彼は爰に彼等の隣に住したるアラビヤ人を云へるなるべし。「異邦民は首を揺かす」。首を揺かすとは非常に喜ぶ者敵の狂暴を顯すなり。「我が辱は毎日我の前に在り(十六)」。他の譯者は「我が不虔は(マフ)となす」。「愧は我が面を蔽ふ」「我を侮り我を嘗る者の聲に因り、我に敵し我に仇する者の視るに因りてなり(十七)」。之は苦よりも多く彼等を惱しめたり。彼等は常に不斷安寧を樂み、又敵に勝ちたるが故に、彼等の顛倒れ突落され平安を發見し得ずして斷えざる苦を受くるの時衆人は口を開けり。曰く「是れ皆我等に臨めり、然れども我等爾を忘れず、爾の約を破らざり(十八)」と。他の譯者は「爾の約を變へざりき(マフ)となす」。言ふ意は、吾人は人々の如く爲ざりき。他の人々は艱難を受くるより前に亡びたるも、吾人は艱

難の後にも落膽せざりきと。彼等の之を云ふは、彼等と偕にありし者に善望を起さしめん爲なり。ダニエル及び三少年は「我等は罪を犯し不法を行へり(三の廿九)」と云ひしも、彼等は同戰者の心を勵しつゝ、「爾の約を破らざりき」といへり。彼等云へり、吾人若し最も大なる艱難を受け、大恩を受けし祖先より出生し、又不幸の中にありて、神より離れざる時は、吾人には救はるべき大なる希望ありと。八。斯くの如く「我が始めに云ひしことは、今も亦云はん」彼等は祈禱の狀態の下に、修道士等の心を勵まし、又恰も彼等に對して何故に爾等は救贖に失望するやと云ふが如し。吾人は神を以て吾人の保護者となす、吾人もし犯し、罪ある時は充分なる罰を受けん、吾人は誘惑の中にありて勇ましく立てり、吾人を導く者は常に罪人の爲にすら慮る所の者なり、是故に吾人は疑はずして善き終を待たざるべからず。「爾の約を破らざりき」とは何の意なるか。吾人を信用せる者に關して不正に行はず、乃ち正確に守りしことを云ふなり。吾人の爲に復讐する所の律法、人より凌辱を受くることを吾人に容さずして不法を妨ぐる所の律法を破るは、斯る幸福を興ふるものに對して忘恩の人となるは、實に至大なる不義なり。「我が心退かず、我が足爾の途を離れざりき(十九)」。シムマフは「我が

足』を『我を保持つものは……離れざりき』となし、或人々は『我が心後に向はず』『我が足は離れざりき』(アキラ及び)となす。爰に預言者は以前に述べしこと即ち彼等が斯る惡の暴風に際して毫も動搖せざりしことを述べ。彼は善く之を云へり。律法は前進せしめ、不法は退歩せしむ、律法は直道を歩むことを命じ、不法は人を曠野又は通行されぬ途に迷はしむ。預言者は爰に律法を『途』と名づく。又『吾が足爾の途より離れざりき』てふ言の中『離れたり』てふ言を七十譯者の譯によりて(他の譯者の譯によらずして之を解釋する時は爾(指)は爾の聖堂より吾人を遠ざけたり、又奉神禮を行ふことを妨げし所の他國にあるを許したりの意なり。『是れ爾が我等を龍の地に傷め、我等を死の蔭にて蔽ひし時にあり』(二十)。或者は『龍の地』を『烈怒の地』となし、他の者は『住むべからざる地』(ラキ)となす。又『死の蔭にて蔽ひし時に在り』を他の譯者は『爾は我等を蔽ひたり』(ラキ)となす。思ふに、此相違は、彼等が艱難を畫ける前述べの言即ち『我が辱は毎日我の前に在り、愧は我が面を蔽ふ、我を侮り我を嘗る者の聲に因り、即ち我等を傷めし時にあり』てふ言に關するなり。

此相違は、若し『我が足爾の途を離れざりき』てふ言に關する時は、爰に吾人が表言したる意味と相附合す。預言者は神が如何にエウレイ人民を、彼等の途即ち、彼等を曠野に遠ざけ、彼等を敵の間に遺て、生國と律法より遠ざけたるかを説明す。『我等を死の蔭にて蔽ひし時にあり』てふ言は、即ち之を意味するなり、死の蔭とは死を生ずる所の危険死に近き所の危険又聖書に所謂死の苦及び地獄の門と稱ふるもの是なり。又預言者は『蔭』及び『蔽ふ』てふ言を以て爰に此等の艱難の避くべからざると及び彼等が其中より如何なる救贖を見出し、また些たりとも其艱難を減ずるときへ能ざるを顯すなり。『我等若し我が神の名を忘れ、手を伸べて他の神に向はば、神豈之を糺さざらんや。彼は心の密事を知ればなり』(廿二節)。如何なる艱難の中にありても主人に勤むることを廢せざるは、是れ恩を忘れざる僕の本色なり、是れ智なる課程なり。彼等は之を聴く者にも、誠心誠意全力を盡して神に奉事するべきことを教ふ。『彼は心の密事を知ればなり』彼等の之を云ふは、聴衆が神に不適當なることを毫も思はざる様聴衆を嚇すなり。彼等の偉大なる善行を見よ、何となれば預言者は次に『爾の爲に我等毎日殺され、屠に定められたる羊の如し』

〔廿三〕と云へばなり。神に對する勤を廢てし他人に對する務を避けざるは大なる事なり、然れども斷えざる死の苦、日々之の危険に際し、神に對して斯る愛を守るは一層重大なりとす。バズルがロマ書の中に使徒の多くの危険を數へつゝ、此智なる状態を示したるによりて見るも、之が如何に大なるかを想像すべし(ロマ書八の三六)。彼等は舊約に在りて新約の苦行の程度に達したるにより、如何なる榮冠を受くべきか。バズルが「我毎日死す」(コリント前書三十一)と云へる如く、彼等も亦經驗にあらず、實行にあらず、靈に於て死するなり。彼等は何に由りて「爾の爲に」と云ふか。彼等謂らく、吾人は生國の律令に背き、之を棄て、安全に生活し得るも、吾人は生國の律法を棄て、平安を娛まんよりは、寧ろ重き苦を受けて生國の風習を保守するに決心せりと。「屠に定められたる羊の如し」。言ふ意は、敵の吾人を滅すの容易なること斯くの如しとなり。爰には彼等の順従をも示さる。吾人は斯る危険なる状態にあるに拘らず、その靈は不動の者として止まるなり。爰に又屠に定められたる羊の如き状態の中に在る者を守り、及び毎日死する者に、死に服するを許さうし、神の能力に正しく驚かざるゝなり。「主よ、起きよ、何を寝ぬる」(廿四)。他の譯者は「何を爾は寝ぬる者の如くなる」(マフ)となす。又

他の譯者は「起きよ」を「奮起せよ」(不明の譯者オリゲン)となし、又或譯者は「覺めよ」(マフ)となす。「覺めよ、永く棄つる母れ。何爲れぞ爾の顔を隠し、我等の苦難と我等の迫害とを忘るる」(廿五)。此等の言の意義は左の如し、爾は艱難を鎮靜するを得、何となれば此等は爾(神)の無力なるに由るにあらず、乃ち爾の寛容によりて生ずればなりと。爰に「寝ぬる」てふ言の下に平安を、「起きよ」てふ言の下に復讐を、「顔」てふ言の下に保護、照管、配慮、佑助を意味す。

九。「何爲れぞ我等の苦難を忘るる」。視よ、復び如何なる愛智なるかを。吾人の苦行とは云はず、思念の不動なるをも云はず、誘惑の中に試らるゝ靈をも云はず、彼等が此言を示し、己を義とする時にして、佑助を求むる時は、彼等が期定されしこと、即ち彼等の既に罰せられしこと、己に極めて苦みたることを示しつゝ、救を願ふなり。バズル及び他の預言者等も亦數々斯くの如く爲せり。然れど彼等は毫も未だ「ゲエンナ」に就きて、天國に就きて、知らず、又斯る智識に習はずして之を云へり、而も此際彼等は容易に凡てを忍耐せり。「蓋我が靈は塵に俯し、我が腹は地に貼きたり」(廿六)。彼等は「何爲れぞ我等の苦難、即ち煩惱を忘るる」と云ひて、次に彼等の煩惱の何事にあるかを述べ。此

等の言の意味は左の如し、吾人は亡びたり、吾人は葬られたり、吾人の状態は毫も死者の状態に優らずと。現在のこと靈を縛られし人々に就きては、彼等は眞に「塵地に貼きたり」とも云ふべく、口腹の慾に耽ける人々に就きては「彼等の腹は地に貼きたり」とも云ふべし。

實に地上の愛に渡され、塵に戀着し己の中にある無形の能力をも灰の奴隸となす者に就きては、正しく同一の状態にありと云ふべし。實際、身體の美は地及び塵に過ぎざるにあらずや、或は一層其よりも悪しきには非ざるか。爾若し信せずば墳墓の中を見よ、然らば彼處に塵及び灰を見ん。顔は此生命の奪はるゝ時、剩へ未だ死せざるに既に其醜を呈す。老の近づける時、病に冒さるゝ時、爾は同一の現象を見ることを得べし、何となれば是れ塵なるに由る。然れども智なる工師たる神が、無物の中より絶妙なる美を造られしは、爾をして姦淫に耽けらしめん爲にあらず、爾に己が睿智を示さん爲なり。是故に工師及び工師の睿智なる作爲を辱しめ、之を放肆姦淫に向くる勿れ。美を歎稱せよ、但し工師を讚稱する程にし、而して己の情慾を起さざるが爲に、其以上に歎稱せざれ。造物は美麗なり、是に由りて爾は造物主に叩拜すべきも、彼を辱しむべからず。我に告げよ、人若し王の金像或は畫像

を採りて之を泥土に潰し、或は他の之に類することをなしたらんには、彼は極刑に處せられざるか。人の肖像に不敬を加へて斯る刑罰に處せらるれば、神の造物と不敬を行ふ者特に有妻者にして不敬を行は、如何なる罰に處せらるべきか。我に自然の欲望を示す勿れ。婚配は爾が己の境界を越えざるが爲にも亦容されたるなり。視よ、爾が如何なる罰に當るべきかを。神は爾の平安に就きても、爾の名譽に就きても慮り給ふ、是れ爾が妻の補助により、自然の激動を鎮靜してこれを安んずるものとなし、又如何なる不名譽にも服せざらん爲なり、然るに爾は不節制にして、爾の爲に爾く慮り給ふ所の神を辱しむるか。我に告げよ、神若し婚配を律法となして之を行ふことを嘉されざる時は、爾は如何なる強迫如何なる苦痛を受けたりしかを。神は少からぬ慰を爾に賜ひ、爾の困難を減じたるに由りて、爾は神に感謝し、彼を讃揚せざるべからず、然るに爾は恩を忘れて、神を辱しめ、耻を忘れ、定められたるの境界を越えて己の名譽を汚せり。爾はバズルが今も衆人に對ひ、高聲に「淫行を避けよ」(コリント前)と告げ、或は寧ろバズルの心を幸り給ふハリストスの自ら云ふを聞かざるか。何の爲に爾は人の美をもつて樂むか。何の爲に爾に屬せざる者の顔を眺むるか。何の爲に淵の中に進み入るか。何の爲に網の中に己を

投するか。己が目を防守り己の視線を蔽ひ己の目に律法を置き、破廉耻なる瞥見を姦淫と並べ立て、嚇し、所のハリストスに聞け(マテ五の廿八)。快樂にして蟲を生じ、之に耽る者を断えず畏れしめ、永遠の苦痛に服せしならば、快樂の中に何の益あらんや。僅かに悪望を満足するが爲に永遠に苦まんよりは、寧ろ僅に己が妄想力を制して永遠の福樂を受くるは一層勝れるにあらずや。『我が子よ、然すべからず。我が聞く所の風聞よからず』(第一列王紀二の廿四)。我は我が言の唯或人々にのみ聞して衆人に聞せざるを知る、然れども或人々が傷を見出す所には治療も亦加へらるべし。何の爲に爾は婚配を辱しむるか。何の爲に臥床を汚すか。何の爲に己の肢に害を蒙らしむるか。何の爲に己の名譽を滅すか。宜しく情慾を絶ち好色を滅すべし。好色と酩酊とは姦淫の源泉なり。爾若し當然に快樂を利用せざれば、快樂は却て爾に憂愁を蒙らしめん。エウレイ人がハリストスの體を傾け、心靈の晩餐を味は、ずして姦淫を行ひし時に於て受けし所を聞け、使徒曰へり『我等淫を行ふこと、彼等の中の或者が淫を行ひて、一日間に二万三千人預れしが如くす可からず』(コリント前八の八)と。『起きて我等を佑けよ、爾の憐に因りて我等を救ひ給へ』(節廿七)。或譯者は『主や起きて我等を佑けよ、爾の名の爲に我等を』

救ひ給へ』となす。視よ、彼等が如何なることを以て己の言を結びたるを。彼等は己が無数の苦行の後に、何處より救贖を待つか。慈悲より、仁愛より、神の「名の爲」に「なり」。『爾の名の爲に』とは何の意なるか。(彼等は斯く云ふ)神自ら數々我は『我が名の爲に』行ふと云ふとを破らざらん爲なりと。爾は謙遜にして痛悔する心を見るか。彼等は何處より救贖を得るか。仁愛より、慈悲より。彼等は恰も功勞なく、救贖を受くべき何等の權利をも有せざるも、却て困難及び危険多きを以て、萬事神を待めり。恩寵の下に在る所の吾人も亦彼等に法り、世々に光榮の歸する神に光榮を歸せん。アミン。

### 第四十四 聖詠講話

ユレイの諸子の教訓。愛の歌。  
我が心善言を湧き出せり(二節)

一。今凡てのイウデヤ人と異教人との此にありしならば、我は其眼前に聖詠書を取りて、其中より此聖詠第四十四をイウデヤ人の爲に通讀したりしならん。爾等は敵に訴へられて之を裁判所に於て言ひ解かんには、事實を證據立つることの必

要なるを知らん。是故に吾人は之と同じからんが爲に舊約の中より證據を示さん、是れ讀みて理解せざる所のイウデヤ人、および此等の書が敵より吾人に送られしことを知れる異教人をも耻ぢしめん爲なり。ハリストスの能力に就きて報する此等の書を吾人に送りし者は、ハリストスを十字架に釘つけしイウデヤ人なるを以て、彼等は已に此等の書を以て吾人の著したるものなりと云はざるべし。然れども彼等の此處に在ると在らざるとに拘らず、吾人は己の爲すべきことをなして説明を始めん。此聖詠はハリストスに就きて録されたるものなり故に又「愛せらるる者」に就きて「及び」變らざる者に就きて「といふ表題をも有す。ハリストスは吾人の中に大なる革新をなせり、凡ての事業をも改革し又變化せり。バズルも此革新を示しつゝ、「人若しハリストスに在らば新なる受造物なり」(後五のセ)と云へり。然れば預言者は始めに「我が心……言へり」とは云はざりき。彼の言ひしことは、人事的にあらず、乃ち彼は自己の發明によらず、神出の所業を以て天のこゝと、靈的のことを告げたるが故に「湧き出せり」との言をもて之を表面せり。吾人は欲する時に屢氣を發すること能はざれども言は欲する時に之を發し又制止することを得。是に由りて預言者は其述べたることの人の盡力より出でしに

あらず、乃ち彼を興奮せしめたる神聖なる感應より出づることを示さんと欲して、預言を「湧き出る言」と名づけたり。屢氣は食物の性質に關するが如く、心靈上の教に於ても亦斯くの如し、即ち預言者は味ひし所のことを湧き出せるなり。然れば或預言者は他の個所に於ても、巻物を食ひ盡し、而も樂みて食ひ盡しつゝ、感覺的の状態を以て同一なる動作を顯せり、即ち預言者は「其我が口に甘きこと蜜のごとくなりき」(イエゼキイ)と云へり。彼等は心靈的恩寵を受けたるが故に、此恩寵に適ふものを排泄せり。而して爰には感覺的の屢氣又は食物に就きて云はるゝにあらず、何を噴出し、又何人の屢氣するかを聞け。是は食物を受くる所の胃にあらずして「我が心……湧き出せり」とある心なり。何物を湧き出すか。食物にあらず、飲料にあらず、乃ち斯る食卓に似たる「善言」即ち獨生者に就きての言なり、何となれば獨生者は特に善なれば也。彼は曰へり「我が來りしは世を定罪せん爲に非ず、乃世を救はん爲なり」(イオアン福音)と。万事は彼に於て溫和に、万事は罰より遠し。預言者は己が心を潔めたるによりて之を湧き出すなり。胃は不潔なる液汁に充され之に似たるものを噴き出すも健全なる時は相當なる屢氣を生ずるが如く、預言者の心も亦罪より潔められ、神の恩寵を受けて「善言」を湧き出すなり。吾人は是



に由りて預言者等が(異教の)託宣者に似たるを知る。悪鬼彼等の靈を横領すれば、彼等の智慧は旨となり、思想は暗まり、彼等の智慧は毫も其出來事を理解せずして、恰も無心の笛の音を發するが如し。一哲學者は此事に就きて左の言を以て固めたり曰く、託宣者及び卜者は、縦ひ多く言ふとも、彼等は毫も其云ふ所を理解せずと(フロン著「ソクラト辯論論」)。然れども聖神は斯く作動かすして却て預言者をして其言ふ所を理解せしむ。實際に預言者若し理解せざらんには、彼如何で「善言」と云はんや。吾人の仇敵たる悪魔は、人類に反對して作動けども、善慮者たり、慈憐を施す者たる聖神は、彼を受くる者に自認を遣し、彼等の智慧の中に己が言の意味を啓示す。「我曰ふ、我が事業は王の事なり」。他の譯者は「我が著述」(アキラ及び)となす。彼は如何なる事業に就きて云ふか。預言に就きてなり。鶴野鶴を造るは、鍛工の作業なり、家を建つるは、建築家の作業なり、船舶を建造するは、造船家の作業たるが如く、預言をなすは、預言者の事業なり。而して此亦等しく事業たることは、使徒等に就きて「其値を得るは宜しきなり」(ルカ福音)と云へるハリストスの言によりて知るべし。パウロも亦「言と教とを以て勞する者には殊に然すべし」(テモソ一前)と云へり。預言もし事業にあらざりせば、預言は如何で其中に困難を含まんや。

而して何ものか此事業より貴重すべき事業あらん、何ものか之に勝る所の有益なる事業あらん。預言は一切の技術に勝る。預言者が言ふ所の「王の事」とは如何なる事なるか。是は其歌のとなり、是は其預言なり。彼は此事が衆人の神に對することとなるを願しつゝ、或一王に對して云はざりき。吾人はヘルシヤの王に就きて云ふ時は、單に王と云はずしてヘルシヤてふ言を附加ひ、アルメニヤの王に就きても亦然なせども、吾人の王に就きて云ふ時は、附加の必要なく、唯「王」てふ名稱にて満足するが如く、預言者も亦眞の王に就きて云ひつゝ、「王の事」をてふ一名稱にて満足す。吾人は全能者のことを云ふ時は、他に全能者なきによりて、如何なる言をも附加ふるの必要なきが如く、此王に就きても、他に王なる神のなきに由りて、如何なる言をも附加ふるの必要なきなり。而も言ふ所の者自らは王たりき。是に由りて彼は人に就きて云ひしにあらす、乃ち衆人の神に就きて言ひしことたりしや、明なり。是故に彼は(神聖なる)權威を示しつゝ、Paterと云はず、附加へては Pater といふと云へり。

二。次に彼はその述べたることは、人の智慧、人の想像、人の著述より出でしにあらす、乃ち神聖なる恩寵より出でしものにして、而も彼は自ら只一の舌にて勤めしこ

とを復び示さんと欲して「我が舌は迅書者の筆なり」と云へり。筆は之を  
 持つ手の命する所を書す。他の譯者は「我が舌は速に書す者の石筆の如  
 し」(マフ)となす。何の爲に「迅なる」と云はれしか。恩寵を示さん爲なり。自説  
 を述ぶる者は知らざると不確信と狐疑とを以て思考し、組織し、困難しつゝ、溢滞猶  
 豫し、又多くのことに於て其言の迅さの停止することあれども、神が智慧を動かす  
 時は、何ももの之を妨げず、水の流れ注ぎ、非常なる速力にて流るゝが如く、神の恩寵  
 も亦容易に凡てをなし、凡てを便利になしつゝ、非常なる迅速を以て運ばるゝなり。  
 次に預言者は同一のことを説明かし、又其述べられたることの中に、毫も人事的の  
 ことなきを示しつゝ、「爾は善良にして人の子より美し」(節三)と續けたり。  
 或人々は、此舌に就きて、此は「善良にして美なる」筆なりと固むるも、我には預  
 言者がハリストスに就きて言へるものと思はるゝなり。然れば他の譯者は「爾  
 は人の子より美しく飾られたり」(ラキ)となす。預言者はハリストスに  
 對する大なる熱愛に由りて、イヤコフが「我が子よ、汝は所掠物をさきてかへりのぼ  
 る、彼は牡獅子の如く伏す」(創世記四十九)と云へる如く、ハリストスに言を向く。彼は感  
 應に滿され、既にハリストスと談話して之に己の言を向く。而も其云ふや、比較的

にあらす、彼はより美しとは云はずして「善良にして人の子より美し」と云  
 へり。言ふ意は、彼の美は人の子の美に優る他の美なりと、視よ、彼は如何に其始  
 に於て(ハリストスの)經綸に就きて云ふかを。而してその經綸に關することは、左  
 のことより見ゆるなり。預言者は「善良にして人の子より美し」と言ひ、之  
 に附加へて「恩寵は爾の口より湧き出でたり」と言へり。神は口を有せ  
 ざるも、爰には神の經綸に就きて云はるゝなり。他の譯者は「恩寵は爾の口  
 を以て流れ出でたり」と云ひて、之を一層明瞭に表言せり。「流れ出でた  
 り」と言は、若し何人か話したりとせば、恩寵は内部に充滿して破裂したるが如  
 きことを意味せざるか。他の預言者は如何にして「我等が見るべき美しき容なく、  
 美しき貌はなし、乃ち其容は耻づくべく、人の子より侮られたり」(イサイヤ五十三)と云ふか。  
 彼は醜貌に就きて云はず、然り云はざらん、乃ち(ハリストスの)謙卑に就きて云  
 ふなり。ハリストスは人となることを喜せられ、所有輕蔑の階級を通過し、王后を  
 自己の母として選ばざりき、布に包まれ、黄金の臥床ならで、槽檻の中に置かれたり、  
 又美麗なる家の中に養はれずして、木工の貧しき小屋に養はれたり、門徒等を押ぶ  
 り、方りても、辯論家にあらず、哲學者にあらず、王にあらずして、漁夫と税吏とを擇び、

彼は家を有たず、値高き衣服を纏はず、美酒佳肴を味はず、人の教育を受けず、凌辱輕蔑、窘迫、迫害を忍受して、最も質朴なる生活を送り、彼の斯くなし、は人間の傲慢を全く蹂躪らん爲なり。視よ、彼は華美莊嚴を以て己を固まざりしによりて、その左右には護衛者なく、槍を携ふる者なし、時としては常人の如く、獨り歩行せり、然れば預言者は「我等が見るべき美しき容なく、美しき貌はなし」と云へり。又ダウドはハリストスの恩寵、睿智、教道奇蹟を示しつゝ、「爾は善良にして人の子より美し」と云へり。次に彼は此美を象りつゝ、「恩寵は爾の口より湧き出でたり」といへり。爾は爰に經綸者に就きて云ふ所を見るか。是は如何なる恩寵なるか。彼が教へし所のこと、奇蹟を行ひし所のことなり。預言者は爰に「ハリストスの肉に降りし恩寵に就きて云ふなり。然れば「爾は聖神の如く降りて其上に止るを見る者、此れ即洗を授くる者なり」と「イオアン福音一の三十三」と云へり。諸の恩寵は此聖堂に注がれたり、何となれば「神が神を與ふるには限量を以てせざればなり」(イオアン福音)。「彼の充満より我等恩寵を受けたり」(全上)而して此聖堂其物は圓満なる恩寵を受けたり。イサイヤも亦その上に「智慧聰明の神、謀略才能の神、知識の神、敬虔の神止まらん、即ち神を畏るゝの神は彼を充満さん」(イサイヤ書十)と云ひ

て同様と言ひ顯せり。爰には圓満なる恩寵あるも、人々には此恩寵の一小部分のみ、一滴あるのみ。是故に神は神を與ふとは云はずして「我吾が神を一切の人に注がん」(イオアン福音)と云へり。

三。斯く應じたりき。全世界は此神より受けたり。賜物はパレスチナより始めて、エジプト、オニキヤ、シリヤ、キリキヤ、エウフラト河岸、メソポタミヤ、カバドキヤ、ガラヤ、スキオヤ、フラキヤ、エルラダ、ガリヤ、イタリヤ、全リビヤ、エウロツバ、アジヤおよび太平洋上に弘布せり。然れども何の爲に多く數ふるか。此恩寵は太陽が照らす所の全地に弘布せり、神の此涓滴、神の此部分は、知識を全世界に充満せり。此恩寵にて多くの休徵は行はれ、衆人の罪は赦されたり。然れど斯く多くの國に與へらるゝ、此恩寵は唯其一部分のみ、其恩賜の聘質のみ。パウルは安忍者の分たれざるによりて其作動の部分を理解しつゝ、「且神の聘質を我等の心に與へたり」(コリント二)と云ふ。然れば視よ、此源泉は如何なるものなるかを、此の人には神より智慧の言は與へられ、彼の人には同一の神より知識の言は與へられ、或人には同一の神より信徳は與へられ、或には同一の神より醫を施す恩賜は與へられ、或には異能或には預言、或には諸神の辨別、或には方言、或には方言の譯解は與へらるゝ(コリント前二)。

洗禮に於て與へらるゝ斯る多くの恩寵は、全地によりて斯く多くの人民に廣まり、而して此等のことを行ふものは皆神の涓滴なり。而して此が實に涓滴たりしことは「我我が神を注ぐてふ言」と恩寵を名づけて「聘質」と稱するによりて解示さるゝなり。之よりして「人々に」與へられしは、圓滿なるものゝ只一小部分たりしや明なり。然ればイオアンも之を表明しつゝ、「彼の充滿より我等皆恩寵を受けたり」(イオアンの十六)と云ふ一言すれば、吾人は皆過多餘剩滿溢より受けたるなり。斯く恩寵は數百千年の間全世界に與へ、而も減せず盡きず、恩寵の富を以て万民を充滿し、而して自らは毫も乏しからず、以て神恩の如何に圓滿なるかを想像すべし。而して「神」てふ言は多くの意味を有し、天使をも靈をも、風をも、及び其他多くのものをも此名稱を以て名づくるが故に「吾が神」と附言へられたるなり。人の靈の人に固有なるが如く、神の神も亦神の位の中にありつゝ、神に固有なり。パウロも之を言ひ顯しつゝ、「神の位を混せずして——實に混せられざらん——神の天性の秀絶なるを示しつゝ、蓋人の事は人の内に居る神の外、人誰か之を知らん、是くの如く神の事は神の神の外之を知る者なし」(コリントの十一)と云へり。是に因りて自己と靈との一致するが如く、神の父と親屬たるとも亦之に同じ。子は言と名づけらるゝも、無

位にあらす乃ち吾人は之より彼の父と親屬たるを知るが如く、神の神も亦神と名づけらるゝも、無位たるにはあらざるなり。子が父の眞の子たるによりて、吾人に子となるを傳ふるが如く、神も亦其性によりて神と一體なるによりて、吾人に恩寵を傳ふ。然れば人も其人たるによりて人の像を畫くことを得、「故に神は爾に降福して世々に至る」。

爾は預言者がハリストスを受するによりて、常に其言を如何にハリストスに向くを見るか。是に由りて彼は他の個所に於て、單に預言を告げず、譴責の状態を以て述べ「諸民何爲れを騒ぎ、諸族何爲れを徒に謀る」(聖詠二)と云ふ時の如き是なり。

斯くの如く爰にも預言者は「故に神は爾に降福して世々に至る」と云ふ。預言者は彼の降誕に就き、教育に就き、其他の事に就き、毫も言ふ所あらすして之を以て彼に關する己が説話を制限せり。是れ何故なるか。万事に就きて秩序正しく述べ、は福音記者等に適當なりしに由る、預言者は彼等に之を委任せり、而して彼等は實に万事を順序正しく告げざるべからざりしも、預言に於ては、或點を取りて、其點に就きて言ふは當然たりしなり。然れば預言者等は常に左の如く行へり、即ち彼等は多からざる事件の事情を述べ、而も之を模糊の中に遺せり。斯くの如く

此預言者も彼の言が如何なる恩寵に満されしかを願しつゝ、「神は爾に降福して世々に至る」と云へり。視よ、神の恩寵の能力を。主嘗て洵濱を通行しける時、イヤコフ及びイオアンを見之に對ひて「我に従へ、我爾等を人を漁する者と爲さん」といひしに「彼等直に父と網とを遺して之に従へり」(マトス福音四)の十九至廿二。又或時彼は諸門徒に向ひて曰へり「爾等も去らんと欲するか。ペートル、彼に答へて曰へり、主よ、爾は永遠の生命の言を有つ。我等は爾がハリストス活ける神の子たるを信じ、且知れり」(イオアン福音六)と。然れど我門徒等に就きては何をか云はん。スリセイ等自ら主に下吏を遣し、が彼等返りて曰へり「人未だ曾て斯くの如く言ひしことあらず」(イオアン福音七)の四十六。他の福音者も同じく曰へり「イスラエリの中に未だ是くの如き事あらざりき」(マトス福音九)の三十三。又曰へり「蓋彼等を教へしこと權ある者の若し、學士及びスリセイ等の如きに非ず」(全上七)の廿九。

四。爾若し此恩寵を知らんと欲せば、主の誠命の如何に嚴重なるを聞け、然らば恩寵の能力を見ん。主曰へり「一切を棄てず、又己の生命をも惜まずば、我に宜しからず」(マトス福音十)の三十七。然れど此言は實行されたり、主の恩寵の大なるや斯くの如し。何ものか人の爲に靈より近きものあらん。然れども靈も亦神の誠命によ

りて輕蔑されたり。爾は「神は爾に降福して」てふ言を開きて讀く勿れ、何事か卑下きことを想像せざれ。我が前に言ひし如く、爰に云ふ所の説話は、口を有し、恩寵を受け、祝福を受くる所の彼の肉に就きてなり。神は祝福をも恩寵をも受くるの要なし、神性は何ものにも待つ所なければなり。ハリストス曰へり「父が死せし者を起して之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす」(イオアン福音二)と、又曰へり「彼の行ふ所の事は子も亦同じく之を行ふ」(全上五)と、又曰へり「父の我を識るが如く、我も亦父を識る」(全上十)と。「如く」同じく「てふ言は差別なきを顯すなり。然れど爰には(肉に於けるハリストスの)經綸に就きて言ふなり。吾人は彼が尙如何に自己に就きて「父の我を愛する所以は、此れ蓋我は我が生命を羊の爲に捐つる爲なり」(イオアン福音十七)と云ふを聞く。然らば父は前に彼を愛せざりしか。父は如何にして「此は我の至愛の子なり」(マトス福音十七)と云ひしか。否、彼は苦行の威嚴を示さんとして、此等の言を曰ひしなり。是故に彼處に理由を引用するの基なしとせざるが如く、爰にも亦其理由明瞭なり。預言者は前以て「爾は人の子より美し」又「恩寵は爾の口より湧き出でたり」と云ひて、後に(精身の)經綸に説話を向けつゝ、「故に神は爾に降福して世々に至る」と云ふ、是れ彼が何事か主の神聖な

る徳に不相應のことを云はる、爾の蹟かすして、其說話の何人に就きて述ぶるかを知らん爲なり。然ればイヤコフも同じく經綸を示しつゝ、多くのことを述べる後、その目は酒によりて紅く、その齒は乳によりて白し（創世記四十）と云ふ。然れども神性は齒を有せざるなり。他の預言者もバウル（後書二の八）の「主は己の口の氣を以て彼を殺し己の降臨の現を以て廢せん」と云へると同一なることを言ひ顯しつゝ、その口の杖をもて國をうち、その口唇の氣息をもて惡人を殺すべし（イサイ一）と云へり。

然れば預言者は爾が之を聞きてハリストスに就きて卑近なる思想を有たざらん爲に、ハリストスの神性の能力を爾に示せり。彼はハリストスに於て神性より肉體を分たす、肉體より神性を分たす、而も此等兩性を混せず、尤も混ずると能はず、乃ち其一體たることを示せり。故に曰く「神は爾に降福して世々に至る」と。此祝福は如何様にして行はるか。諸天使と諸天使長とは彼の前に立ち、寶座、主制首領權柄は彼を讃揚す、全地は極より極に至る迄藉身したる神を讚美歌頌す。初のアダムは大なる罪に服したるも、此は却て大なる祝福を受けたり。第一のアダムは「地は爾の爲に罪はる（創世記三の十一）」て、言を聞き、又彼の後に生れし者等も「主の事

を行ふて怠る者は罪はる（イサイヤ一）」又「この律法の言を守りて行はざる者は罪はるべし（復傳律令書）」又「木に懸けらるゝ者は罪はる（全上廿二）」と云ふを聞けり。爾は幾何の罪を見るか。ハリストスは自ら「罪となりて爾を罪より救へり（ガラテヤ書）」。彼は爾を昇さん爲に己を下し、爾を不死なる者となさん爲に死せしが如く、爾をして祝福に充滿せしめん爲に罪はれたり。罪を以て祝福を與へらるゝ時は、何ものか此祝福と比較ふるを得ん。彼自らは祝福の必要を有せざりき、却て之を爾に與ふ。我は彼下れりと云ふ時は、彼の或變化をなしたることを云ふにあらす、乃ち彼の經綸の寛容を意味するが如く、彼祝福を受けたりと云ふ時は、彼が祝福に必要を有するが如きを云ふにあらす、乃ち復び彼の經綸の寛容を言ひ顯すなり。然れば祝福はハリストスの人性に關す。ハリストス死より復活して「人は既に死せず（ロマ五の六）」又「罪に屬せず、或は之を言ひ換ふれば、彼は前に罪に屬せざりしも、爾を罪より救はん爲に罪を受けたり。剛き者よ、爾の劔を、爾の光榮と爾の美麗とを股に佩びよ（四）」。或譯者は「爾の光榮と爾の美麗とを」の文句をば「爾の美麗と爾の善良とを以て」となし、或譯者は「爾の讚美と爾の功德とを」（不明の）となす。說話の斯る轉化變遷は何を意味するか。預言者は教

師のことを云ひつゝ、突然武装したる王を畫けり、而も預言の状態に於てせずして、祈願の状態に顯せり。彼は「自己の劍を佩ぶ」とは云はずして「爾の劍を佩びよ」と請へり。次に彼を以て或武装されたる者或は美麗なる者と想像しつゝ、此武装に麗しさを附加へて、「爾の美麗と爾の善良とを以て」と云ひ、次に射手と想像しつゝ、「剛き者よ、爾の箭は銛し」と云へり、又勝利者及び凱旋者として「諸民は爾の前に仆れん、此箭は王の敵の心に中る」といひ、終に此戦主、射手、勝利者を香料を塗られたる者と想像して「爾の衣は皆没薬、薑膏肉桂なり」と云へり。

五。武器と祝福劍と塗香、戦闘と教道弓と裝飾との間に何の一般なる所がある。後者は平和の徴にして、前者は戦闘攻撃の徴なり。芳香を消費する者にして同時に武装する者、美麗なる宮殿より出でし者にして同時に千萬の敵を亡す者、及び斯る攻撃をなす者たる此平和者にして同時に戦闘者たる者は誰なるか。吾人は如何にして此疑問を決するか。若し正確に考ふれば、父に就きても斯く云はれしことあるを認めん。然れば、預言者は他の個所に於て父を武装したる者と想像して「人反正せざれば、彼は其劍を礪ぎ、其弓を張りて之に向は、是が爲に死の器を備ふ」

(聖詠七)と云へり。又他の個所に於ては「義の鎧を着く」(聖詠五の十八)と云はる。爾は彼等の同一の權柄を見るか。彼處に「其劍を礪く」と云ふは何人かの命令によるにあらず、神自らするが如く、爰にも亦「爾の箭は銛し、諸民、爾の前に仆れん、此箭は王の敵の心に中る」と云ふ。次に預言者は主が自己の能力を以て万事を行ふことを顯さんと欲して「爾の右の手は、爾に奇妙なる事を顯さん」と云へり。言ふ意は、爾は他の人より能力を受けず、自ら充分に之を有すと云ふなり。然れば、爾は、平和の神自ら門徒等に「我が來れるは、和平に非ず、乃ちを投せん爲なり」(マテ、二四、九)と云ひ、又「我火を地に投せん爲に來れり、此の火の己に燃えんことを望むこと幾何ぞ」(ルカ、二四、九)と云ふを聞け。而して預言者は彼が如何にして來るかに就きて、亦彼は變りたる草場に降る雨の如く、土を潤す雨滴の如く降らん(聖詠七十)と云ふ。我が此等のことを云ふは、爾等をして注意せしめ、及び此言の意味を正確に理解して己の疑團を解かしめん爲なり。前に引用せる言は、神の行爲を示すなり。然れば、爾爰にも「剛き者よ、爾の劍を爾の股に佩びよ」と聞く時は、之を以て「弓」及び「箭」等の言と同じく、神の行爲を示すことなるを知れ。聖書には、神に怒あるを記するも、情慾あるを云はず、乃ち此表言を以て、神の罰する

所の動作を示し、以て野鄙なる人々を感動せしむるが如く、神に武器を歸するも亦同じく其動作を言ひ顯すなり。吾人は自ら己を罰せず、人の武器を以て罰せらるるが故に、預言者は神の罰する所の能力を示さんと欲しつゝ、吾人の知れる罰を以て之を表言すは、是れ吾人をして神に武器あることを想はしめん爲に、ならず、乃ち最も感じ易く神の罰を曉らしめん爲なり。然れども爾は云はん、多くの人は之より弊害を受けたりと。是れ理由なく空しき言なり、人々の之より弊害を受けたるは其無智なるによりてなり。此事が神に就きて云はるゝなりと云ふ其事によりても、既に彼等は爰に云はるゝことの寓意的なるを理解せざるべからざりき、而も聖書は尙他の表言を以て、神に情慾なきことを彼等に曉らしむるを猶豫せざりしなり。預言者が他の個所に於て、神罰の迅速なるを如何に言ひ顯すかを聞け、曰く「神は興き、其仇は散るべし」(聖詠六十)と。武器は必要なりしか、劍は必要なりしか。言ふ意は、一の復活のみにて足れりとなり。然れども此言も尙感覺的の表言なり。是故に彼は他の個所に於て「彼地を震れば地震ひ」(聖詠十三)と云ひ、又「地よ、神の顔の前に震へ」(全上七十)と云へり。然れども此亦感覺的の表言なり。之よりも尙高尚なる言を聞け、曰く「主は凡そ欲する所を行ふ」(全上三)と、彼の爲には唯欲するのみに

て足れり。而も爰にも如何に預言者が此感覺的の表言に於て、神は何ものにも必要を有せざることを述ぶるを見よ。預言者は神を「剛き者」と名づけしが如く、以前には武器に就きて述べざりき、又武器を算へて、凡ての勝利を神の「右の手」即ち彼の本性と彼の全能とに歸せり。他の預言者も同じく言ひ顯しつゝ、「政事はその肩にあり」(イサイヤ)といへり。彼が斯く言ひしは、神の肩を想像せしめん爲に、ならず、實に斯くあらざるべし。乃ち神が他人の補助を要せざることを知らしめん爲なり。「剛き者よ、爾の劍を、爾の美麗と、爾の善良とを、股に佩びよ」爰に預言者は何事に就きて云ふか。彼は此感覺的の表言を以て、ハリストスが全世界を再興し、戦終りて多くの戦利品を獲たる所のその能力を示すなり。實に無残なる戦、凡ての他の戦よりも残酷なる戦ありき。此戦は仇敵なる野蠻人に對するに、ならず、吾人を攻撃し、全世界を破壊する所の鬼に對する戦なりき。然ればイサイヤは「彼は強きものと、偕に掠物を分ち取るべし」(イサイヤ五)と云ひ、又「主の神我に臨めり、こは主我に音をそゝぎて、貧き者に福音を宣へ、傳ふことを委ね、我を道して、俘囚にゆるしを告ぐ」(全上六十)と云へり。パウロも常に書札の始に「願はくは恩寵と平安とは、神我等の父より賜はらんことを」(二の七)と云ひ、又「蓋彼は我等の和



平なり二の者を一と爲す(二の十四)と云へり。而して爾が「爾の劔を佩びよ」て  
 言葉を聞き、感覺的の劔なりと思はざらん爲に、左の言を聞け。預言者は「爾の  
 劔を佩びよ」と言ひて「爾の美麗と爾の善良とを」と附加したり即ち彼  
 の劔は彼の善良光榮功德威嚴高大なりとなり。神性は自己の計畫を遂ぐるが爲  
 に何ものをも要せず、神性は圓滿なればなり。斯くの如く預言者は神性を招きて  
 全世界の爲に戦に出でしむ。次に高尚なる表言より再び感覺的の表言に移り。  
 彼は「劔及び股」てふ言の後に「美麗」に就きて述べつゝ再び感覺的の表言に移  
 りて「此節にて急ぎて主宰せよ」と云ふ。彼は「節にて」てふ言をもつて、  
 弓と箭とを吾人に示し、然る後再び神には武器の不必要なるを示さんと欲して「急  
 ぎて眞實と溫柔と公義の國を主宰せよ」(正教會譯には「此節にて眞實と溫柔  
 の原文に従ふ)と附加ふ。爰に國とは神が降臨して將來に於て建てし所のもの即  
 ち交通と知識の國なり。

六。前述の言は既にハリストスの行爲及び彼を以て眞理に導かれたる全世界を  
 洞察する預言者の強き希望を表すなり。故に彼は此等の表言に命令法を用ひた  
 り。斯る表言は通例高尚なるものに對する熱愛の低き者も亦之を用ふ。「眞實

と溫柔と公義の爲に」。彼は「眞實」の名を引用す。爾は聖書が此勝利の洞  
 察されしものたる。又只靈的なるを如何に説示するを見るか。預言者は武器劔  
 及び弓のことを述べつゝ、爰に溫柔に就きて云ふは何の爲なるか。溫柔と戦争謙  
 遜と攻撃の間に如何なる關係あるか。若し注意して觀察する時は大なる關係あ  
 りて存するを見る。然ればダウドおよびモイセイは溫柔なる人々なりき。ダウ  
 ドに就きては聖書に「主よ、ダウドと其悉くの溫柔(正教會譯には「十一の二」)  
 とあり、又「モイセイに就きては「モイセイは其人と爲溫柔なること、世の中の諸の人  
 に勝れり(民数記十)とあり。然れど衆人の中に最も溫柔なる此等の人々は衆人の  
 中にて最も嚴格なる人々なりき。然れど爾等若し欲せば吾人は前以て彼等の温  
 柔に就きて述べん。福たるダウドは數回サウルを捕へ、又彼を殺すことを得たり  
 しも、彼の上に手を着けざりき、人々がダウドに向ひてサウルを殺すべきことを勸  
 めたる時も、彼はサウルを憐みて己の憤怒を鎮めたり。又セメイが非常にダウド  
 を凌辱しめ、其當時の不幸を嘲笑りたる時、將軍等は狂暴なる凌辱者を放逐して之  
 を殺さんとせしに、彼は如何に凡ての知識に満たされたる言を發したるか(第二列王  
 彼は父を窘逐せる破廉耻なる少年のために自己の將軍等に何事を請ひしか曰く

「我が爲に少年アヅサロムを寛に待へよ」(第二列王紀)と。又最初彼の將來の勝利に對して不満を懷き之を嫉みし己の兄弟等と談話したる時に其答の如何に溫柔なりしかを想ふべし、曰く「只一言にあらすや」(第一列王紀)と。然らばモイセイは如何にモイセイが彼に石を投じて若し能くすべくんば之を殺さんと欲したる人々に就きて何事を言ひしかを聞け、曰く「然れどかなは、彼等の罪を赦し給へ、然せずば願くば汝の書きし給へる書の中より吾が名を抹しさり給へ」(出埃及記三十一)と。又他の人々が彼を熱せしめ、之を怒らしめんと欲したる時に、彼は左の智なる言を發しぬ「主の民の皆預言者となることを願はしけれ」(民數紀十)と。又彼は己を語りたる己が姉妹の爲に祈禱せり(全上十二)。其他多くの場合に於て彼の溫柔を見ることを得、例へば彼が(約)されたるの地パレスチナに入ることを禁せられし時全く溫柔を以てイウヂヤ人と談話せり。然れど此溫柔なる人は、司祭に反抗したるダスン、アウロン、コレイが地に呑まれ、又他の火を献せし人々の焚かれしを見て公平なることとなせり。溫柔なるダウドも亦ゴリアフを攻め、其軍隊を撃退して勝利を得たり、總じて自己に凌辱を加へたる者を救して他人に蒙らしめたる凌辱の爲に復讐するは溫柔者の特性なり。ハリストスも斯く行へり。彼は十字架の上に於

て「父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は爲す所を知らず」(ルカ福音書廿三)と、又「イエリサリム」の爲に歎きつゝ「我母鶏が其雛を翼の下に集むるが如く爾等の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき、視よ、爾等の家は虚しくして爾等に遺さる」(マトス福音書廿三)といへり、主は頬を打たれつゝ自らは人の頬を打たざりしも、頬を打つ者の前に義とせられたり、彼は鬼患者と名けられつゝ、悪鬼を放逐し、欺騙者及び不虔者と稱へられつゝ、(天の)國に人々を導けり。彼は己の門徒等にも常に痛苦迫害を忍耐し、及び末席を占むべきを誡めたり、彼は「爾等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲るべし」(マトス福音書廿六)と曰ひ、其例として自ら己を顯して「蓋人の子の來りしは人を役はん爲に非ず、乃ち人に役はれ、且己が生命を與へて衆くの者の贖を爲さん爲なり」(全上廿八)と云へり。彼が悪鬼を放逐し、悪魔を攻撃して迷謬を滅したるは、此亦格段なる溫柔の證據にして、乃ち諸惡を滅し、又惡を有する者をば之より自由にし、仇する所の惡鬼を攻撃して惡鬼の爲に苦む者を艱難より救はん爲なり。「眞實と溫柔と公義の爲に」とは何の意なるか。預言者は戦争に就きて述べ、戦闘準備に就きて述べ、武装せられたる軍士を示して、今その(軍士即ち神を指す)治世の偉大なる事業に就きて述べ、戦利品の種類を示し、勝利の性質を説明す。他の諸王は

皆あるひは市邑の爲あるひは金錢の爲或は仇讎によりて或は虚誇によりて戦争をなせども、ハリストスの戦ふや毫も之に類するがごとき事に由らず、乃ち「眞實の爲」にす、是れ眞實を地上に植ゑん爲なり、「溫柔の爲」にす、是れ野獸よりも猛烈なる人々を溫柔なる者となさん爲なり、「公義の爲」にす、是れ不法の軌の下に苦む者を初には恩寵によりて、後には彼等の善行によりて義なる者と爲さん爲なり。「爾の右の手は爾に奇妙なる事を教へん」(ラキ)。他の譯者は「爾の右の手は奇妙なることを以て爾を照さん」(ラキ)となし、又他の譯者は「爾の右の手は爾に妙奇なることを顯さん」となす。

七、爾は預言者が如何に此等のことを行ふ者の價値を復び顯すを見るか。彼は前に「武器と劔とに就きて述べ、美麗」に移りて聴衆を非物質的の觀念に導けり。次に彼は感覺的の表言即ち「弓と箭」とに下りて戦争の理由なる「眞實と溫柔と公義」に就きて述べ再び漸次聴衆を導きて、今や彼は勝利の眞相をも畫けり。如何に之を畫きたるか。曰く「爾の右の手は爾に奇妙なる事を教へん」と。言ふ意は、此本體は自ら強く、その能力は凡そ遂行するに必要なるものを見るが爲に自ら充全なるが如く、此等のことを終結せしむるが爲にも充全なりとなり。

「爾の右の手は奇妙なる事を顯さん」と云ふ言は他の譯者も善く云ひ顯せり。實に彼の行爲は甚だ奇妙にして驚くべし、何となれば死は破られ、地獄は毀たれ、天國は啓かれ、天は開かれ、惡鬼は抑制せられ、高きものを卑きものと合せ、神は人となり、人は天の王の寶座に上り、復活の希望は活動せられ、不死の待望云ふべからざる幸福を味ふこと、其他凡てのことはハリストスの降臨と偕に行はれたればなり。然れば他の譯者は「爾の右の手は爾に奇妙なる事を教へん」と云ひて、此者の自ら強きこと、其能力は計畫するが爲にも、其計畫を遂行するが爲にも充分なることを顯せり。而して七十註釋者は「爾の右の手は奇妙にして爾を教へん」となす、即ち彼の行爲は常に驚くべきのみならず、其行爲は如何に奇妙にして行はれたるかをも云へり。死は死にて滅され、罪は罪にて破壊せられ、祝福は與へられ、吾人は前に味ひたるによりて地堂より放逐せられ、復び味ふことによりて天堂に入れられ、處女は地堂より吾人を放逐し、處女によりて吾人は永生を得審定されしも、榮冠を冠せられたり。預言者は此等のことを冥想しつゝ、「爾の右の手は奇妙にして爾を教へん」と云ふ。武器は神の爲に必要なるか。神は劍と弓箭とを要するか。爾は此者の如何に自ら強きを見るか。唯預言者が如

何に復び巧妙なる工藝者の如く、高尚なる表言より、感覺的の表言に下すを見よ。  
『剛き者よ、爾の箭は銛し、諸民爾の前に仆れん、此の箭は王の敵の心に中る』(六)。

視よ、彼は又箭のことを言ひて、如何にして其上に『剛き者よ』てふ言を附加へしかを、是れ爾をして、ハリストスが箭を須たすして自ら剛きことを知らしめん爲なり。思想の順序は左の如し、曰く『剛き者よ、爾の箭は銛し、王の敵の心に中る』。而して『諸民爾の前に仆れん』てふ言は、其中間に立てらるゝものとす。思ふに、爰に二つの意義あり、或は預言者はイウデヤ人の捕虜、征服及び彼等の城邑の破壊に就きて言ふなり、或は寓意に於て、福音の言の能力を箭と名づけたるなるべし。此言は實に箭よりも迅速に全世界に弘布し、王の以前の諸敵の心に觸れたり、是れ彼等を殺さん爲に、あらず、嘗てバヅルの遭遇したるが如く、彼等を自己に牽引せん爲なり。前に敵たりし者の心に觸れて之を友と爲し、所の天より降れる言を箭と名づけたる者は、誤らざるなり。『諸民爾の前に仆れん』。爾は戦争の成功、即ち前に敵たりし者を和睦し、敵を救へ之に宣教することを見るか。此仆るゝこと及びハリストスの權下に服従することは、衆人の爲に、上昇の基となり源となるべし、何となればハリストスは傲慢、自負及び邪惡なる迷謬より、彼等を脱して自己に服従せしめられたればなり。他の預言者はハリストスを血に塗れたる者と想像して曰く、『このエドムより來り、緋衣を衣て、ソルより來る者は誰ぞ』(イサ三六)と。爰には武器、弓箭に就きて述べられずして、衣服に就きて述べらる、即ち亦感覺的表言なるも、聖詠者の言よりは、少しく感覺的なりとす。預言者は爰にも、亦最も感覺的なる表言によりて、吾人の思想を無形の事物に導くなり。『何故に緋衣を衣たるか』の問に對して、彼は勝利の容易なること、ハリストスが何人をも己の援助として有せざりしと、彼が自ら強きを顯しつゝ、『我は獨にて酒搾をふめり』(全上三五)と答へたり。彼處に『爾の右の手は奇妙にして、爾を教へん』と曰はれしが如く、爰にも『我は獨にて酒搾をふめり』と云はれたり。醸酒者には足にて葡萄を搾出すの容易なるが如く、神のためにも其欲する所を行ふは容易にして、或は其よりも一層容易なりとす。『神よ、爾の寶座は世々に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり。爾は義を愛し、不法を惡めり、故に神よ、爾の神は爾に歡の膏を傅けしこと、爾の侶に勝れり』(七節) 彼の譯者は『神よ、爾の寶座は永遠に且永遠なるものなり』(マフ)となす。爰に

何に復び巧妙なる工藝者の如く、高尚なる表言より、感覺的の表言に下すを見よ。  
『剛き者よ、爾の箭は銛し、諸民爾の前に仆れん、此の箭は王の敵の心に中る』(六)。  
視よ、彼は又箭のことを言ひて、如何にして其上に『剛き者よ』てふ言を附加へしかを、是れ爾をして、ハリストスが箭を須たすして自ら剛きことを知らしめん爲なり。思想の順序は左の如し、曰く『剛き者よ、爾の箭は銛し、王の敵の心に中る』。而して『諸民爾の前に仆れん』てふ言は、其中間に立てらるゝものとす。思ふに、爰に二つの意義あり、或は預言者はイウデヤ人の捕虜、征服及び彼等の城邑の破壊に就きて言ふなり、或は寓意に於て、福音の言の能力を箭と名づけたるなるべし。此言は實に箭よりも迅速に全世界に弘布し、王の以前の諸敵の心に觸れたり、是れ彼等を殺さん爲に、あらず、嘗てバヅルの遭遇したるが如く、彼等を自己に牽引せん爲なり。前に敵たりし者の心に觸れて之を友と爲し、所の天より降れる言を箭と名づけたる者は、誤らざるなり。『諸民爾の前に仆れん』。爾は戦争の成功、即ち前に敵たりし者を和睦し、敵を救へ之に宣教することを見るか。此仆るゝこと及びハリストスの權下に服従することは、衆人の爲に、上昇の基となり源となるべし、何となればハリストスは傲慢、自負及び邪惡なる迷謬より、彼等を脱して自己に服従せしめられたればなり。他の預言者はハリストスを血に塗れたる者と想像して曰く、『このエドムより來り、緋衣を衣て、ソルより來る者は誰ぞ』(イサ三六)と。爰には武器、弓箭に就きて述べられずして、衣服に就きて述べらる、即ち亦感覺的表言なるも、聖詠者の言よりは、少しく感覺的なりとす。預言者は爰にも、亦最も感覺的なる表言によりて、吾人の思想を無形の事物に導くなり。『何故に緋衣を衣たるか』の問に對して、彼は勝利の容易なること、ハリストスが何人をも己の援助として有せざりしと、彼が自ら強きを顯しつゝ、『我は獨にて酒搾をふめり』(全上三五)と答へたり。彼處に『爾の右の手は奇妙にして、爾を教へん』と曰はれしが如く、爰にも『我は獨にて酒搾をふめり』と云はれたり。醸酒者には足にて葡萄を搾出すの容易なるが如く、神のためにも其欲する所を行ふは容易にして、或は其よりも一層容易なりとす。『神よ、爾の寶座は世々に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり。爾は義を愛し、不法を惡めり、故に神よ、爾の神は爾に歡の膏を傅けしこと、爾の侶に勝れり』(七節) 彼の譯者は『神よ、爾の寶座は永遠に且永遠なるものなり』(マフ)となす。爰に

イウデヤ人は何を云ふか。此事は何人に就きて云はるゝか。異端者は何を云ふか。若し父に就きて『神よ、爾の寶座は世々に在り』と云はると曰はんには、彼に對して『故に神よ、爾の神は爾に歡の膏を傳けたり』てふ言を如何に關係せしむるか。父はハリストスにあらず、而して膏を傳けられしは父にありき。是に由りて爰には獨生子に就きて云はるゝや明けし、彼に就きては、上より云はれ、イサイヤもその國終なからんと云はれたり(イサイヤ九の七)。

八。然れども何人か問ふあらん、預言者は前に藉身の(經綸に就きて云はれしに、今何故にハリストスの神性に就きて云ふか。福音記者マトネイも斯くなせり。マトネイの福音書を記すや、藉身より始めて、最初に『イエスハリストスの族譜』(マトネイ)と云ふ。ルカ及びマルコも同様になしぬ、只獨りイオアンのみは然らず。彼は最初に神性に就きて『太初に言有り、言は神と共に在り、言は即神なり』といひ、又彼に就きて多くのことを云ひて、後に『言は肉體となりて我等の中に居りたり』(イオアン四)といへり。而も彼は福音を記すに方りて、他の福音者等に反して記したれども、これ大に彼等と一致することを示すなり。然れども爾は云はん、反對に於て一致せんことは道理上あり得べきことなるかと。爾は食ふと食はざると飲むと飲ま

ざると與ふると與へざるとは互に反對のことなるを知らざるか。然も醫師は數々、彼も此も共に用ひて互に相對せず、乃ち全く一致して作爲す、醫師は只一事を觀察するのみ、病者の健康是なり。福音記者も之に同じ。又夏は冬と反對なるも、其目的は一のみ、果實を成長せしめ、及び成熟せしむると是なり。全世界も亦反對より成立するも、此中には吾人の生活の幸福に對する大なる秩序あるを見る。ハリストスも亦授洗者(イオアン)と反對なる途を歩めり。ハリストスは味ひしもイオアンは味はざりき。ハリストス曰へり『イオアン來りて食はず、飲まず、爾等云ふ、彼魔鬼に憑らると。人の子來り、食ひ、飲む、又云ふ、視よ、是れ食を嗜み、酒を好む者なり』(ルカ福音七の三三、三十四)。

然れども彼等の行爲や反對なりしも、明かに同一の目的を有せり。捕はれたる者の救贖これなり。然ればイオアンは神性及び藉身に關する說話の順序に就きても、他福音記者に反して書したれども、彼は甚だ彼等と一致せり。抑も是れ何故に然るか、我は其理由を説明せん。是れ最初言語の未だ廣められざるや、經綸に關する教に止まり、而も多くは感覺的及び物質のことより始めつゝ、藉身に就きての教を説かざるべからざりき、然れども後に此教の鞏固にせられし時、此説教の受けられし時に一步を進むるは最も適當なりしなり。故に預言者等

がハリストスのことを述ぶるや何事よりも先づ(藉身の)經綸より説話を始む。然れば視よ、ミヘイは「イウダの地ウフレーム爾はイウダの郡中にて小き者なり、然れども我がイスラエルの民を牧する所の長者爾の中より我が爲に出づべし」(ミヘイ書)と始む。ウフレームより出でしは勿論神性にあらずして肉体なり。然れども彼は此一事に止らずして神性にも言ひ及ぼし「其出づる事は古昔より永遠の日よりなり」と云ひ、イサイヤも亦「視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムマスイルと稱へられん、譯すれば神我等と偕にするなり」(イサイヤ書七の十四)といへり。爾は如何に彼も亦肉より神性に言ひ及せるを見るか。又彼は他の個所に於ても「ひとりの嬰兒我等の爲に生れたり、我等ひとりの子を興へられたり、その名は奇妙、また議士、又大能の神とこしなへの父、平和の君と稱へられん」(イサイヤ書九の六)と云へり。爾は彼が如何に復び少年及び藉身より始めつゝ、恰も階段を昇りつゝ、神性に止まるが如きを見るべし。然れば彼の父は初に創世より認識されたり。バズル曰へり「蓋彼の見るべからざる事は、創世より以來造られたる物を察するに由りて見るべし」(一ヨハ書)と。又神自ら人類を漸次非物質的の見解に進めつゝ、數感覺的の形像を藉りて顯れたり。然れど神若し戒命および律法に於ても斯くなしたらんには神が定理に關し

て物質的の見解より非物質的の見解に進めたるは驚くべきことにあらず。故に預言者は爰に肉より神性に昇せ、「口は肉に關す」(三)——神性より復び肉に下りつゝ、己が説話をなす是れ斯る相違を以て、教へらるゝ者の救贖を立つるなり。「神よ、爾の寶座は世々に在り」。爰に寶座と稱ふるは普通の寶座にあらずして天國なり。爰に寶座は永遠なるものと名づけらるゝも、他の個所に於ては高きものと名づけらるゝ、イサイヤは「高くあがれる御座に主の坐し給ふを見たり」(イサイヤ書六の二)又「爾の御座は高し」(イサイヤ書六の十一)といひ、他の預言者は主の榮光の寶座に坐するを見たり(ダニエル九の二)といひ、ダウドは寶座を以て仁愛を示して、慈悲と審判とは「其寶座の基なり」(聖詠二六)といへり。

九。此等のことは神の國に就きて述べられたるものなり、即ち此國の終なきことなり——「世々にありて」云々の意味は左の如し、此國は光榮にして高尚堅固にして權能ありとなり。而して此國の無限なることに就きては、預言者は他の個所に於て「爾の國は永遠の國」(聖詠百四十)と云ひて之を表せり。寶座は國の表號たるが如く、權柄も亦國の表號なり、裁判權の表號なり。然れば預言者は「爾の國の權柄は正直の權柄なり」と云ふ。彼處には潔き公明、淨き正義ありて毫も隠れた

ることなし。狂氣者發狂者及び其より悪しき者は之を傾聴すべし。狂氣者及び發狂者とは何人なるか。神の照管を議し及び此等のことは何によりて斯く生じたるかと問ふ所の者なり。木工の樹木を採伐し之を鋸ることを見る者は其木工より説明をも答辭をも要めず又身体を切解し及び之を焼灼し或は病者を狹隘なる室内に閉居め之に食養法を命する醫師に對ひては其處に在る人々病者自身も亦其處置の理由を質問せず又繩を伸して帆を上下し船舷の一方を傾斜せしむる舵手に對ひて此等の巧手なる動作に就きてその理由を質問穿鑿せず縦ひ彼等の處爲に於て數々誤れることありとも黙して問はざるなり。理由を問ひ又答辭を要むるは眞に無智ならざるか斯くの如きは云ふべからざる智慧得も云はれざる仁愛無限の照管よりするか。凌辱められ及び病める者を扶け及び彼等を益するが爲に財産を與ふることは容易に決定せられずして常に此者は何故に乞食となりしか何故に貧くなりしか何によりて富みしかを穿鑿す。此は無智にはあらざるか。狡猾にして無智なる奴隸よ何に由りて爾は己の目を下方に向けじ自ら己を審定せじ己の舌を抑へじ己の智慧を制せざるか又何によりて此等のことを探究するを止めて其好智心を自己の生活に向けざるか。爾若し苦慮して智を得ん

と欲せば己の行爲己が罪の淵を視爾が云ふ所の言語爾が行ふ所の行爲の答辭を自己より要求すべし。然るに今爾は己自らを穿鑿せずして之を遺つるも斯る不注意は罰を來さん斯る穿鑿は救贖に勤むべかりしを爾は敢て神を議して新しき罪を己の罪に加へん。爾は神に對して「爾の國の權柄は正直の權柄なり」と叫ぶ所の預言者及び彼の「審判は現れ出づる光明の如し(二六の五)」と云へる他の預言者に聞かざるか。爾若し確かに己が主の爲し給ふ所の凡てを知らずとも之が爲に彼を讃揚し之が爲に特に彼に叩拜すべし。彼の云ふべからざる威嚴の爲彼の不可思議なる照管の爲彼の多様なる及び智なる配慮の爲なり。「爾は義を愛し不法を惡めり」(八)。前に預言者はハリストスの光榮なる作爲勝利戰利品。彼が眞實と溫柔と公義とを充てし所の全世界の救贖に就きて述べ又此等のことに對して將に生すべきことを示さんと欲しつゝ次に之を行ひし者の功徳に就きて云へり即ち彼は神王無限なる者方正なる審判者義人を愛し及び惡を嫉む者なることを云へり。言ふ意はハリストスは斯くの如き者なるが故に此等のことを行へりとなり。是故に何人も疑はざるべし。此等のことを行ひし者は之を能くする者の如く之を希望する者の如く行へり。預言者はハリストスの神性に関し

て高尚に叙べ、復び彼の肉体に言を下げつ、「故に神よ、爾の神は爾に膏を傅けたり」と云ふ。他の譯者は「之が爲に爾に膏を傅けたり」となす。前に述べられたることを成遂げ、不法を滅し義を植て、爾神が行ひし所を行はん爲の意なり。然れども爾等此等のことの父にも歸することを聞くとも驚く勿れ。聖書は彼に此等の作爲を奪はず、乃ち子に固有なるものを父に歸しつ、斯くの如く父に固有なるものを子に歸するなり。ハリストスは「凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者は我に屬す」(イオアン福音十)といひ、バズルも亦復活のことを述べつ、「神は彼を復活せしめたり」(コリント前六の十四)と云ひ、而してイオアンの福音に於ては「爾等此の殿を毀て、我三日にして之を興さん」(イオアン福音十九)といへり。「歡の膏」とは何の意なるか。ハリストスは膏を傅けられたり、然れど其膏つけられたりとは膏塗られたるにはあらで、聖神にて膏ぬられたるなり。是故に預言者は何人も彼の如く膏つけられざりしことを言ひ顯しつ、「爾の侶に勝れり」と加へたり。ハリストス以前に多くの被膏者ありたれども、彼の如き者は一人だもなかりき、羔は多くありたれども、彼は最も勝れたる羔なりき、子は多くありたれども、彼は獨生子なりき。此等のことは曾に神性によりてのみならず、乃ち(藉身の)經綸によりても特にハリ

ストスに適當なり、何となれば彼の外に何人も斯くの如き神をもて膏つけられざりしに由る。預言者が之を膏と名づけたることを驚く勿れ。彼は預言者たるに於て、蓋して云へるなり。彼は其喜ばしき事なるを示さん、乃ち「歡の」と云へるや宜し、何となれば「神の果は仁愛喜悅平安」なればなり(サウカヤ書)。他の譯者は「美麗の膏」(シム)となす。若し亦「樂」のとなすは、んか、そも亦正當なり。爾は「劍箭及び弓」のことを開きて、是れ劍にあらす、箭にあらす、弓にあらす、乃ち凡そ我が前に言へることを行ひし所のハリストスの能力なりと理解するが如く、「膏」に就きて聞きて、普通の膏にあらす、傳膏(成聖)なりと理解せよ。膏は唯神の印記たりき、而して膏なるもの及び肝要なるものは神なり。若し夫れ斯くの如くんば、アウラアムは膏つけられし者と名づけられ、諸預言者は悉く膏つけられざりしも、我が膏つけられし者に觸る、勿れ、我が預言者に惡をなす勿れ(聖詠百四)とあるが如く、ハリストスを被膏者と名づくることを疑ふ勿れ。ハリストスの膏つけられしは何時なるか。聖神の形にて其上に降りし時なり。イオアンが「彼の充滿より我等皆…恩寵を受けたり」(イオアン福音一)と云へる如く、預言者は爰に神に充滿せられたる衆人を「共與者」と名づく。而してハリストスに就きて



は「神が神を興ふるには限量を以てせず」(イオアン福音)と云ふ。聖書には「我々が神を一切の人に注がん」(二の廿八)といひ、而して彼處には「神より」と云はず、乃ちハリストスには凡ての神の降れるによりて「神が神を興ふるには限量を以てせず」と云はれたり。『爾の衣は皆没薬、蘆薈、肉桂の如し』(九)

十。或人々は、預言者は此等の言を以て埋葬を示すと云ひ、他の人々は之は預言者が傳膏の特別なる種類を言ひ顯すなりと云ふ。古代に於て傳膏は此等の香油を以てせずして、他のものにて行はれたり。然れば預言者は爾に之が特種の傳膏なるを納得せしめんと欲して物の差別をもて能力の差別を指示す。『爾の衣は』てふ言はハリストスの衣の恩寵に充滿されしことを示すなり。然れば血漏を患ふる婦はハリストスの衣に捫りて血漏を止めたり(マテ福音)。然れど此異なる解明を共に受くることは毫も支障なし、我は之を共に受くることを得へしと思ふなり。而して何ものも吾人に同一なることを復び述ぶるを妨げざるなり。爾は弓、劍、及び之に似たる物のことを聞きて之を感覺的に理會せざる如く、没薬、蘆薈の如きことを聞きても亦之を感覺的にあらず、乃ち靈的に會得すべし。『象牙の殿より爾を樂ましむ、諸王の女は爾の貴嬪の中に在り』(十)

預言者は前にハリストスの行ひしことを述べ、今其行爲の後に續きし所の名譽即ち彼は尊き殿に於て叩拜せらるべきを述べ。古昔象牙は最も高價にして人々の嗜好品たりき。視よ、何に由りて他の預言者は「象牙の牀に臥す所の」(マテ福音)と云ひしを。爰に説話は番に貧者に關するのみならず、諸國をも征服し、又ハリストスの爲に美麗なる聖堂の建立せらるゝことを復び示さるゝなり。是は已に前に見ゆる如く、實際に成就せり。預言者は説話の効力を示さんと欲しつゝ、説話は男女となく、貧者富者の差別なく、戴冠者と其夫人とに論なく、如何に之を捕ひ、如何に之を勝にし、又如何に到處に神の爲に聖堂を建立せしめたるかを述べ。次に預言者はハリストスの前に奉事と祈禱とを行ふ所の人々をも像りつゝ、一層説話を布演す。人民が如何にハリストスの前に俯伏し、ハリストスが如何に彼等の心に觸れ、如何に諸敵に勝ちしか、彼の右の手は彼を如何に立てしか、彼は眞實と溫柔と正義とを如何に植ゑしかを示して、今預言者は恰も繪畫に於けるが如く、聖堂教會を畫きつゝ、寓意的説話法を用ふ、後に使徒等が宣べし所のことは、唯左の言の中に在り「我爾等を一の夫に聘定せり、淨き處女としてハリストスに獻げん爲なり」(コリント後)と。或使徒は「新婦ある者は新娶者なり」(イオアン福音)といひ、他の使徒は「天國

は其子の爲に婚筵を設けたる君王の如し』(マテ二の二)といひ—預言者も亦同じく新婦及び共に女后を想像しつゝ預告せり。曰く『皇后は爾の右に立てり』と他の譯者は『柱の如く立てらる』となす即ちハリストスも他の個所に於て『地獄の門は之に勝たざらん』(マテ二の十八)と云へる如く堅固不動に立てるを云ふなり。爾は彼の女の名譽の偉大なるを見るか。その位の高きを見るか。ハリストスは踏つけられ且つ輕蔑されたる彼の女を導きて高く神の前に立たしめたり。爾は廢にせられ棄てられたる姦淫不潔なる婦人が如何なる位に達したるを見るか。彼の女は奉事する所の軍と偕に神の前に立つなり。子は父に等しき者として其右に坐す而して彼の女の立つや皇后たるに由るも彼の女は造られたる者なり。バアルは如何にして『彼と偕に復活せしめハリストスイイスに在りて天に坐せしめたり』(エズ六)と云ふか。然れども能く注意して推究せよ。彼は單に『復活せしめたり』又『坐せしめたり』と云はずして『ハリストスに在りて』即ちハリストスによりてと云へり。言ふ意は吾人の首は天に在り而して吾人はその體なるが故に、首の天に坐する時は、縦ひ不徳なる吾人と雖も此名譽に與かるとなり。『オスルの金を妝ひたり』。

吾人は神の物質的弓及び箭を用ふと理會せざる如く、新婦に於ても物質的衣を要すと理會せず乃ち感覺的の物より靈的意味に昇るべきなり。而して何人も愛に斯る事を理會せざらん爲に預言者は『王の女の光榮は皆内にあり』(十四)と附加へぬ。衣服は他物よりも多く吾人の見る所なり而して體の衣は吾人の見るが如きものなるも靈的衣に就きて云はるゝ時は、宜しく目を己が智慧の内部に進むべし。王は此衣を織り又教會は洗禮に於て之を衣たり使徒曰く『爾等皆ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり』(ガラヤ二)と。王の女は前に裸體にして醜く道を行く衆人に接近されしも此衣を着るや否や高きに昇りて神の右に立つを得たり。彼の衣は一樣ならず何となれば救贖の爲には常に恩寵のみならず信仰も必要に信仰と偕に善行も亦必要なればなり。然れど今は衣服に就きて云はざらん。婦人の金衣を叙する特別なる目的の如きは本講の精神にあらざればなり。イヤイヤ若し己を飾る所の婦人を譏責し又到處に奢侈を議する時はハリストス如何にして婦人の裝飾を稱美せんや。『女よ之を聴き之を觀、爾の耳を傾けよ、爾の民と爾が父の家とを忘れよ。王は爾の美しきを慕はん、蓋彼は爾の主なり、爾彼に伏拜せよ』(十二節)、『テール

の女は禮物を携へ、民中の富める者は爾の顔を拜まん(十三)。  
 十一。爰には毫も感覺のこと具體のことなくして、悉く心靈的なことを爾  
 は見るか。實際同一人が如何にして新婦たり、又女たり得るか。如何にして女た  
 り、又新婦たり得るか。肉の事に於ては是れあるを得ず、乃ち或者は新婦たり、或者  
 は女たるなり、然れど神に在りては女たると同時に新婦たるを得。神は自ら洗  
 禮をもて教會を生めり、而して其教會を以て己の新婦となせり。「女よ、之を聽  
 き、之を觀よ」。神は彼に二の幸福を賜へり、言の教及び奇蹟と信仰とに於ける  
 異象是なり、而も一は既に彼に賜はり、一をば約束せり。言ふ意は、我が言を聽き、我  
 が奇蹟と行爲とを見、又訓戒に注意すべしとなり。神は何事よりも先づ如何なる  
 誠命を教會に與ふるか。「爾の民と爾が父の家とを忘れよ」。彼は異邦  
 人の中より教會を選びたるが故に、何事よりも先づ此親類を棄て、之を忘れ、之を心  
 中より滅し、昔に之を遠ざくるのみならず、之を憶出すことをさへ禁ず。「爾の民  
 と爾が父の家とを忘れよ」。預言者は「民」と「家」てふ言を以て、凡そ彼處に  
 彼等の中に生ずる所の生活をも教をも言ひ顯すなり。「王は爾の美しきを  
 慕はん」。爾は爰に肉體の美に就きて言へるにあらざるを知るか。言ふ意は、爾

若し之を行はば、爾は美しき者とならん、王は爾の美しきを受せんとなり。然れど  
 も肉體の美は之を生せず。吾人は不信者にも肉體の美しき者あり、異邦人の間に  
 も端麗なる婦人あるを見る。預言者は爾をして爰に肉體の美に就きて云はれし  
 にあらざることを納得せしめんが爲に、此美は神に従ふに在るを述べ、而して順從  
 は肉體の美にあらすして心靈の美を成す。言ふ意は、爾若し之を爲さば美しき者  
 とならん、新娶者に愛せらるゝ者とならんとなり。「蓋彼は爾の主なり」。視  
 よ、彼は同じく父とも顯され、新娶者とも顯され、主とも顯さるゝを。己の父を遺て、  
 己の民を忘れ、親類と絶つべきを戒めて、彼は此等の誠の甚だ正しきこと、彼の説話  
 の中に大なる順序あること、此事の斯くあるべきことを證す。實際に彼は爾の父  
 たり、新娶者たり、主たらんには、正義は他の凡ての者を遺て、彼を戀ひ慕ふべきな  
 り。「彼は爾の父なり」と云はずして「彼は爾の主なり」と云へるは、主たり主宰  
 たる父は教會の新娶者ともなるを嘉されしことを以て、格段に教會を引寄せん爲  
 なり。而して神が教會の主たることを嘉され、悪鬼の奴隸となりし者、迷謬の軌の  
 下にありし者を選びて己の奴僕となし、のみならず、之を己の女となし、新婦とな  
 し、しことは、既に神の大なる照管と仁愛とを證するなり。爾は他の者の許に行く

にあらず乃ち爾を造りし者凡ての者よりも爾に近き者爾の爲に慮る者の許に行  
 くによりて「爾の民と爾が父の家とを忘れよ」彼は主にして爾の父なり、  
 彼は万物を爾に賜へり。「爾彼に伏拜せよ。テルの女は禮物を携ふ」  
 爰に説話に如何なる連關あるか。絶妙なる接續あり。此等の言の中には最も強  
 き勸説あり。言ふ意は來たれ彼の能力は大なればなり然らば衆人は主に従はん  
 となり。預言者は全世界のことを云はすして當時不虔に陥り悪魔の城となり、  
 又極めて富み榮えし所の隣の城市を指示せり彼は部分を以て暗に全部を示すな  
 り。

我には又彼が凡ての不虔及び放蕩を斯く名づけたることと思はるゝなり。聖書  
 は城市の名をもて人々の氣質を表すことあり例せば「爾等ソドムの有司よ主の言  
 を聞け爾等ゴモラの民よ我等の神の律法に耳を傾けよ」(イサイヤ一)とあるが如き是  
 なり。此はイウデヤ人に對して云はるゝも彼等はソドムの行爲をなしゝが故に、  
 ソドム人とも名づけらるゝなり。而して聖書がイウデヤ人に對して「汝の父はア  
 モレヤ人爾の母はヘッテ人なり」(エゼキヤ一)と云ひて彼等に斯る父を與へ彼等を稱  
 するに斯る生國を以てしたるは驚くべきことにはあらざるなり。隨責は之にも

止まらず新約に於ては「蟻の類よ」(ルカ福音)と云ひ舊約に於ては「彼等は蟻の卵をか  
 へし蛛網をおる」(イサイヤ五)と云ひ「我は爾等を視ることエズオビヤ人を視るが如  
 くするに非ずや」(アモス書)と云へる如く動物にすら言語を下せり。然れば爰にも不  
 虔及び放蕩なる生活をなす者を彼は「ソル人」と名づけたり。然れども彼謂らく「我  
 (神)は彼等にも勝ちて己に服従せしめ彼等が叩拜する程に服従せしむ而して彼等  
 は單に叩拜するのみならず高尚なる種々の勤務を爲して全然たる服従の徴とな  
 る禮物と初果とを献すと」。「民中の富める者は爾の顔を拜まん」。「拜  
 まん」とは何の意なるか。大なる者高き者等の彼を尊敬讃揚するとなり。教會  
 に於ては斯く行はる即ち衆人衆人衆人へ富貴なる者も善行を行ひて生活する者を尊敬  
 す何となれば善行は凡ての富に勝ればなり。

十二。爾等も亦視るべし教會が如何に衆人を尊ぶかを。預言者が「爾の顔」即ち  
 爾の光榮、爾の美麗、爾の高大を拜まんと云へるや善し。彼は斯く顔と衣服及び美  
 麗に就きて述べたるによりて、或野鄙なる人々の之を感覺的に想像せざらん爲に、  
 次に「王の女の光榮は皆内にあり」(十四)と云へり。言ふ意は、教會の心情  
 を洞察し其靈の美を知れ我は此事に就きて爾に云はん、縦ひ我は衣服美麗黄金縁

流蘇珍貴なるもの及び其他之に類するものに就きて述ぶるとも、説話は心に就きて教は靈に就きて言は善行及び内部の光榮に就きて云ふなり。次に彼は前に述べられたる言を以て、既に愚なる聴衆を悟らしめて、敢て復び感覺的の畫に説話を向けたり。「其衣は金を繡とせり」。他の譯者は「金の縁流蘇にて飾れり」(不明の)となす。金の名の下に預言者は復び善行を意味す。然ればパヅルも「人若し斯の基の上に金銀寶石木草稗を以て建てば」(コリント前)と云ひて、此等の物名の下に善行と惡癖とを示せり。是れ爾が内部に含蓄する所のものを、斯くの如きものとして想像せざらん爲に、彼は爾に外部に止ることを許さずして、爾の思想を内部に進むるなり。黄金を着けたる體の美しく見ゆるが如く、善行を衣たる靈も亦美しさものとなるなり。「童女は彼に従ひて王の前に進めらる」(十五)他の譯者は「從ふ」(不明の)となし、第三の譯者は「彼の隣人等は爾の許に導かる」となす。「樂み祝ひて導かれ、王の殿に入る」(十六)。爾は裝飾れる衣服を見るか、金の衣處女の花を見るか。是は教會の衣服なり。然れば視よ、預言者は如何に正確に云ふかを。處女之美麗なる花は教會の建設されし後直に咲かずして、既に若干時を経て後に咲きたるが故に、彼は此事に就き、教會

は己が父の民と家とを忘れ、内部の美にて飾られ、善良にて輝けりと云ひて後に云へり。是故に彼は「彼の隣人等は彼に従ひて導かる」と云ふ。「隣人」とは管に場所によりてのみならず、生活の狀態によりても、教によりても、教會と一致したるものにして、異端者等の童女を名づくること能はざるものなり、何となれば彼等は此王后に近き者にあらざればなり。「彼等は樂み祝ひて導かる」。視よ、如何に爰にも使徒の教は輝き、使徒の如き表言の預言者にも啓發されしかを。そも此教は如何なるものなるか。「娶りたる者は其身難に遭はん」(コリント前)。結婚者の艱難あるが如く、童貞者は樂と喜びとを有す。嫁は子女或は夫、或は家、或は下男或は親類、或は舅、或は婿、或は孫、或は子供多き及び子供なきに就きても慮らざるべからず、然れど今は結婚生活の多くの掛念を記する時にあらず、然るに童女は(肉の爲に)十字架に釘うたれ、現世のことを絶ち、世計の上に立ち、世の騷擾を遠ざかり、毎日天を見つゝ、神の喜をもつて喜び樂むなり。然れど預言者は現世のこともみならず、未來のことも云ふなり、童女等が潔白なる及び光明なる燈を携へて新娶者を出で迎ふる時の如き是なり(首廿五の七)。彼は爰に王の住所を王の殿と名づけ、婚姻の宮殿を象牙の宮殿と名づく。「爾の列祖に代へて爾の諸子あら

ん(十七)。彼は前に「爾の民と爾が父の家とを忘れよ」と言ひて、人民と父とに就きて記憶せるが故に、教會が斯くの如き状態に於ても大なる幸福をもて樂むことを示さんと欲して、此等の言をも加へたるなり。懷孕まざるものは無数なる子女の母となる。言ふ意は、縦ひ爾は兩親より離さるゝとも、爾には全世界に充滿する程の榮譽あり光明にして著しき多くの子女あらんとなり。

十三。我思ふに、預言者は爰に教會の教師たりし使徒に就きて云ふなり。次に使徒等の能力、權柄、光榮を記しつゝ、「我は之を立て、全地の牧伯とせん」と附加ふ。此等の言を説明するは必要なるか。我は爾思はず、太陽に就きては、太陽は光明なりと云ふの要なきが如く、前に述べられたることは、之よりも一層明かなることなり。實に使徒等は、普く全世界を廻り、凡ての諸侯伯の上に主宰者となり、又諸王よりも強き者とれなり。諸王は生時主權を探り、死後之を失ふも、使徒等は死後にも尙主權を探るなり。諸王の律法は、川範圍内に効力を有するも、漁者等の法賊は全世界に弘布せり。ローマの王は、ペルシヤ人に對し、ペルシヤの王は、ローマ人に對して、律法を制定するを得ず、然れど此等のパレスチナ人は、ペルシヤ人にも、ローマ人にも、フラキヤ人にも、スキフ人にも、インド人にも、マウル人及び全世界にも、律

法を授けたり。此等の律法は、曾に彼等の生時のみならず、死後にも効力を有す、而して一度此誠命を奉じたる者は、之を遺てんよりは、寧ろ己の生命を授くるに決心したりしなり。「我爾の名を萬世に誌さしめん、故に諸民爾を讚榮して永遠に迄らん(十八)。他の譯者は「我爾の名を萬世に記憶せん、是に由りて諸民常に爾を讚榮せん」(アキラ、シムマフ)となし、他の譯者は「其が爲に諸民爾を讚榮せん」(譯者)となす。これ預言者は、地の廣濶なる世界、世界の巨大なる教會に、信從せし人民の數多きを以て、教會の權柄の偉大なるを説明し、又教會が曾に全世界のみならず、世々に擴張弘布することを以て、他方面より教會の價値を説明するなり。言ふ意は、吾人の書に書かれ、一般の順序に於て書かれ、律法の中に書かれたる爾の記憶は、不死ならんとなり。視よ、彼が如何に其預言の永續することを預告するかを、何となれば、彼は「我爾の名を萬世に誌さしめん」て、言をもて此意味を顯したればなり。言ふ意は、縦ひ我死すとも、死後にも爾を讚願せん、我が體は破るゝとも、聖書は存し、律法も亦永遠に存せんとなり。「故に諸民爾を讚榮せん」。預言者は、始めしことを以て終り、即ちハリストスをもて終りたり。「故に」とは何故になるか。爾が斯く大なる事を行

ひ斯る柄權者を立て、惡を制して善行を植ゑ、吾人の天性を結納として自己に取り、言ふべからざる幸福を得しめたるが故なり。故に「全世界は讃頌の歌を献る」と十年二十年若くは百年ならず、又世界の或部分に於てするにあらず、陸にまれ海にまれ、人の住居する所にまれ、せざる所にまれ、神が賜ふ所の幸福の爲に感謝を献りつゝ、世々に謳歌せん。吾人は此等のことの爲に光榮の今も何時も世々に父と聖神と偕に歸する仁愛なるハリストスに感謝せん。アミン。

第四十五 聖詠講話

ユレイの諸子の歌。

神は我等の避所なり、能力なり、患難の時には速なる  
 佑助なり。故に地は動き、山は海の心に移るとも、我  
 等懼れざらん(一節至三節)。

一。預言者は彼に特有なる智慧をもて、爰に世事より聴衆を避けしめて高尚なる希望に導くなり。彼謂らく、武器城壁壘柵財貨戰術の巧妙馬の多きこと、弓箭甲冑、戰友の群分遺隊、體力軍士の老練を我に示す勿れ、此等のことは皆蛛網及び陰影よ

りも薄弱なるに由ると。爾若し勝たれぬ能力變らざる避難所勝れざる城堅牢なる牆壁を見んと欲せば、神に趨りて彼の能力を待め。預言者が吾人の時としては遁走りて征服されしことを言ひ顯し、又時としては神の鞏固なることと、吾人を扞禦することとを示して、「神は我等の避所なり、能力なり」と云へるや宜し。實に自他共に之を爲さんことを要す即ち時としては近づくべく、又時としては遠ざかるべきなり。然ればパウロも真理の言に反抗する者に對しては、時としては遠ざかり、又時としては之に對して起てり。ハリストスも亦斯く行ひて吾人を救へたり。吾人も斯く行はざるべからず、即ち時の事情を注意觀察して祈願せざるべからず、是れ福音に言へるが如く、誘惑に陥らざるが爲、又誘惑の吾人に及びたる時は、小膽ならず、凜然として起たん爲なり。「患難の時には速なる佑助なり」。我は屢々前に述べたるが如く、今も亦云はん、何となれば神は患難の吾人に及ぶとを妨げざるも、其患難の至る時は、斯くして利益と經驗とを吾人に得しめつゝ、吾人に助くればなり。實に神の助くるは辛うじてにあらず、己が豊富なる佑助を以て患難の中に大なる慰籍を興ふるなり。神は吾人に患難の性質によりて要するが如き佑助にはあらで、乃ち患難よりも遙かに大なる佑助を興ふ。「故に地は動

くとも我等懼れざらん。爾は神が如何に大なる佑助を與へ又如何に豊富に與ふるを見るか。彼は吾人は征服せられざらん、仆れざらんと云はざりき、乃ち總じて人生に固有なることをも受けざるを顯しつゝ、懼れざらん」と云へり。是れ何故なるか。神の佑助の無量なるに由る。爰に預言者が地といひ、山といひ、又海の心と云ふは、自然物を指すにあらず、此等の名稱の下に堪ふべからざる危険を意味するなり。言ふ意は、縦ひ吾人は万物を以て破壊する所のものと見るとも、堪へられざる混乱を見ることも、未だ嘗て在らざりし事に遭遇すとも、云はば万有の互に相反くとも、山の移るとも、万物は其根底に於て動きて混乱すとも、如何程大なる混乱の生ずとも、斯る時に於ても吾人は打勝れざるのみならず、乃ち「懼れざらん」。而して此万有の主宰が吾人を助け、手を指し、伸べて助くることは、吾人の懼れざる原因たるなり。吾人若し斯る場合に於て懼れずして、武器を備ふる時も、毫も懼れざらん。人々を攻撃するありとも、反對者の吾人に對して武器を備ふる時も、毫も懼れざらん。『其水は號り激くべし、其濤たつに依りて山は震ふべし』(四) 預言者は万物を混亂すとも、吾人は懼れざらんと云ひて、次に神の能力に就きて、其能力は勝れずと云ふ。故に彼の「懼れざらん」と云へるや、正し、而して常にありしが如

く、今も或は萬有に於て、或は人々の間に生ずる事件に於て神の能力を示すなり。此言の意味は左の如し、即ち神は己の能力によりて、万物を揺撼震動し、之を變易す。神の爲には万事は意の儘にして且つ容易なり。我は預言者が爰に諸敵の中にて最も巧妙なる勇ましき人々の群、無數なる多くの反對者を理解すと思ふなり。然れども彼謂らく、神の能力は其一手號により、万事成全せらるゝが如きものなりと。吾人は斯る主宰を有ちながら如何にして懼るゝか。『河の流は神の邑至上者の聖なる住所を樂ましむ』(五) 『神は其中に在り、其れ撼かさらん、神は早朝より之を佑けん』(六) 預言者は神の全能及び能力に就きて、神の爲には万事容易なることを述べ、簡短なる言を以て、イウデヤ人等に顯されたる仁慈を畫きつゝ、神のイウデヤ人を照管することに移れり。斯くの如く強く、斯くの如く全能に、斯くの如く畏るべき所の者、万有を維持し、之を保全し、万物を揺撼震動し、萬物を轉覆し、之を變改する所の彼は、無數の善を以て吾人の市邑に充滿せり。『河』は爰に高尚なる善の豊富潤澤にして、滔々と流出づることを意味す。預言者は恰も左の如く云ふが如し、水の源泉より流出づるが如く、凡ての幸福は吾人に注がるゝなりと。河が多く、其流域を濕潤すが如く、神の照管



も亦豊かに流出して萬事に進達し之を充滿しつゝ諸方より吾人を潤澤すなり。神の照管は吾人に安全及び勝たれざる扶助を與ふるのみならず心靈上の喜をも得しむ。是に由りて預言者は「至上者の聖なる住所を樂ましむ」と云ふ。而して此場所を己の住所と名づくる所の其仁慈も亦少々たらざるなり。

二。彼が「至上者」云へるや空しからず。如何なる場所にても包容する能はず。言ふべからざる程高き者は吾人の市邑を己の住居と名づけ諸方より之を守護す。「其中にありて」云ふ言の意味は彼が他の個所に於ても「視よ我爾等に在り」(マテオ八廿)と云へると同一なり。神は諸方より市邑を包容するが故に市邑は毫も患難を受けざるのみならず又毫も「撼かざらん」。而して市邑が常に最も速なる扶助を受けることは其撼かざるの原因たり即ち此「早朝」なる言は猶豫せざる扶助乃ち常に準備したる時及び適當なる時に於て速に助くる所の扶助を意味するなり。「諸民は騒ぎ」。他の譯者は「諸民は集れり」(ラキ)となす。「諸國は撼けり、至上者一たび己の聲を出せば地は融けたり」(七)。爰に預言者は神の扶助と能力とを書けり。言ふ意は些細なる危険にあらず乃ち王及び諸民が諸方より攻撃して吾人の一市を包圍する時彼は曾に彼等より毫も患難を受

けざるのみならず攻撃者に打ち勝ちて之を散らせりとなり。「諸國は撼けり、至上者一たび己の聲を出せば」云ふ言は恰も只一聲をもて諸市を征服したるが如きを意味するなり。此表言は感覺的なり人事的なり神は聲と叫とを以てのみならず一の手號及び同意をもて打勝つことを得れども爰に聴衆を感覺的見解以上に高めんとを望みつゝ以前の表言よりも高尚なる表言を用ひしなり。彼は神を常に武装する者と想像し及び此等のことが寓意的に具體的に及び吾人に適合したる意味に於て述べられしことを示さんと欲しつゝ「爾等の知れるが如く神は斯る何事にも必要を有せざるなり」彼は今番に市邑と諸民および住所のみならず神は其實質をも撼かすことを表言しつゝ「一たび聲を出せば地は融けたり」と附加へぬ。然れど聖書は數々人々をも「地」と名づく例は「全地は一の言語のみなり」(創世記十)とあるが如き是なり。「萬軍の主は我等と偕にす、イアコフの神は我等を護る者なり」(八)。エウレイ語に於ては「萬軍」の代りに「サワオフ」とあり。視よ如何に預言者が己の言を地より天に天使の無数の集會、天使長の集會即ち至高の萬軍に向くるかを。彼謂らく軍隊諸敵征服せらるゝ人々に於て何事を吾人に示すかと。天國に於ける神の能力を想

像せよ、即ち神は見えざる万軍の幾何を己の襟内に有するかを想像すべし。預言者は他の個所に於て「能力を具へ、其言を行ふ者よ」(聖詠百)と云へる如く、天使の權力を示しつゝ、彼等を「万軍」と名づけたるや宜し。然れば嘗て一天使降りて十八万人を殺せり(第四列王紀略、十九の三十五)。神若し爾く強からば、佑助の手を吾人の上に伸すことを欲せざらんや。彼は之を危ぶむ勿れと言ひ、是に由りて「我等を護る者なり」と附加ふ。神は之を能くし、又欲し給へば懼るゝ勿れ。然れど吾人若し不當ならば如何にせん。然れども神は吾人の列祖に對して仁慈なりき。是故に「イアコフの神」と附加へて左の如く云ふが如し、神は常に昔より即ち始めより斯く行ふと。「來りて主の爲し、事其地に行ひし掃滅(一本には奇)を視よ。彼は地の極にまで戰を息めて、弓を折り、矛を折き、火を以て兵車を焚けり(九節)」。他の譯者は「火を以て兵車を焚けり」と「火を以て盾を焚けり」となす。預言者は地と海と山及び靈的守護と彼等に顯し給へる佑助とに就きて言ひつゝ、其大なる喜と主に對する己の愛とによりて、此等の戦利品を示し、又神が彼等の爲に保ちし所の勝利を報じつゝ、復び説話を觀覽者に向く。預言者が「奇蹟」と言ひて勝利及び戦利品と言はざりしや善し。實に此時の事件は事物

の普通の順序によりて生じたるにあらす、勝利を得たるは武器及び肉體の力によらず、乃ち神の手號に由りてなり、而して其事蹟も主自ら彼等の先導者たりしことを示すなり。弱き者は強き者を、小數の者は多數の者を、窘迫せらるゝ者は窘迫する者を征服したり、而して此等のことの意外に行はれたるが故に、彼は奇異にして遺寓したること及び全地に延蔓したる此事を正しく奇蹟と名づけたるなり。

三。之を寓意の意味に於て現在に應用する者も誤らざりしならん。ハリストスは悪鬼との残酷なる戦争を鎮定して、平和を全世界に擴めたり。イサイヤは此事を書きつゝ、「斯くて彼等は其劍をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし、國は國に對ひて劍をあげず、戦闘のことを再び學ばざるべし」(イサイヤ四)と言へり。

ハリストスの降らざりし以前に於ては、人々皆武装し、何人も此業務を免れざりき、市は市と戦ひ、到處に戦闘の騒擾聞えき、然るに今や世界人類の大部分は平和の中にあり、衆人は安然にして職業を營み、地を耕し、海を航し、唯其小數の人々は他の凡ての者を保護するが爲に軍職を帯ぶるのみ。而して吾人もし將に爲すべきことをなし、罰を以て記憶の中に不要ならしめば、軍人を要せざりしならん。預言者は爰に神の怒を「火」と名づけ、又彼等が大勝利を得て己の武器と兵車とを焚き、イエ

ゼキイリの告げしが如く應じたることを云ふなり(イエセキイリ)。此事實は知識を得ることを好む者に著し。『爾等止りて我の神なるを識れ我諸民の中に崇められ地上に崇められん』(十一)。思ふに是れ預言者は爰に異邦人に報ぐるものにして恰も左の如く言ふが如し、主の能力と其全世界に顯し、權力とを識れ唯爾等は之が爲に平安なる者とならざるべからず、強壯なる靈を有せざるべからずと。『止まりて』てふ言は爾等が奇蹟に導かれ平安なる心を有しつゝ衆人の主宰を認識せんが爲に迷謬を棄て生活の以前の狀態より遠ざかり吾人を圍繞める悪行の暗黒を脱すべしとなり。之が爲には唯奇蹟を知るのみにては足らず乃ち感謝の心をも有せざるべからず。イツデヤ人にも亦奇蹟ありき而も其奇蹟は毫も彼等の救贖に益する所なかりき。見るが爲には太陽の光線のみにては足らず乃ち強壯にして清らかなる目を要するが如く爰にも亦一の奇蹟のみにては足らざるなり。視よ何によりて預言者は奇蹟より益を得んと欲する者にして神を識らしめん爲なり。『止りて我の神』にして偶像にあらず彫像にあらずるを『識れ』止まれ我神亦爾等に多くの證據を示さん。『我諸民の中に崇め

られ地上に崇められん』てふ言は之を示すなり即ち我は行爲を以て爾等に大なる者且つ高き者と顯されんの意なり。神の本體は朽ちざるもの且つ得も云はれざるものにして自ら高し然れども爾等は之を見ざるが故に我は管にパレスヲナ及びイエエルサラムに於てのみならず爾等—異教人の間にも行爲を以て之を爾等に示さん。然れば神はワオロンに於てもエギベトに於ても曠野に於ても全世界においても勝利を得奇蹟を行ひつゝ讚揚せらる是れ彼等をして到處に神を識ることを得しめん爲なり。『萬軍の主は我等と偕にす』イアコフの神は我等を護る者なり(十二)。此何處に於ても大なる神何處に於ても高き神は常に我等と偕に在すなり。然れば斯る勝たれぬ主を有しつゝ恐れ亂るゝ勿れ願くは悉くの尊貴光榮は今も何時も世々に彼と始なきの父と生命を施す彼の神とに歸せん。アミン。

### 第四十六 聖詠講話

コレイの諸子の詠。

萬民よ手を拍ち歡の聲を以て神に呼べ。蓋至上の

主は畏るべくして、全地を治むる大王なり(三節至)。

一。此聖詠は前に述ぶるが如き同一の内容にして、預言者は之を以て諸敵に勝ちて戦利品を獲たることを像り、又全世界を招きて、成功者を讃頌せしむ。然れども恐らく或者には聖神の訓戒の初詞及び此命令即ち拍手喝采および騒然たる呼聲も不當なること、思はるゝなるべし。人或は定めて云はん曰く拍手喝采は此尊敬すべき學校に集らすして、観物及び宴會に於て技を演ずる者に適當なるが如く、平安と静肅とは神の恩寵に教へらるゝ人々に適當なりと。此等の言は何事を表すや。實に戦争及び攻撃に於て歡聲を發し及び拍手するの風習あるは、是れ敵を恐れしめん爲にして、此事たる平安なる靈に不適當なりとす。然れど聖詠は人を拍手と歡聲とに招くなり。前に述べられたることは何を意味するか。歡喜と勝利とを意味するに外ならざるなり。然れば預言者は他の個所に於て河を拍手する所のものと想像して「河は掌を拍つべし」(聖詠九十)と云へり。イサイヤも亦木を同じく拍手するものと想像し(イサイヤ廿五)聖詠者は他の個所に於て山及び邱を躍るものと想像せり(聖詠百十)然れど是れ文字の儘に山及び邱は躍り、又河の恰も手ありて拍手するが如くに理解すべきにあらず。斯く思ふは極めて無智なりしならん。

乃ち此上なき歡喜を顯したるなり。人々に於ても同一のこのことを見ることを得。何故に預言者は喜び樂むと云はずして「手を拍ち及び呼べ」と言ひしか。是れ最も大なる喜悅を吾人に示さん爲なり。ハリストスが「爾齋する時首に齋ぬり、面を洗へ」(音六の十七)と言へるは實際に齋ぬることを命するにあらず。吾人の中何人も斯くの如くには行はず。乃ち靈の歡喜と心の樂しき状態とを示すが如く、爾等の知れる如くハリストスは喜びて齋すべく而して憂悶して齋せざるべきを誡めたり。爰にも亦吾人に手を拍つことにあらず、乃ち聖詠を歌ひつゝ、歡び樂むべきことを誡めらるゝなり。然れど此聖詠を歴史的事實を離れて寓意的に理解するは正當なるべし。縦ひ預言者は感覺的に畫きて說話を始むとも、彼は心靈上の事に聽衆を導くなり。

我は前に言ひしが如く、今も亦言はん即ち聖書の中の或ことは言の儘に理解すべく、或ことは寓意的の意義に理解せざるべからず。例令ば「狼は小羊と偕にやどり」(イサイヤ卅)と言はるゝ時の如き是なり。吾人は爰に狼をも、小羊をも、牧場をも、牡牛をも、犢をも會得せず、乃ち無言なる動物の状態を以て人々の氣質を想像す。又或ことは兩面の意味即ち感覺的及び心靈的の意味に受けざるべからず。例令ばア